科目名	倫理学	担当教員	清水　俊

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活・社会の理解							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	大学や専門学校で倫理学・哲学を担当し、またフィールドワーク調査してきた経験を活かし、専門家に必要な倫理や論理的思考を教えることができる。
授　業　概　要	基礎から倫理について学び、倫理の必要性や考え方、現代の問題への応用について学習する。
到　達　目　標	倫理的な考察力を身に着ける。新しい課題に直面した時、自ら考えられる論理的判断力を身に着ける。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	嘘をつくこと(教科書第１節)	カントの考えなどから、「常にすべきこと」という義務について学ぶ。
2	功利主義(２節)	功利主義的な考え方と、その問題点について学ぶ。
3	薬の配分方法(３節)	「誰かしか助けられない」ような問題について、自ら考えて答えを出してみる。
4	エゴイズム　(４節)	エゴイズムがどこまで許されるのか、エゴイズムとは何かについて考える。
5	幸福の計算　(５節)	功利主義の習性案について学ぶ。
6	判断能力と価値判断　(６節)	判断能力とは何か、それをだれが判断できるのかについて考える。
7	価値判断と事実判断(７節)	価値がどのように導き出せるかについて学ぶ。
8	正義の原理　(８節)	正義の原理が定められるかどうかについて学ぶ。
9	思いやりからの道徳　(９節)	思いやりだけで道徳が成立するか考える。
10	囚人のジレンマ　(10節)	正直者が損をしないためにはどのようにしたらいいか、それが可能かを考える。
11	愚行権　(11節)	愚かな行為をする権利はどこまであるか、愚かな行為に対してどこまで介入していいのかについて考える。
12	貧しい人への義務　(12節)	貧しい人、困っている人に対して助けるべきか、誰が助けるべきかについて考える。
13	未来の人への義務(13節)	未来の人々に対する義務のあり方について学ぶ。
14	正義の変化　(14節)	時代や文化による正義の違いについて考える。
15	科学の限界　(15節)	科学の発展に限界を設けるべきかどうかについて考える。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を読んでおく。
成　績　評　価	☑ 定期試験　(80 %) ☐ 実技試験　(%) ☐ 小テスト　(%) ☑ レポート　(20 %) ☐ 課題　(%) ☐ 発表　(%) ☐ その他　( )
教　科　書	現代倫理学入門（講談社学術文庫）
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	手話	担当教員	福田　九

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	人文科学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	地域の手話奉仕員養成、大学での手話言語研究で得た成果をもとに、言語聴覚士として手話を必要としている方とコミュニケーション関係の構築、支援について講義・演習ができる。
授　業　概　要	ろう者の暮らし、手話の歴史、聴覚障害、ソーシャルワーク哲学を身につけることによって、ろう者・聴覚障がい者に対する支援技術を高める。
到　達　目　標	・手話、手話言語に対する違いを説明できるようにする。 ・手話で話せるようにする。（日常会話ができるようになる）

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	本講義概要説明、文献の使い方等を学ぶ。
2	手話と手話言語の違いについて	手話と手話言語の違いについて、ろうあ運動、日本手話ＶＳ日本語対応手話論争等の歴史を学ぶ。
3	ろう者・聴覚障害者の呼称について	医学モデル、社会モデルといった範疇から呼称から歴史的背景を学ぶ。
4	手話の必要性について	聴覚障害者全ての人が手話を必要としているわけではない。中途失聴者や高齢者の聴覚障害等の分類からコミュニケーション技能の多様性について学ぶ。
5	支援と援助の違いについて	手話でのコミュニケーション関係のなかには、支援者、援助者といった立場に置かれる場合がある。その人との立ち位置を考慮しながら関係性の構築について学ぶ。
6	ろう者の福祉について”福祉”の本質は？	ろうあ運動の歴史からろう者が求めてきたものを通して、ろう者の福祉について考察を深める。
7	歴史を学ぶことの意味を考える	手話を必要としているろう者の生育歴、学校歴、家族構成といった環境から手話の取得は様々である。背景について深める。
8	ＩＣＦ（国際生活機能分類）による支援の視点を学ぶ	支援についてのポイントを学ぶ。
9	ろう者の暮らしについて考える①	ろう者の暮らしを物語から考察する。①
10	ろう者の暮らしについて考える②	ろう者の暮らしを物語から考察する。②
11	（トレーニング）シャドーイング（自己紹介）	手話者のリズム、イントネーション、アクセントを身につけるために繰り返し、トレーニングする。
12	（トレーニング）シャドーイング（暮らし）	手話者のリズム、イントネーション、アクセントを身につけるために繰り返し、トレーニングする。
13	（トレーニング）シャドーイング（学校生活）	手話者のリズム、イントネーション、アクセントを身につけるために繰り返し、トレーニングする。
14	（トレーニング）シャドーイング（旅行）	手話者のリズム、イントネーション、アクセントを身につけるために繰り返し、トレーニングする。
15	本講義の統括	本講義の統括、まとめ。今後の地域社会における手話社会の展望等を考える。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	本講義は、手話でコミュニケーションができることを最低限の到達目標と捉えており、講義外の練習は必要である。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 30 %）☑ 実技試験　（ 40 %）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 30 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	わたしたちの手話学習辞典Ｉ（全日本ろうあ連盟出版局）
参　考　書	授業時に紹介する。
授業の留意点・備考	授業中に、手話単語、表現、意味を説明しながら進める。

科目名	スタディスキル	担当教員	有働　正二郎 山田　勝久

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	基礎分野	教育内容	人文科学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	１０年以上におよぶ専門学校での教育経験と教員研修において教育学を学んだことを活かし、学習の進め方やノートの取り方等の指導ができる。
授　業　概　要	専門学校における学習の意義や心構え、基本的なスタディースキルを習得することを狙いとし、ここで得られた基本的学習スタイルは、全ての専門教科・専門基礎教科を学ぶための共通技能となる。
到　達　目　標	専門学校における学習の意義について説明できる。授業を受ける上での心構えについて説明できる。効果的な集中の仕方・記憶の方法について実践できる。効果的な文献の読み方、専門書の活用の仕方、学習補助ツールの活用について実践できる。効果的な自宅学習の進め方・ノートの取り方について実践できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション　（有働）	専門学校における学習の心構えについて概略を理解した上で、学習習慣についてしっかりと学ぶ
2	学習法　（有働）	自己学習の進め方や集中の仕方及び記憶力トレーニングの方法について学ぶ
3	学習法演習　（有働）	実際に記憶力トレーニングの演習を行う
4	レポートの書き方とルール　（有働）	レポート表紙の書き方やレポート提出のルール、レポート表紙規定やレポート本文規定について学ぶ
5	図書室の利用法　（有働）	基本的な図書館の利用の方法について学ぶ。
6	文献検索の方法　（有働）	インターネットを活用した文献検索の方法について学ぶ
7	雑誌の活用法　（有働）	図書室で興味ある雑誌を選び、感想をレポートとして提出する
8	文献の読み方・専門書の活用　（山田）	種々の文献や学習補助ツールの活用法を学び、演習する
9	ノートの取り方①　（山田）	授業におけるノートテイクの仕方について学び、演習する
10	ノートの取り方②　（山田）	授業におけるノートテイクの仕方について学び、演習する
11	自宅学習の進め方と自己学習ノートの作り方①（山田）	自宅学習における学習ノートの活用について学び、演習する
12	自宅学習の進め方と自己学習ノートの作り方①（山田）	自宅学習における学習ノートの活用について学び、演習する
13	自宅学習の進め方と自己学習ノートの作り方②（山田）	自宅学習における小テストの活用について学び、演習する
14	自宅学習の進め方と自己学習ノートの作り方②（山田）	自宅学習における小テストの活用について学び、演習する
15	学習習慣について　（山田）	自身の学習習慣について振り返り、問題意識を持つ

準備学習（予習復習）の具体的な内容	ここで学んだ内容を、日々の学習に活かすこと
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 10 %） ☑ 課題　（ 90 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	なし　※資料は教員が準備します
参　考　書	なし
授業の留意点・備考	参加型の授業の際は、学生同士で積極的に意見を交わすこと

科目名	総合教育Ⅱ/キャリアワーク	担当教員	越地　真一郎

学科	理学作業言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活・社会の理解					選択・必修	必修		

担当教員の実務経験	新聞社での取材記者やＮＩＥ（新聞活用講座）を長年にわたり経験。
授　業　概　要	どんな進路（職種）にも必要とされるのが社会人基礎力。その中でも「読む、書く、話す」のコミュニケーション能力の育成に重点を置く。
到　達　目　標	実社会につながる基本スキルとして、次の「知る」「考える」「伝える」の３つの力を磨く。 ①世の中や身の回りで何が起きているかを「知る」 ②その背景や課題、自分の意見・提言を「考える」 ③考えたことを他人に分かるように「伝える」

授　業　計　画

回	テーマ（順不同）	授　業　内　容（順不同）
1	「伝える」から「伝わる」へ	相手に「伝わる」表現方法とは
2	世の中を知る	ニュース穴埋めクイズ＋コメント
3	答えは一つじゃない	「正解のない問い」にどう答えるか
4	シンポン（新聞×本）バトル	新聞と本を組み合わせたプレゼンイベント。図書館に親しむ契機に
5	要約のワザ	言いたいことは何か～要点をつかむコツ
6	結論ファースト	結論を先に示し、理由・根拠を後で述べる「先結後各」の表現法
7	見出し川柳	新聞記事の見出しを組み合わせた川柳づくり。言葉に親しむ
8	メディアリテラシー	メディアの特性を知り、自らの視点で情報を読み解く
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

準備学習（予習復習）の具体的な内容	日頃からニュース（世の中のいろいろな出来事）に関心を持つこと。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 50 %）☐ レポート　（　　%） ☑ 課題　（ 50 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	
参　考　書	
授業の留意点・備考	主な教材として新聞記事を活用。ワークショップ中心の参加型授業を行う。自分の意見を人前ではっきりと述べる力をつける。

科目名	総合教育Ⅱ/キャリアワーク	担当教員	田畑　博敏

学科	理学作業言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活・社会の理解					選択・必修	必修		

担当教員の実務経験	約35年にわたり、大学で「哲学」や「論理学」等の人文系科目の教育研究に従事した経験を生かして、文章表現・読解の指導ができる。
授　業　概　要	自分の意見や、調べた情報を、的確な文章に表現できることを目指す。そのために、語彙・文法の理解、資料分析の方法、文章読解の要点を学ぶ。手紙文や意見文の例を学び、自分で文章を書く練習をする。
到　達　目　標	本講義により、受講者は、日本語の文章を正しく読解し、その内容をわかりやすい日本語の文章に表現できるようになる。

授　業　計　画

回	テーマ（順不同）	授　業　内　容（順不同）
1	語句及び語彙	文章に出てくる語句・語彙の意味を正しく知る
2	文法	文法的に正しい言い方・表現法を学ぶ
3	資料分析	表やグラフ等の資料の分析方法を学ぶ
4	文章読解	文章読解の基本を学ぶ
5	文章読解	文章読解の技術を深める
6	手紙文	手紙文についての基本知識を学ぶ
7	意見文	意見文を読解し、自分で書いてみる
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

準備学習（予習復習）の具体的な内容	参考書の指定部分を予め読む。授業内容を深めるため復習する。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☑ レポート　（ 90 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	基礎から学べる！文章力ステップ　文章検3級対応：公益財団法人日本漢字能力検定協会 文章検公式テキスト3級：公益財団法人日本漢字能力検定協会
参　考　書	基礎から学べる！文章力ステップ　文章検3級対応：公益財団法人日本漢字能力検定協会 文章検公式テキスト3級：公益財団法人日本漢字能力検定協会
授業の留意点・備考	国語辞典（電子書籍で可）を持参すること。自分の考えを他者に伝えるにはどうすべきか、常に考えること。

科目名	情報処理	担当教員	有働正二郎・山下俊・田中裕己

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	基礎分野	教育内容	自然科学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床及び養成校にて日頃からパソコンを利用した情報処理を行っています。臨床現場や臨床研究・学内研究で必要なスキルを
授業概要	臨床現場は電子カルテが多く使用され始め、業種を問わずそのスキルが必要とされています。また、実習や学内での授業においても、レジュメ作成やレポート作成等にパソコンを使用します。当授業では、パソコンの基本操作をはじめ、近年の新しいツール（GoogleやZoom）も含め、ワード、エクセル、パワーポイントといった基本的なアプリケーションを使い方を教授します。
到達目標	●PCの基本的な操作方法を習得する。 ●GoogleやZoom等学校で使用するアプリケーションの操作方法を理解する。 ●実践的な文書作成や表計算方法、スライド作製方法を習得する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション パソコンの基礎　（有働、山下、田中）	パソコンの基本操作方法について学び、gmaiアカウント作成、WiFi設定を行う。
2	アプリケーションの基本操作方法 Zoomの使い方やマナー（有働、山下、田中）	各アプリケーションに共通する操作方法を学ぶ　【１回目の小テスト】
3	文書作成①　（田中）	ワード文章にチャレンジする。実践練習問題1
4	文書作成②　（田中）	ワード文章にチャレンジする。実践練習問題2
5	文書作成③　（田中）	より実践的なワード文章の作成に必要なスキル習得　模擬問題１～
6	文書作成④　（田中）	より実践的なワード文章の作成に必要なスキル習得　模擬問題２～
7	表計算シート作成①　（有働）	表計算にチャレンジする。実践練習問題1
8	表計算シート作成②　（有働）	表計算にチャレンジする。実践練習問題2・3
9	表計算シート作成③　（有働）	より実践的な表計算作成に必要なスキル習得　模擬問題１～
10	表計算シート作成④　（有働）	より実践的な表計算作成に必要なスキル習得　模擬問題２～
11	スライド作製①　（山下）	#REF!
12	スライド作製②　（山下）	#REF!
13	スライド作製③　（山下）	プレゼンテーションを作成する（ポスター作製）
14	スライド作製④　（山下）	プレゼンテーションを作成する（ポスター作製）
15	総括とまとめ　（有働・山下・田中）	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	授業初日にキーボード操作の確認を行いますので、各自キーボード操作が出来るようにしておくこと（350字程度） ページ数を決めて入力練習をするようにと伝える。
成績評価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 7 %）☑ レポート　（ 3 %） ☑ 課題　（ 90 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	30時間でマスター　Office2016：実教出版 Word文書処理技能認定試験 3級問題集【2016対応】：ウイネット Excel表計算処理技能認定試験3級問題集【2016対応】：ウイネット
参考書	オリジナルテキスト
授業の留意点・備考	操作指示と異なる内容（関係の無いサイトの閲覧など）に講じた場合は、即退出させ欠席扱いとする。 理解が早い生徒に関しては上位資格の試験対策を行います。

科目名	統計学	担当教員	緒方　茂

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活					選択・必修	必修		

担当教員の実務経験	臨床・教育の領域において、臨床研究および基礎研究によるさまざまな研究デザインに対する統計的手法を実践できることにより、将来臨床で必要な統計リテラシーの学習を行う事が出来る。
授　業　概　要	医学系とくにリハビリ領域における研究にて用いられる統計学的手法について学ぶ。例題をもとに電卓や統計ソフトを使用した簡単な統計学的手法を実践する。また身近なデータから統計手法を選択し考察を交えた推論ができるようになる。
到　達　目　標	統計学の概要を大まかに捉えて、統計学の専門用語である正規分布や特性値、各統計的手法を理解できる。さらに例題を通して理解を深め簡単なデータにおける統計処理が出来るようになる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	統計学を学ぶ意義を理解する。
2	統計学の概念と歴史	統計学の概念と過去の歴史から統計学がどのように人類に恩恵をもたらしたか理解する。
3	データの種類と整理	各尺度の種類と特性を理解し、中央値・平均値・最大値・最小値・標準偏差などを理解する。
4	データ整理とヒストグラム作成	例題のデータからヒストグラムを作成し、さらに正規分布の特性を理解する。
5	名義尺度の変数に対する統計学的検定（1）	名義尺度の理解を深め、さらに名義尺度で使用する統計手法を覚える。
6	名義尺度の変数に対する統計学的検定（2）	名義尺度の例題データを使用し、統計手法の選択から使用までを身につける。
7	間隔・比率尺度の変数に対する統計学的検定（1）	間隔尺度・比率尺度の理解を深め、その統計手法が選択できるようにする。
8	間隔・比率尺度の変数に対する統計学的検定（2）	間隔尺度・比率尺度における統計手法を選択できる手順を例題データから演習を通して覚える。
9	間隔・比率尺度の変数に対する統計学的検定（3）	間隔尺度・比率尺度における統計手法を選択できる手順を例題データから演習を通して覚える。
10	順序尺度の変数に対する統計学的検定（1）	順序尺度の理解を深め、対応のあるデータで統計手法が選択でき結果まで出せるようにする。
11	順序尺度の変数に対する統計学的検定（2）	順序尺度の理解を深め、対応の無いデータで統計手法が選択でき結果まで出せるようにする。
12	順序尺度の変数に対する統計学的検定（3）	例題を通して統計手法を身につける
13	相関・回帰直線（1）	相関分析の概念とその流れを理解する。
14	相関・回帰直線（2）	例題を通して演習において相関分析・回帰分析を身につける。
15	まとめ	レポート及び定期試験のオリエンテーション

準備学習（予習復習）の具体的な内容	その日に学習したものを、教科書や資料を確認しながらしっかり復習するように
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 70 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 30 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	対馬栄輝他『リハビリテーション統計学』中山書店
参　考　書	渡邊宗孝他『PT・OTのための統計学入門』、三輪書店 杉山高一他『保健・医療を学ぶ人のための統計学』絢文社 対馬栄輝『SPSSで学ぶ医療系データ解析』東京図書
授業の留意点・備考	・講義ではデータ処理にて数を扱うが、数字に対して苦手意識を持たず取り組むこと。 ・「なぜ、このような統計学的手法が必要なのか」という意識を持ちながら授業に臨むこと。

科目名	社会福祉学	担当教員	紫藤　千子

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	社会科学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士として、長年にわたる福祉の現場での実践経験を踏まえて、より具体的な講義、GWなどの演習を行うことができる。
授　業　概　要	私たちの生活を考察し、ライフスタイル、社会の変化について理解を深め、社会保障制度等の仕組みについて学ぶ。介護保険、障害者総合支援法、その他諸制度について学び理解を深める。また、制度改正に関しても情報提供を受け、時代の動きを理解する。クライエントをサポートするために必要な、医療・保健・福祉の連携について理解する。
到　達　目　標	クライエントを、生活する人としてとらえ、その暮らしに関わっていくことを理解する。様々な社会福祉の基礎知識を得て、社会福祉制度に関して理解を深め、今、社会福祉がどのような現状にあり、課題を抱えているのか知り、考察する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	福祉とは	授業のオリエンテーション。「福祉とは」考えてみる。
2	社会と生活のしくみ	「生活」について、家族、地域、社会の視点で学ぶ。地域共生社会について学ぶ。
3	日本の社会保障制度①	社会保障の基本的な考え方を学ぶ。日本の社会保障制度の歴史を学ぶ。
4	日本の社会保障制度② 現代社会と社会保障制度	日本の社会保障制度の歴史を知る。現代社会の特徴を学び、今後の社会保障の有馬田について考える。
5	高齢者保健福祉	高齢者福祉の歴史を学び、これからの高齢社会を考える。
6	介護保険法①	高齢者福祉に関する法体系を学ぶ。介護保険制度の背景と目的を学ぶ。
7	介護保険法②	介護保険制度のしくみを理解する。専門職の役割。介護サービスについて学ぶ。
8	介護保険制度③ 障がい者保健福祉①	介護保険制度の今後の動向について学ぶ。 障碍者福祉の現状について学ぶ。
9	障がい者保健福祉②	障がい者福祉の動向。障がい者福祉に関する法体系について学ぶ。
10	障がい者総合支援制度	障害者総合支援法のしくみを学ぶ。
11	個人の権利を守る制度①	権利擁護について学ぶ。虐待防止法の考え方、法制度について学ぶ。
12	個人の権利を守る制度②	判断能力の低下した人の支援について学ぶ。
13	貧困対策・生活困窮者支援制度	生活保護法、生活困窮者自立支援法のしくみを知る。
14	認知症の理解	認知症について学び、認知症の理解を深める。
15	認知症ケアについて	認知症の人への接し方を学び、考える。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を読んでくる。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	最新　介護福祉士養成講座２　社会の理解（中央法規）
参　考　書	
授業の留意点・備考	・グループワークを行う際は、積極的に参加すること。 ・授業中の私語はしないこと。

科目名	カウンセリング概論	担当教員	井田　博子

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床心理士（カウンセラー）としての経験から、来談者の力を引き出し支援する様々のとりくみを紹介し、リハビリテーション実践に活かせる視点を提供したい。
授　業　概　要	臨床心理学の中心的な課題を、実際的な観点から深め、人間理解と臨床のセンスの基礎を身につけられるようにする。
到　達　目　標	臨床心理学の基礎を学び、対人関係を有効に用いた支援から、リハビリテーション実践に役立つ観点を身につける。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション「自我の強さと悩む力」	自我の強さは年令によって、経験によって、育つものであることを学ぶ。
2	心理査定と心理療法	心理的支援の前に来談者の状況や問題点等をとらえることの重要さを示す。
3	個人療法と集団療法	来談者とセラピストの1対1関係だけでなく、グループを用いる治療についても学ぶ。
4	家族療法とその他の心理療法	子どもの問題では、家族間コミュニケーションの調整が有効であることを学ぶ。
5	ストレスと心理的反応	多忙やコミュニケーション不全等の様々のストレスと心身の不調について考える。
6	心の病のいろいろ	体質的問題の大きいものや、生育上の環境に関連するもの等の紹介をする。
7	文化や文明とストレス	ハイテクの生活環境と心身の自然について考える。
8	心の健康	日頃からとりくむ心の健康への留意点を紹介する。
9	心理テストの種類	心理テストから理解される個人差（個性）について考える。
10	性格と無意識の行動	本人の行動パターンには自覚できる部分と無自覚の部分があることを知る。
11	性格とストレス耐性	本人の認知や行動のパターンとストレスへの強さ弱さについて考える。
12	自己理解と他者理解	思春期・青年期の友だち関係などから自・他の理解が広がることを学ぶ。
13	事例から学ぶ（1）	日常の対人関係でも出会う、了解できにくい言動について考える。
14	事例から学ぶ（2）	他者の言動の理不尽さに巻き込まれた事例の紹介と自らの言動の理不尽さに気づいた事例の紹介。
15	まとめ	試験

準備学習（予習復習）の具体的な内容	シラバスや配布された資料をよく読み、なじみのない言葉や言葉づかいは、辞書で調べておき、はっきりしない場合は質問すること。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	講師の先生が資料を準備
参　考　書	宇治原寛・杉原保史共編『臨床心理学入門　理解と関わりを深める』培風館
授業の留意点・備考	この教科の配布資料は、他の教科のものとは別に、単独のファイルにすること。

科目名	英語Ⅰ	担当教員	山口　信

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	医学英語							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	中高大学専門学校で計10年以上の英語教育を受け、英語の読み書きに関しては辞書なしでも専門分野の論文を読め、雑誌に論文を投稿する際にも受理されるレベルの英語抄録を迅速に作成できる。学生に臨床で困らない程度の医学用語の英単語を身につけさせることが可能である。
授業概要	・言語聴覚障害の医学用語を身につける ・医学英語が他職種とのコミュニケーションの一部であることを知る ・医学用語の知識を利用して障害・疾患についての理解を深める ・英語の医学用語によって海外文献を利用した研究を行うための基礎作りを行う
到達目標	・言語聴覚障害の基本的な医学用語・英単語を身につける。 ・他職種特に医師から提示される医学英単語の意味がわかる。 ・カルテなどに英語で書かれた障害や疾患の意味がわかる。 ・英語の抄録が読める前段階として基礎的な英単語を身につける。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	言語聴覚障害概論Ⅰ　日本語	言語聴覚障害概論の医学用語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
2	言語聴覚障害概論Ⅱ　英語	言語聴覚障害概論の医学英語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
3	失語症Ⅰ　日本語	失語症の医学用語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
4	失語症Ⅱ　英語	失語症の医学英語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
5	高次脳機能障害Ⅰ　日本語	高次脳機能障害の医学用語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
6	高次脳機能障害Ⅱ　英語	高次脳機能障害の医学英語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
7	構音障害Ⅰ　日本語	構音障害の医学用語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
8	構音障害Ⅱ　英語	構音障害の医学英語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
9	基礎医学　日本語	基礎医学の医学用語について学び、暗記する。 授業後の確認テストあり。
10	基礎医学　英語	基礎医学の医学英語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
11	臨床医学　日本語	臨床医学の医学用語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
12	臨床医学　英語	臨床医学の医学英語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
13	耳鼻咽喉科学Ⅰ　日本語	耳鼻咽喉科学の医学用語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
14	耳鼻咽喉科学Ⅱ　英語	耳鼻咽喉科学の医学英語について学び、暗記する。 前回の確認テスト、授業後の確認テストあり。
15	総まとめ	今までに習った英単語の総復習を行う。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	コースパケットを1時間目に配布するので毎回の講義の前にその内容について読み、講義で何が行われるかを把握しておくこと。
成績評価	☑ 定期試験　（ 25 %）☑ 実技試験　（ 25 %）☑ 小テスト　（ 25 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☑ 発表　（ 25 %）☐ その他（　　）
教科書	選定した教科書はないが、最初の時間にコースパケットを配布する。
参考書	なし
授業の留意点・備考	英語は難しいという先入観があると拒絶反応を起こして記憶できるものも記憶できなくなるので、新しい外国語を1から学ぶつもりで虚心坦懐に講義に臨むこと。難しくわからないという気持ちが湧いたらすぐに講師に相談すること。

科目名	国際コミュニケーション/英語Ⅱ	担当教員	ショウナ・エッシャー

学科	理学作業言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活・社会の理解	選択・必修	必修						

担当教員の実務経験	2006年４月からメディカルカレッジ青照館英会話非常勤講師を勤め、現在に至る
授業概要	*グループ分けして、ボキャブラリーマスター　*ウォーミングアップとしてボディランゲージ&アイコンタクトによる会話　＊会話カードを作り、評価チェックする
到達目標	*英語によるコミュニケーションを楽しく学ぶ　*会話パートナーとの信頼、相互関係助け合いを形成する　*英会話に対し、前向きで意欲的姿勢を形成する

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	Introductions: Tell about yourself Find out about others	自分のこと、相手のことをどのようにたずねるか　会話カード＃１の作成
2	Family and Relatives	家族、親戚のことについて述べたり尋ねたりする表現　会話カード＃２の作成
3	Shopping/Money/Numbers	買い物、お金、様々な数に関する会話の指導　会話カード＃３の作成
4	Food. Eating. Restaurants	食に関する英会話全般の指導　会話カード＃４の作成
5	Music. Concerts	音楽に関する様々な表現等の指導　会話カード＃５の作成
6	Theme#1-#5 Mixed practice & bonus games	テーマ＃１～＃５の復習&コミュニケーションゲームの実施
7	Review Test #1-#5	テーマ＃１～＃５の復習テストの実施
8	Free Time Activities	様々なアクティビティに関する表現等の指導　会話カード＃６の作成
9	Great Holiday Plans. Travel	休暇、旅行の計画、実行に関する様々な表現の指導　会話カード＃７の作成
10	Sports and Recreation	スポーツ、レクレーションに関する表現の指導　会話カード＃８の作成
11	Friends & Feelings	友人や感情に関する表現の指導　会話カード＃９の作成
12	Part-time Jobs & Working	アルバイト、仕事に関する表現の指導　会話カード＃１０の作成
13	Catch up chance for unfinished missed work.	テーマ＃１～＃１０のキャッチアップ
14	Theme#6-#10 Mixed practice & bonus games	テーマ＃６～＃１０の復習とコミュニケーションゲームの実施
15	Review Test #6-#10	テーマ＃６～＃１０の復習テストの実施

準備学習（予習復習）の具体的な内容	毎回、各テーマ＃ごとの重要ワード、フレーズの小テストの作成　復習テストの作成
成績評価	☑ 定期試験（ 50 %）☐ 実技試験（ %）☑ 小テスト（ 40 %）☐ レポート（ %） ☐ 課題（ %）☑ 発表（ 10 %）☐ その他（ ）
教科書	Tools for Increasing Proficiency in Speaking：ウエルオン
参考書	
授業の留意点・備考	各テーマごとに使う単語、フレーズを使い、コミュニケーション出来るように、生徒に楽しく指導する

科目名	スポーツ・健康学/体育実技	担当教員	池田　泰介

学科	理学・作業・言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	科学的思考の基盤・人間と生活・社会の理解					選択・必修	必修		

担当教員の実務経験	中学校・高等学校の保健体育指導および社会教育施設でのスポーツ指導の経験を活かし、子どもから高齢者に対しての運動の必要性やスポーツの特性について、講義・演習を行うことができる
授　業　概　要	講義や実技を通して、健康の維持・増進に関する基礎的知識を学習し、各種スポーツの特性や技術およびトレーニングの方法についても理解を深め、スポーツの有効性について学ぶ
到　達　目　標	健康の定義や運動の必要性を説明できる。安全に楽しく運動ができる方法を習得する事ができる。障がい者スポーツの種類とルールについて説明できる。レクリエーション・スポーツの実施計画を作成することができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	授業概要、達成目標、評価方法、授業の注意点、自己紹介
2	健康と運動	健康の定義および社会環境と体力について
3	トレーニング①	無酸素性のトレーニングとその効果
4	トレーニング②	有酸素性のトレーニングとその効果
5	心理的スキル	メンタルトレーニングの必要性
6	準備運動・体操	準備運動の必要性および実践
7	障がい者スポーツ①	障がい者スポーツの種目・特性
8	障がい者スポーツ②	ボッチャの特性およびルール・体験
9	スポーツ・レクリエーションの実施計画①	スポーツ・レクリエーションの実施計画作成
10	スポーツ・レクリエーションの実施計画②	スポーツ・レクリエーションの実施計画提出
11	スポーツ・レクリエーション①	ソフトバレーボールの計画・実施
12	スポーツ・レクリエーション②	車いすバスケットボールの計画・実施
13	スポーツ・レクリエーション③	卓球の計画・実施
14	スポーツ・レクリエーション④	バドミントンの計画・実施
15	まとめ	授業で扱った内容について筆記試験

準備学習（予習復習）の具体的な内容	運動のできる服装・体育館シューズ
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 50 %）☑ 実技試験　（ 30 %）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 10 %） ☑ 課題　（ 10 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	なし
参　考　書	健康・運動・スポーツのTopics(八千代出版)
授業の留意点・備考	体を動かす為、体調管理に努めること。 体調が良くない場合は無理をせず担当教員に伝え見学すること。 運動を実施する場合は積極的に参加すること。

科目名	運動科学	担当教員	小野　厚美

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	基礎分野	教育内容	保健・体育							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床作業療法に携わった経験を活かし、リハビリテーションにおいて理解すべき小児の運動発達について講義・指導ができる
授　業　概　要	小児の運動発達の基盤となる発達概念、発達理論を理解し、姿勢反射、反応から始まる正常な運動発達を時期とともに段階的に学ぶ。
到　達　目　標	正常な小児の運動発達を学習し、どのような順番で運動を獲得していくのかを説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	映像をみながら小児の運動発達のイメージを作る。
2	発達概念	人間発達を表現する用語や発達の流れを学ぶ。
3	人間発達（発達理論）	発達理論モデルを理解する。
4	姿勢反射・反応①	姿勢反射・反応の出現と消失を時期とともに学ぶ。
5	姿勢反射・反応②	姿勢反射・反応の出現と消失を時期とともに学ぶ。
6	運動発達（０～３ヶ月）	０～３ヶ月児の運動発達の推移を学ぶ。
7	運動発達（４～６ヶ月）	４～６ヶ月児の運動発達の推移を学ぶ。
8	運動発達（７～９ヶ月）	７～９ヶ月児の運動発達の推移を学ぶ。
9	運動発達（１０～１２ヶ月）	１０～１２ヶ月児の運動発達の推移を学ぶ。
10	運動発達（１３～１８ヶ月）	１３～１８ヶ月児の運動発達の推移を学ぶ。
11	上肢機能の発達	上肢機能と物の操作の発達を学ぶ。
12	ＡＤＬの発達①	遊び・食事・排泄･更衣の発達を学ぶ。
13	ＡＤＬの発達②	遊び・食事・排泄･更衣の発達を学ぶ。
14	感覚・知覚・認知・社会性の発達	感覚・知覚・認知・社会性の大まかな発達を学ぶ。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	１コマごとに小テスト、課題プリントを出すので、授業の復習をしながら毎回の課題に取り組むこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 20 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	イラストでわかる人間発達学　医歯薬出版株式会社
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	医学総論	担当教員	山口　信

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義・演習
区分	基礎分野	教育内容	医学総論							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士としての病院勤務・学校勤務の間に医学教育に関する学会での発表、学会誌への論文掲載多数。この間に培った医学的教養を基盤に学生に医学の概要について伝授することができる。
授業概要	・医学とは何かを学ぶ。 ・医療人はいかに生きるべきかを学ぶ。 ・医療人に必要なコミュニケーション技術について学ぶ。 ・医療人として必要な最も基礎的な臨床技術を学ぶ。
到達目標	・医学の概要について説明できる。 ・医療人の持つべき倫理について説明できる。 ・医療人に必要なコミュニケーション技術を実践できる。 ・問診・聴診・打診・読影・触診・模擬患者など基礎的な臨床技術を実践できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション 患者の立場に立った医療とは何か	自らの医療体験・患者体験を振り返り、患者の立場に立った医療とは何かをディスカッションし、各班で発表する。
2	医学の発展と医療倫理の変遷Ⅰ ヒポクラテス医学と医療人の倫理	ヒポクラテス誓詞をはじめとする医療人の倫理に関する文書を読んでその精神をつかみ、自分たちなりの誓詞を作成し、各班で発表する。
3	医学の発展と医療倫理の変遷Ⅱ 近代医学の夜明けと医療人の倫理	近代医学黎明期の医療史を学び、その画期的意義を知り、現代医学との共通点と相違点、その到達点についてディスカッションし、各班で発表する。
4	医学の発展と医療倫理の変遷Ⅲ 疾患はいかに克服されてきたか	各疾患の大まかな治療史を学び、現在の到達点についてディスカッションし、各班で発表する。
5	医学の発展と医療倫理の変遷Ⅳ 各疾患の治療史1	各疾患の治療史について各班でディスカッションし、自分たちが発表する疾患の治療史について下調べする。講義はPC室で行う。
6	医学の発展と医療倫理の変遷Ⅴ 各疾患の治療史2	班ごとに選択した疾患の治療史について発表する。発表はレジュメとスライドで行う。
7	コミュニケーション医学Ⅰ 医療訴訟とコミュニケーション技術	多発する医療訴訟と医療人のコミュニケーション技術についてディスカッションし、各班で発表する。
8	コミュニケーション医学Ⅱ コミュニケーション技法の基礎	患者とのコミュニケーション技法について学び、さまざまな場面を想定したコミュニケーション演習を行う。
9	基礎的医療技術Ⅰ　X線読影	胸郭と肺の構造、胸部X線読影の基本、肺炎の画像の特徴について学ぶ。実際の肺炎患者のX線画像でその病態について演習する。
10	基礎的医療技術Ⅱ　聴診	胸郭と肺の構造、肺区の位置、聴診器の使用法、呼吸聴診、心音聴診、頚部聴診、頚動脈聴診について学ぶ。聴診の演習を行う。聴診器の準備が必要。
11	基礎的医療技術Ⅲ　打診	胸郭と肺の構造、正常肺と異常肺の鑑別、胸部打診の方法について学ぶ。胸部打診の演習を行う。打鍵器の準備が必要。
12	基礎的医療技術Ⅳ　触診	頭頸部・体幹の触診の方法について学ぶ。頭頸部・体幹の触診の演習を行う。
13	基礎的医療技術Ⅴ　医療面接	医療面接の方法と留意点について学ぶ。医療面接の演習を行う。
14	基礎的医療技術Ⅵ　模擬患者	模擬患者の役割と医療面接のシナリオについて学ぶ。模擬患者の演習を行う。
15	基礎的医療技術Ⅶ　医療面接OSCE	模擬患者として医療面接の客観的臨床能力評価(OSCE)に参加する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	コースパケットを1時間目に配布するので毎回の講義の前にその内容について読み、講義で何が行われるかを把握しておくこと。
成績評価	☑ 定期試験　（ 25 %）☑ 実技試験　（ 25 %）☑ 小テスト　（ 25 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☑ 発表　（ 25 %）☐ その他（　　）
教科書	学生のための医療総論第3版増補版　医学書院
参考書	なし
授業の留意点・備考	過重な課題は与えないのでその分講義中には積極的に真剣に参加すること。医療人としての資質が問われる厳しい講義だということを理解してほしい。

科目名	解剖学Ⅰ	担当教員	山口信

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義・演習
区分	基礎分野	教育内容	解剖学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士としての病院勤務・学校での教育活動を通して言語聴覚士に必要な解剖学的知識を触診などの評価・嚥下訓練などの治療を含めて実践的に習得したため、その知識を学生に実践的に伝授することができる。
授業概要	・言語聴覚士に必要な頭頸部・体幹・神経の解剖学的知識を学習する。 ・言語聴覚士に必要な頭頸部・体幹の触診技術を習得する。 ・言語聴覚士に必要な末梢神経・脳神経・中枢神経の検査技術を習得する。
到達目標	・言語聴覚士に必要な頭頸部・体幹・神経の解剖学的知識を説明できる。 ・言語聴覚士に必要な頭頸部・体幹の触診技術を実践できる。 ・言語聴覚士に必要な末梢神経・脳神経・中枢神経の検査技術を習得する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	解剖学Ⅰの復習	人体全体の大まかな解剖学的知識について復習する。実際の人体を触診し、各器官・部位を確認する。
2	骨学　頭頸部の骨	頭頸部の骨について学習する。実際の頭頸部の骨を触診し、その位置と形状を記憶する。解剖Ⅰの内容についての確認テストあり。
3	骨学　体幹の骨Ⅰ　脊柱・肩甲骨・骨盤	体幹の骨のうち脊柱・肩甲骨・骨盤を中心に学習する。実際の体幹の骨を触診し、その位置と形状を記憶する。頭頸部の骨についての確認テストあり。
4	骨学　体幹の骨Ⅱ　胸郭	体幹の骨のうち胸郭を中心に学習する。実際の体幹の骨を触診し、その位置と形状を記憶する。体幹の骨についての確認テストあり。
5	関節学　関節可動域Ⅰ　基本	関節の種類・機能について学習する。関節可動域測定の基本について学習する。実際に関節可動域を測定してみる。胸郭についての確認テストあり。
6	関節学　関節可動域Ⅱ　下顎・頚部・体幹	下顎・頚部・体幹の関節可動域について学習する。これらの関節可動域を測定してみる。関節可動域についての確認テストあり。
7	筋学　頭頸部の筋Ⅰ　頭部の筋	頭部の筋について学習する。実際の頭部の筋を触診し、その位置・形状・緊張・収縮方向などを記憶する。関節可動域についての確認テストあり。
8	筋学　頭頸部の筋Ⅱ　頚部の筋	頚部の筋について学習する。実際の頚部の筋を触診し、その位置・形状・緊張・収縮方向などを記憶する。頭部の筋についての確認テストあり。
9	筋学　体幹の筋Ⅰ　呼吸筋	呼吸筋について学習する。実際の呼吸筋を触診し、その位置・形状・緊張・収縮方向などを記憶する。頚部の筋についての確認テストあり。
10	筋学　体幹の筋Ⅱ　脊柱起立筋ほか	脊柱起立筋などの体幹の筋について学習する。実際の筋を触診し、その位置・形状・緊張・収縮方向などを記憶する。呼吸筋の確認テストあり。
11	神経学　中枢神経系Ⅰ　脊髄	脊髄の構造・機能・病態について学習する。体幹の筋についての確認テストあり。
12	神経学　中枢神経系Ⅱ　脳幹・小脳	脳幹・小脳の構造・機能・病態・検査法について学習する。脊髄についての確認テストあり。
13	神経学　大脳	大脳についてその構造・機能・病態・検査法について学習する。脳幹・小脳についての確認テストあり。
14	神経学　脳神経Ⅰ　Ⅰ～Ⅵ脳神経	嗅神経・視神経・動眼神経・滑車神経・三叉神経・外転神経についてその構造・機能・病態・検査法について学習する。大脳についての確認テストあり。
15	神経学　脳神経Ⅱ　Ⅶ～Ⅻ脳神経	顔面神経・内耳神経・舌咽神経・迷走神経・副神経・舌下神経についてその構造・機能・病態・検査法について学習する。脳神経の確認テストあり。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	最初の講義でコースパケットを配布するので次の授業の内容を読んで教科書のその部分を読んでくると授業がより分かりやすくなる。
成績評価	☑ 定期試験　（ 50 %）☑ 実技試験　（ 25 %）☑ 小テスト　（ 25 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	標準理学療法学・作業療法学　解剖学第3版　医学書院
参考書	なし
授業の留意点・備考	過重な課題はないので安心して講義に臨んでほしい。ただ、職種全体のレベルアップにつながる重要な内容であることを自覚し、自らの将来の充実した職業生活実践のために真摯な努力をすること。

科目名	解剖学Ⅱ	担当教員	林　　学

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	基礎医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験５年以上（介護老人保健施設・成人期の病院）の臨床経験を活かし、また医学系大学院で研鑽を積んだ経験をもとに、言語聴覚分野に関する解剖学の講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	言語聴覚分野にかかわる解剖学として人体の発生、顔面の構造、大脳の構造とその機能・機能障害について学習する。
到　達　目　標	人体の発生、顔面の構造、脳の構造とその機能・機能障害について説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	人体の発生１	胚子の発生：受精と着床および３層性胚盤について理解する。
2	人体の発生２	器官系の発生：神経系器官の発生と運動器系の発生について理解する。
3	人体の発生３	器官系の発生：消化器系の発生と循環器系の発生について理解する。
4	人体の発生４	器官系の発生：鰓弓（咽頭弓）の発生について理解する。
5	人体の発生５	出生後の生後期について理解する。
6	顔面の構造１	顔面の構造：矢状断についてその構造と主な部位について理解する。
7	顔面の構造２	構音運動に関わる器官：舌・口唇について理解する。
8	顔面の構造３	構音運動に関わる器官：軟口蓋・硬口蓋と歯・歯茎部について理解する。
9	顔面の構造４	構音運動に関わる器官：下顎について理解する。
10	大脳の構造１	大脳の外観について解剖学的名称・働きを含めて理解する。
11	大脳の構造２	前頭葉・頭頂葉について解剖学的名称・働きを含めて理解する。
12	大脳の構造３	側頭葉・後頭葉について解剖学的名称・働きを含めて理解する。
13	大脳の構造４	大脳辺縁系・大脳基底核について解剖学的名称・働きを含めて理解する。
14	大脳にかかわる障害について	脳血管障害・脳外傷・変性疾患・脳腫瘍等について理解する。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義前に各項目を確認しテキストを見ておくことで、講義内容が理解しやすくなる。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野 解剖学　第５版　医学書院
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	解剖学Ⅲ	担当教員	田中裕己

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	基礎医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	回復期リハビリテーション病院で勤務した経験を活かし、神経系の解剖について講義することができる。
授業概要	人体を構成している神経系の成り立ちを理解する。療法士に必要不可欠な神経系について系統的に学習していく。神経疾患はリハビリで扱う代表な部分である、疾患理解のために、 各部位の位置関係、働きも学習していく。
到達目標	神経系の構造、位置関係を認識する。神経系の働きを理解する。疾患や検査、治療のために神経系の学習が必要であることを知る。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	神経系総論について	神経系の概要について学習する
2	神経系の循環について	脳血管系と脳室について学習する
3	脊髄について	脊椎や脊髄神経について学習する
4	脳幹について	中脳・橋・延髄について学習する
5	小脳について	小脳中部・小脳半球について学習する
6	間脳について	視床、視床下部について学習する
7	終脳について①	大脳皮質や灰白質について学習する
8	終脳について②	大脳基底核や大脳辺縁系について学習する
9	伝導路について①	下降性伝導路について学習する
10	伝導路について②	上行性伝導路について学習する
11	末梢神経について①	脊髄神経について学習する
12	末梢神経について②	神経叢について学習する
13	末梢神経について③	脳神経について学習する
14	末梢神経について④	自律神経について学習する
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定教科書の該当箇所について、事前に目を通しておく
成績評価	☑ 定期試験（ 80 %）☐ 実技試験（ %）☑ 小テスト（ 20 %）☐ レポート（ %） ☐ 課題（ %）☐ 発表（ %）☐ その他（ ）
教科書	標準理学療法学・作業療法額　専門基礎分野　解剖学　第５版：医学書院
参考書	特になし
授業の留意点・備考	特になし

科目名	解剖学Ⅳ	担当教員	吉永　一也

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	基礎医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	国立大学医学部において解剖学の講義・実習を担当した経験を活かし、人体の構造と機能について講義を行うことができる。
授　業　概　要	解剖学では、人体を構成する各器官の構造と立体配置について学習する。そのうち、解剖学Ⅳでは医療および疾患の理解に必要な内蔵や感覚器の正常構造と立体配置について学習する。
到　達　目　標	各器官の構造と立体配置を説明できる。解剖学の知識を各種検査や治療手技へ応用できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	感覚器系①	講義を通して、各器官の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。（外皮・視覚器）
2	感覚器系②	講義を通して、各器官の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。（平衡聴覚器、味覚器、嗅覚器）
3	循環器系①	講義を通して、各器官の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。（全体像）
4	循環器系②	講義を通して、各器官の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。（心臓）
5	循環器系③	講義を通して、各器官の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。（動脈系）
6	循環器系④	講義を通して、各器官の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。（静脈系）
7	循環器系⑤	講義を通して、各器官の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。（胎児循環、リンパ系）
8	消化器系①	講義を通して、各器官の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。（全体像）
9	消化器系②	講義を通して、各器官の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。（口腔、咽頭、食道、胃、小腸、大腸）
10	消化器系③	講義を通して、各器官の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。（肝臓、胆嚢、膵臓）
11	呼吸器系	講義を通して、呼吸器系の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。
12	泌尿器系	講義を通して、泌尿器系の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。
13	生殖器系	講義を通して、生殖器系の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。
14	内分泌系	講義を通して、内分泌系の構造と立体配置を理解し解剖学の基礎的知識を身につける。
15	まとめ	重要事項を復習し、解剖学の基礎的知識を身につける。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	毎回の講義内容について、教科書を一読しておく。その日の講義内容を復習し、重要なポイントを整理しておく。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野　解剖学　第5版：医学書院
参　考　書	なし
授業の留意点・備考	不明な点は、授業中に積極的に質問して貴重な時間を有効活用すること。

科目名	生理学	担当教員	中西　宏之

学科	理学作業言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	4	時数	60	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	人体の構造と機能及び心身の発達							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	医学部医学科での生理学、生化学、薬理学の講義ならびに看護学科での解剖学、生理学の講義に係わった経験を活かし、理学療法士、作業療法士、言語聴覚療法士のための生理学の講義を行うことができる。
授　業　概　要	生理学は生命活動のしくみを解き明かすことを目的とした学問であり、解剖学と密接に関連した医学の基礎となるものである。まず、生命現象の基本となる細胞機能、ついで植物と動物に存在する機能、そして動物に特有な機能として、生理学を理解していく。
到　達　目　標	生理学における重要事項を説明できる。器官・組織の機能とその仕組みを説明できる。生理機能と理学療法・作業療法・言語聴覚療法と関連を説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	細胞の構造と機能①	細胞膜の機能、細胞内小器官を学ぶ
2	細胞の構造と機能②	静止電位、活動電位の発生メカニズムを学ぶ
3	血液①	血球の組成、赤血球・白血球のの役割を学ぶ
4	血液②	血液の凝固・線溶、血漿成分、血液型を学ぶ
5	血液③	非特異的生体防御、免疫反応、Tリンパ球・Bリンパ球を学ぶ
6	血液④	自然免疫・獲得免疫、液性免疫・細胞性免疫を学ぶ
7	心臓と循環①	心臓の構造と働きを学ぶ
8	心臓と循環②	心臓の自動性と刺激電動系について学ぶ
9	心臓と循環③	心電図の記録法と各波形の意味を学ぶ
10	心臓と循環④	心拍出量と血圧について学ぶ
11	心臓と循環⑤	血圧の調節メカニズムを学ぶ
12	心臓と循環⑥	微小循環における物質交換を学ぶ
13	呼吸とガスの運搬①	気道の構造とその役割を学ぶ
14	呼吸とガスの運搬②	呼吸運動と呼吸器気量の分画を学ぶ
15	呼吸とガスの運搬③	ガス交換・ガス運搬を学ぶ

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	呼吸とガスの運搬④	化学受容器と呼吸の調節を学ぶ
17	消化と吸収①	消化管の構造と消化メカニズムを学ぶ
18	消化と吸収②	消化液・栄養の吸収を学ぶ
19	消化と吸収③	消化管ホルモン、消化管の調節を学ぶ
20	消化と吸収④	肝臓、膵臓の構造と役割を学ぶ
21	腎臓と排泄①	腎臓の構造と役割を学ぶ
22	腎臓と排泄②	尿の生成メカニズムを学ぶ
23	腎臓と排泄③	クリアランス、糸球体濾過量、腎血漿流量を学ぶ
24	腎臓と排泄④	畜尿反射と排尿反射を学ぶ
25	酸塩基平衡①	血漿pH調節について学ぶ
26	酸塩基平衡②	アシドーシスとアルカローシスについて学ぶ
27	前期復習	小テストを利用して前期の復習を行う
28	前期復習	小テストを利用して前期の復習を行う
29	前期復習	小テストを利用して前期の復習を行う
30	前期復習	小テストを利用して前期の復習を行う

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を読んで予習をする。講義プリント、練習問題を復習し、小テストの準備を行う。小テストで5点以下（10点満点）の場合は間違った問題のやり直しを行い、提出する。
成績評価	☑ 定期試験 （ 100 %） ☐ 実技試験 （ %） ☐ 小テスト （ %） ☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %） ☐ 発表 （ %） ☐ その他 （ ）
教科書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　生理学　第5版：医学書院
参考書	消っして忘れない　生理学要点整理ノート（ＰＴ．０Ｔ必修シリーズ）　羊土社
授業の留意点・備考	授業中に講義内容と関連した練習問題を行う。次回講義前に小テストが行なわれるので、授業終了後は必ず復習すること。疑問点が生じたときは教科書や参考書、さらには教官の積極的に活用すること。

科目名	栄養・薬理	担当教員	中村　繁良

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	基礎医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	大学卒業後は薬の研究し38才から薬剤師としての業務を始めた。 現在は、地域包括ケア構築に向けて熊本県・熊本市の会議に参加し、他職種との連携を図っている。 もちろん、熊本市主催のリハビリテーション協議会にも参加している。 現状何が必要か今後何を実施すべきかの講義をすることもできる。
授　業　概　要	患者がどういう薬を服用しているかということは、理学療法・作業療法・言語聴覚療法士にとっても大切なことから、いろいろな疾患の病態生理ならびに代表的な治療薬について学ぶ。
到　達　目　標	各疾患の病態生理を説明できる。 代表的な治療薬の名前を説明できる。漢方薬について学び、 どの病態に効くか説明できる。緩和医療について説明できる。 対象患者は高齢者が多いことから、 お薬の注意事項を説明できる

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	認知症 漢方薬等について	今後増えるであろう認知症について学び、代表的な治療薬について学習する。 生薬について学び、漢方薬について適切な使い方について学習する。
2	循環器・血液系等について	心臓、血管、血液について学び, それらに対する治療薬について学習する。
3	代謝系・骨粗鬆症について	糖尿病、甲状腺疾患について学び、それに対する治療薬について学習する。
4	緩和医療・高齢者への投薬について	緩和医療について学ぶ。それに対する薬について学習する。 高齢者は臓器が弱っているため、副作用が出やすいため、注意事項について学習する。
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義ノート（パワーポイント）を復習する
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 40 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	講師の先生が資料を用意
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	栄養・薬理	担当教員	中村　優希

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	基礎医学						選択・必修	必修	

担当教員の実務経験	薬局薬剤師としての経験を活かし、他のコメディカルが実務で活用しやすい実用的な知識について講義出来る
授　業　概　要	生理学的な基礎知識を基盤に薬の特徴・臨床上の注意点について学習する
到　達　目　標	生理学的な基礎的な事項を理解した上で薬学的な知識、薬の特徴・注意点を説明できる

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	薬理 ・中枢神経系など	中枢系に作用する薬剤について学ぶ
2	薬理 ・消化器系・消毒液	胃腸に作用する薬剤、消毒液の違いについて学ぶ
3	薬理 ・剤型、受容体、動態学	特徴的な剤型、基本的な受容体、血中濃度などの動態学の基礎を学ぶ
4	薬理 ・抗生剤、抗アレルギー薬	抗生剤・抗菌薬の基礎、抗アレルギー薬の世代別の特徴について学ぶ
5	薬理 ・ヘルペス、AD/MD、COPD、禁煙、嫌酒薬	生活習慣が密接に関わる薬について学習する。社会問題的な薬剤について触れる
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

準備学習（予習復習）の具体的な内容	生化学的な知識、人体の働きについて教科書で学習しておく
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	講師の先生が資料を用意
参　考　書	わかりやすい薬理学　第3版　編集　安原　一
授業の留意点・備考	毎回の小テストは必ず復習しておくこと

科目名	栄養・薬理	担当教員	冨永　志保

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	基礎医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	管理栄養士として病院や老健で勤務した経験を活かし、リハビリテーションを実施していくうえで必要な栄養素等について講義できる。
授　業　概　要	臨床現場でPT・OT・STによる機能訓練を行う患者の多くが高齢者であり、リハビリを施行する患者は昨今低栄養素およびその可能性がある。ADL・QOLをUPさせるためには適切な栄養管理が必要である。 その知識を習得するための学習を行う。
到　達　目　標	栄養素の基礎、三大・五大栄養素について学ぶことにより病気の発症・治療・食事の関係について理解できる。又、自分の食生活について振り返り、自己管理できるよう学ぶことが出来る。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	今何故栄養学なのか	食べる事の意見とは
2	栄養の基礎について	三大栄養素について学ぶ
3	病気と栄養について	病気の発症や治療と食事の関係について考える
4	主な疾患の栄養療法について	各疾患の栄養管理について学ぶ
5	栄養関連事項～嗜好品の考え方～	今後生活していく上での自己管理と嗜好品についての考え方を学ぶ
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義資料を復習する
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	講師の先生が資料を用意
参　考　書	リハビリテーションに役立つ栄養学の基礎(医歯薬出版) よくわかる栄養学の基本としくみ(秀和システム)
授業の留意点・備考	わからないことを積極的に質問してほしい。 とろみ剤や流動食の試飲等予定しています。積極的に参加してください。

科目名	病理学	担当教員	熊本大学大学院

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進						選択・必修	必修	

担当教員の実務経験	病理疾患の研究に携わった経験を講義に活用する。
授業概要	適切なリハビリテーションを実践するためには、疾病についての基礎的な知識を修得している必要がある。本講義では、疾病についての基礎的な知識や病態生理を教授し、さらに病理学の魅力についても伝えたい。
到達目標	・専門科目の学習に必要最低限の病理学的知識と、生涯学習の方法を修得すること。 ・疾病の基礎的な概念を理解している。 ・主な疾病の病態生理について説明できる。 ・問題解決型の学習法を修得している。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション 病因論：先天異常	病理学の概要、病因論（外因性疾患と内因性疾患）について学ぶ。
2	病因論：感染症	日和見感染症、誤嚥性肺炎、結核症、肝炎ウイルスについて学ぶ。
3	免疫反応	自然免疫と適応免疫、アレルギー、免疫不全等について学ぶ。
4	腫瘍総論	腫瘍の分類、形態学、組織学的特徴について学ぶ。
5	循環器障害	循環器系の概要、構成、全身の循環障害、局所の循環障害等について学ぶ。
6	退行性・進行性病変	萎縮の種類について、褥瘡の原因、壊死とアポトーシスの違い、肥大と過形成等について学ぶ。
7	老化・遺伝子異常・内分泌系の疾患	各疾患について学ぶ。
8	病理学各論：循環器	虚血性心疾患、心筋症、心筋炎、先天性心疾患等について学ぶ。
9	病理学各論：消化器	各疾患について学ぶ。
10	病理学各論：肝・胆嚢・膵	肝障害、代謝異常、胆嚢および胆道、膵炎等について学ぶ。
11	病理学各論：呼吸器	上気道の疾患、腫瘍、下気道の疾患等について学ぶ。
12	病理学各論：泌尿器	腎臓、下部尿路の疾患について学ぶ。
13	病理学各論：中枢神経	脳・神経系の疾患、感染症等について学ぶ。
14	病理学各論：血液疾患	赤血球系・白血球系・血小板・リンパ節の病理について学ぶ。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義ノートを復習する。
成績評価	☑ 定期試験 （ 100 %） ☐ 実技試験 （ %） ☐ 小テスト （ %） ☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %） ☐ 発表 （ %） ☐ その他 （ ）
教科書	わかりやすい病理学　改訂第７版　（南江堂）
参考書	
授業の留意点・備考	今までの受動的な学習態度から脱却し、より充実した学習を行うために、自主的な学習態度を身に付け、積極的に疑問に思ったことは質問すること。

科目名	内科学	担当教員	山下　昌洋

学科	理学作業言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	内科臨床と係った経験を活かし、地域リハビリテーションの実務に役立つ講義を行うことができる。
授　業　概　要	各症候、疾病がどのようにして発生するかという内科的病態生理を基礎として、要点はプリント図表に入れ、講義の習得が容易となるように配慮する。
到　達　目　標	①国家試験の過去問題（10年程度）を十分に理解し、トレーニングを行い、思考力を育てる。 ②教科書、講師からの資料を研習し、グループワークを行う場合には、積極的に参加し意見を発表する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	循環器（Ⅰ）	循環器の解剖、病理を理解する。浮腫の診断ができる。
2	循環器（Ⅱ）	虚血性心疾患、左心不全、右心不全を理解する。
3	循環器（Ⅲ）	高血圧、末梢循環について学ぶ。
4	呼吸器疾患（Ⅰ） 風邪症候群、その他	風邪を理解するために、症状の分析、原因を知り、診断する思考力を学ぶ。
5	呼吸器疾患（Ⅱ） 閉塞性換気障害、拘束性換気障害	呼吸器の解剖、病理を復習し、代表的な疾患について学習する。
6	糖尿病	糖尿病とは、合併症、低血糖症状を理解する。
7	消化器疾患	主な疾患について学ぶ。
8	肝疾患	ウイルス肝炎、肝硬変症、門脈硬直症その他について学ぶ。
9	内分泌	内分泌異常について学ぶ。
10	膠原病	膠原病、自己免疫疾患などについて学ぶ。
11	メタボリックとフレイル	メタボリックシンドローム、内臓脂肪と皮下脂肪、高齢者に見られるフレイル・サルコペニアについて学ぶ。
12	感染症	感染症、院内感染対策、標準予防法について学ぶ。
13	老年症候群、廃用症候群	高齢者の特有な疾患の内部障害を理解し、リハビリの臨床に役立たせる。
14	その他の内科疾患、腎不全など	主な疾患について学ぶ。
15	まとめ、復習	期末試験の対応について学ぶ。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	レポート（小テスト）を各テーマ毎に提出する。復習予習することで正確な解答を提出し、問題を解く思考力を育てる。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	PT・OT国家試験　専門基礎分野　臨床医学　2021：医歯薬出版
参　考　書	①病気がみえる vol.1～6、vol.8：メディックメディア ②クエスチョンバンクPT・OT国家試験問題解説2020：メディックメディア
授業の留意点・備考	内科学は単なる記憶の繰り返しではなく、症状を分析し、病理・解剖学などの知識を元に診断する。思考力が必要であることを理解する。

科目名	臨床神経学Ⅰ	担当教員	阪本　徹郎・倉富　晶 中瀬　卓・永利　聡仁

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	脳神経内科疾患の治療や研究に携わった経験を講義に活用する。
授　業　概　要	神経内科学的疾患（特に脳梗塞や神経変性疾患など、成人の運動機能障害を生じる疾患を中心に）の概説を行う。
到　達　目　標	代表的な神経疾患の病態と診断、治療について総合的に理解する。具体的には、神経系の構成を理解し、機能障害が発生した場合にどのような症状が現れるか理解する。その障害に対し有効な治療（根治的／対症療法的／予防的、リハビリテーション／薬剤／その他）について、総合的に理解する。それを基礎に、神経疾患治療におけるリハビリテーションの目標・役割について理解する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	中枢神経系の解剖と機能	神経系の構成，中枢神経の構造・機能，末梢神経
2	神経学的診断と評価	診察手順，障害の評価
3	神経学的検査法	画像診断，神経生理学的検査，自律神経機能検査，腰椎穿刺
4	意識障害、脳死、植物状態／ 頭痛、めまい、失神	意識障害の原因，脳死，植物状態／頭痛の分類，めまい，失神
5	運動麻痺、錐体路徴候、筋萎縮／ 錐体外路徴候、不随意運動	運動麻痺の分類・原因・評価，筋萎縮の分類・評価／ 錐体外路の解剖・機能とその障害
6	運動失調／感覚障害	運動失調の原因・評価／感覚障害の分布と特徴
7	高次脳機能障害①	総論，失語症，失認
8	高次脳機能障害②	失行，記憶障害
9	高次脳機能障害③	注意障害，遂行機能障害，構音障害，嚥下障害
10	脳神経外科領域／脳血管障害①	頭蓋内圧亢進，脳浮腫，脳ヘルニア，髄膜刺激症状／頭蓋内出血
11	脳血管障害②	脳梗塞，一過性脳虚血発作
12	脳血管障害③	脳血管障害の診断と治療
13	認知症	認知症の症状と病因，診断と治療
14	脳腫瘍／外傷性脳損傷	脳腫瘍の診断と分類／外傷性脳損傷の診断と治療
15	予備日	前期のまとめ

準備学習（予習復習）の具体的な内容	授業前にあらかじめ、講義内容を教科書で予習することが望まれる。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　神経内科学　第5版(医学書院)
参　考　書	病気がみえるvol.7脳・神経　第2版(メディックメディア)
授業の留意点・備考	スライド映写（主要なスライドは配布資料を作成する）と教科書を主体に講義形式での授業を進める。

科目名	臨床神経学Ⅱ	担当教員	阪本　徹郎・倉富　晶 中瀬　卓・永利　聡仁

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	脳神経内科疾患の治療や研究に携わった経験を講義に活用する。
授　業　概　要	神経内科学的疾患（特に脳梗塞や神経変性疾患など、成人の運動機能障害を生じる疾患を中心に）の概説を行う。
到　達　目　標	代表的な神経疾患の病態と診断、治療について総合的に理解する。具体的には、神経系の構成を理解し、機能障害が発生した場合にどのような症状が現れるか理解する。その障害に対し有効な治療（根治的／対症療法的／予防的、リハビリテーション／薬剤／その他）について、総合的に理解する。それを基礎に、神経疾患治療におけるリハビリテーションの目標・役割について理解する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	脊髄疾患①	脊髄損傷
2	脊髄疾患②	脊髄腫瘍
3	変性疾患、脱髄疾患①	脊髄小脳変性症，運動ニューロン疾患
4	変性疾患、脱髄疾患②	脱髄疾患
5	錐体外路の変性疾患①	パーキンソン病
6	錐体外路の変性疾患②	パーキンソン症候群，不随意運動を主症状とする疾患
7	末梢神経障害	末梢神経損傷，末梢性ニューロパチー
8	てんかん	てんかんの診断と治療
9	筋疾患①	進行性筋ジストロフィー，ミトコンドリア病，先天性ミオパチー
10	筋疾患②	多発性筋炎，周期性四肢麻痺，内分泌代謝性筋疾患，筋無力症
11	感染性疾患	髄膜炎，脳炎・脳症，脳膿瘍，神経梅毒，クロイツフェルト・ヤコブ病，他
12	中毒性疾患、栄養欠乏による神経疾患	水銀中毒，有機リン系農薬中毒，一酸化炭素中毒，ボツリヌス中毒，他
13	小児神経疾患／ 廃用症候群と誤用症候群、合併症	脳性麻痺，二分脊椎，他／廃用症候群，誤用症候群，合併症
14	排尿障害／性機能障害	排尿のメカニズム，神経因性膀胱／性機能障害
15	予備日	後期のまとめ

準備学習（予習復習）の具体的な内容	授業前にあらかじめ、講義内容を教科書で予習することが望まれる。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　神経内科学　第5版(医学書院)
参　考　書	病気がみえるvol.7脳・神経　第2版(メディックメディア)
授業の留意点・備考	スライド映写（主要なスライドは配布資料を作成する）と教科書を主体に講義形式での授業を進める。

科目名	精神医学	担当教員	山田　勝久

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	精神科領域の作業療法実務に携わった経験をいかし、精神医学において求められる基本的知識について講義を行う。
授　業　概　要	リハビリテーション実践の場で必要とされる精神症状や精神疾患を有する患者に必要な、基本的事項について学ぶ。
到　達　目　標	①精神医学の概要を説明することができる ②精神障害の成因と分類について説明することができる ③精神機能の障害と精神症状について説明することができる ④精神疾患について説明することが出来る

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション 精神医学とは	本講義のオリエンテーション、精神医学とは、精神障害に関わる概念、精神障害の成因、精神障害の分類について学ぶ
2	精神機能の障害と精神症状①	精神機能の障害と精神症状、意識・知能とその障害を学ぶ
3	精神機能の障害と精神症状②	性格・記憶・感情①とその障害を学ぶ
4	精神機能の障害と精神症状③	感情②・欲動および意志・自我意識・知覚とその障害を学ぶ
5	精神機能の障害と精神症状④	思考①とその障害を学ぶ
6	精神機能の障害と精神症状⑤ 統合失調症及びその関連障害①	思考②・病識とその障害、統合失調症とは、統合失調症の疫学・成因ないし病態・精神症状の特徴を学ぶ
7	統合失調症及びその関連障害②	統合失調症の病型、経過と予後、治療とリハビリテーションについて学ぶ
8	気分（感情）障害①	気分障害とは、うつ病の疫学、うつ病の症状の特徴、うつ病の発症の機制について学ぶ
9	気分（感情）障害②	うつ病の病型をめぐって、躁うつ病の疫学、躁うつ病の症状、躁うつ病の発症の機制、経過及び予後、経過、うつ病・躁うつ病の治療を学ぶ
10	神経症性障害とその特徴	神経症性障害の概念、不安及び恐怖症・恐怖・強迫を中心とする神経症性障害、ストレス関連障害、解離性障害、身体表現性障害について学ぶ
11	精神作用物質による精神および行動の障害	精神作用物質による障害の定義、アルコール関連精神障害、薬物依存による精神障害、治療と回復について学ぶ
12	パーソナリティ障害 精神遅滞	成人のパーソナリティの障害、精神遅滞の概念、疫学、頻度の高い精神遅滞について学ぶ
13	てんかん	定義と概念、疫学、てんかんの発作症状と精神疾患、てんかんにともなう精神障害、経過と予後、てんかんの治療について学ぶ
14	生理的障害および身体的要因に関連した障害	摂食障害（神経性無食欲症・神経性大食症）、睡眠障害について学ぶ
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	広範囲に渡る講義であるため復習をその都度行うこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　精神医学（第4版）医学書院
参　考　書	現代臨床精神医学（改訂第１１版）　金原出版
授業の留意点・備考	

科目名	画像診断学	担当教員	林　　学

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験５年以上（介護老人保健施設・成人期の病院）の臨床経験を活かし、また医学系大学院で研鑽を積んだ脳機能病態学をもとに、画像診断学に関する講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	・画像診断の定義について学ぶ。 ・ＣＴ画像・ＭＲＩ画像の特性について学ぶ。 ・正常なＣＴ画像・ＭＲＩ画像と重要な部位について学ぶ。 ・異常が認められるＣＴ画像・ＭＲＩ画像とその病巣について学ぶ。
到　達　目　標	・画像診断の定義について説明できる。 ・ＣＴ画像・ＭＲＩ画像の特性について説明できる。 ・正常なＣＴ画像・ＭＲＩ画像と重要な部位について説明できる。 ・異常が認められるＣＴ画像・ＭＲＩ画像とその病巣について説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	画像診断について	画像診断の定義とその意味について理解する。
2	画像の種類について１	ＣＴ画像とＭＲＩ画像のそれぞれの特性について理解する。
3	画像の種類について２	ＣＴ画像とＭＲＩ画像の見分け方・読み方について理解する。
4	正常画像について１	ＣＴ画像における正常画像とその特性・重要部位について理解する。
5	正常画像について２	ＭＲＩ画像における正常画像とその特性・重要部位について理解する。
6	正常画像について３	ＣＴ画像とＭＲＩ画像ついての留意点を理解する。
7	異常が認められる画像について１	脳出血の場合についての要点を理解する。
8	異常が認められる画像について２	脳梗塞の場合についての要点を理解する。
9	異常が認められる画像について３	変性疾患の場合についての要点を理解する。
10	異常が認められる画像について４	脳腫瘍の場合についての要点を理解する。
11	異常が認められる画像について５	特殊な疾患の場合についての特徴を理解する。
12	読影演習１	脳梗塞・脳出血の画像読影の要点を理解する。
13	読影演習２	脳梗塞・脳出血の画像読影の要点を理解する。
14	読影演習３	変性疾患・脳腫瘍・特殊な疾患における読影の要点を理解する。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	画像診断は病態を知る上で一つの手がかりになるため、臨床では症状と擦りあわせを行う上で参考となる。ここでは正常画像と重要な部位の理解を深め、損傷部位を読影できるようになってもらいたい。事前学習では正常画像をよく見ておくことが重要である。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 ％）☐ 実技試験　（　　％）☐ 小テスト　（　　％）☐ レポート　（　　％） ☐ 課題　（　　％）☐ 発表　（　　％）☐ その他（　　）
教　科　書	ＣＴ・ＭＲＩ画像解剖ポケットアトラス１　頭部・頸部　第４版 メディカル・サイエンス・インターナショナル
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	リハビリテーション医学	担当教員	金澤知徳/宮崎裕士/竹本舞

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	医師、理学療法士、作業療法士としてリハビリテーションに携わってきた経験をもとに、リハビリテーション医学とは何か、疾患別のリハビリテーションについての講義を行う。
授業概要	リハビリテーション医学とは何か、成り立ちと今後について、さらに基礎となる学問体系を概説し、リハビリテーションで対象となる疾患に対する診断や治療の進め方を解説する。
到達目標	リハビリテーションの一連の流れ、概略、歴史について説明できる。 疾患別のリハビリテーションを説明できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	リハビリテーション医学とは何か	（金澤）リハビリテーション概論についての理解（リハビリテーションの理念や領域、チーム医療等）
2	リハビリテーション医学とは何か	（金澤）リハビリテーション概論についての理解（リハビリテーションの理念や領域、チーム医療等）
3	リハビリテーション医学とは何か	（金澤）リハビリテーション概論についての理解（リハビリテーションの理念や領域、チーム医療等）
4	リハビリテーション医学とは何か	（金澤）リハビリテーション概論についての理解（リハビリテーションの理念や領域、チーム医療等）
5	脳卒中のリハビリテーション	(竹本)疾患についての理解、病期別のリハビリテーション、具体的なアプローチ
6	パーキンソン症候群のリハビリテーション	(竹本)パーキンソン病とは、臨床症状、障害評価、治療とリハビリテーション
7	神経変性疾患、神経筋疾患のリハビリテーション	(竹本)疾患についての理解、一般的治療と薬物療法、リハビリテーション治療の概要
8	脊髄損傷のリハビリテーション	(竹本)脊髄損傷の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム
9	四肢切断のリハビリテーション 生活習慣病のリハビリテーション	(宮崎)四肢切断の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム 生活習慣病の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム
10	運動器疾患のリハビリテーション	(宮崎)運動器疾患の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム
11	関節リウマチのリハビリテーション	(竹本)疾患についての理解、一般的治療の流れ、リハビリテーション治療の要点
12	脳性麻痺のリハビリテーション	(宮崎)脳性麻痺の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム
13	心筋梗塞のリハビリテーション	(宮崎)心筋梗塞の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム
14	呼吸器疾患のリハビリテーション	(宮崎)呼吸器疾患の症状、機能障害の評価、リハビリテーションプログラム
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書や配布資料をよく読み復習すること。
成績評価	☑ 定期試験 （ 100 %）☐ 実技試験 （ %）☐ 小テスト （ %）☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %）☐ 発表 （ %）☐ その他 （ ）
教科書	PT・OT・STを目指す人のためのリハビリテーション総論：診断と治療社
参考書	適宜資料を配布
授業の留意点・備考	金澤先生の講義および試験は後期に行います。そのため試験結果は前期・後期分を合算し後期に提示します。

科目名	耳鼻咽喉科学	担当教員	山本　麻代 熊本大学病院耳鼻咽喉科・頭頸部外科

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	耳鼻咽喉科医としての経験をもとに、実臨床の現場に基づいた講義を行う。 耳鼻咽喉科専属言語聴覚士としての経験をもとに、実臨床の現場に基づいた講義を行う。
授　業　概　要	言語聴覚士を目指すうえで必要とされる耳鼻咽喉科領域の解剖、生理、疾患についての学習を行う。
到　達　目　標	1) 耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の解剖・診断・ 検査について系統的に学習する。 2) 耳鼻咽喉科・頭頸部外科領域の疾患についての治療方法について学習する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	耳鼻咽喉科総論	耳鼻咽喉科領域の疾患を学ぶ上での導入　（竹本　梨紗先生）
2	鼻の解剖と生理	鼻の構造と生理的機能を学ぶ　（倉岡　薫瑠子先生）
3	鼻の疾患	鼻の疾患を学ぶ　（倉岡　薫瑠子先生）
4	口腔咽頭の解剖と生理	口腔咽頭領域の解剖と機能に関して　（村上　瑛先生）
5	口腔咽頭の疾患	口腔咽頭領域の疾患と治療に関して　（村上　瑛先生）
6	喉頭の疾患	喉頭の解剖と疾患、治療を学ぶ　（竹本　梨紗先生）
7	気管食道の解剖生理、疾患	気管食道の解剖生理、疾患を学ぶ　（竹本　梨紗先生）
8	耳の解剖と生理	耳の解剖と生理を学ぶ。
9	耳の検査	聴力検査の種類と方法を学ぶ。
10	耳の疾患①	耳の各疾患の特徴を学ぶ。
11	耳の疾患②	耳の各疾患の特徴を学ぶ。
12	補聴器と人工内耳	補聴器、人工内耳の特徴を学ぶ。
13	喉頭の解剖と生理	喉頭の解剖と生理を学ぶ。
14	摂食・嚥下障害の病態と評価	摂食・嚥下障害の病態と評価法を学ぶ。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他　（　　）
教　科　書	病気がみえる耳鼻咽喉科（医学情報科学研究所）
参　考　書	SUSSESS耳鼻咽喉科（金原出版株式会社）イラスト耳鼻咽喉科（文光堂）
授業の留意点・備考	ヒトが社会生活を営む上で必要な機能は、頭頸部に集中しており生活の質(QOL)の維持向上に必須である。頭頸部の機能外科として、耳鼻咽喉科は今後ますます重要性を増してくる領域である。積極的に講義に参加し、予習・復習を行ってほしい。

科目名	形成外科学	担当教員	久保　隆太

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	再建手術や各種形成術・外科的矯正など、形成外科的要素を含む口腔外科手術は少なくない。 その様な手術に携わった経験を活かし、形成外科学について講義・演習を行う。
授　業　概　要	形成外科学について講義・演習を行うことで、言語聴覚士として必要な形成外科的知識の習得を目指す。
到　達　目　標	形成外科的アプローチが必要な疾患の特徴とその治療法を理解し、機能障害に対する言語聴覚士のアプローチにまで学習・理解を派生させる。

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション・形成外科学総論	形成外科学の総論について学ぶ。
2	形成外科基本手技	形成外科の基本手技（切開・縫合など）について学ぶ。
3	形成再建外科総論	形成再建外科の概略を学ぶ。
4	形成再建外科各論	植皮や皮弁、硬組織を用いた再建手術など各論を学ぶ
5	皮膚良性腫瘍の手術	形成外科的な良性腫瘍の手術手技について学ぶ。
6	中間小テスト	第1～5回の講義内容を理解し、知識をアウトプットできる。
7	皮膚悪性腫瘍の手術	形成外科的な悪性腫瘍の手術手技について学ぶ。
8	頭頸部疾患の手術	形成外科的な頭頸部疾患（先天性疾患、腫瘍性疾患）の手術手技について学ぶ。
9	口唇裂・口蓋裂　①	口唇裂・口蓋裂の概論を学ぶ。
10	口唇裂・口蓋裂　②	口唇裂・口蓋裂の経過、長期治療計画とその予後について学ぶ。
11	その他の疾患に対する形成外科的治療	その他の疾患に対する形成外科的治療について学ぶ。
12	総括	これまでに学習した内容を復習し、理解を深める。
13		
14		
15		

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を読んでおいてください。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 60 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 40 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	
参　考　書	
授業の留意点・備考	授業中に分からないことや疑問に思ったことがあれば遠慮なく質問して頂いて構いません。 ※シラバスの内容は一部変更される場合がありますのでご了承ください。

科目名	小児科学	担当教員	非常勤講師/専任教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	小児科医の臨床経験を活かし、子どもの体の成長と機能の発達、健康状態の評価方法の基礎知識について講義を行う。また行政業務に携わった経験を活かし、社会福祉体系についても述べることができる。
授業概要	・子どもの出生から思春期にいたるまでの健康と発達を理解し、将来の社会人として最大限の能力を発揮できるように支援することを学ぶ。 ・子どもの体の生長と機能の発達の特徴を学び、その正常な生長と発達の障害の原因を理解する。如何にして子どもの健康状態を評価するかの基礎知識を得る。
到達目標	将来、医療に携わる専門職として不可欠な小児の生長と発達及び育児環境について社会体制を含め体系的な理解を得る。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	小児科学とは	小児におけるライフステージ毎の課題を学ぶ。
2	成長と発達	発達法則性、反射の発達的変化および正常発達を学ぶ。
3	診断と治療	治療・訓練に必要となる診察と検査の過程を学ぶ。
4	新生児と未熟児	新生児および未熟児の現代の傾向と医学的評価方法を学ぶ。
5	先天異常と遺伝病	先天異常の発生要因や、代表的な病気（ダウン症等）を学ぶ。
6	神経・筋・骨格の疾患（1）	原因別の代表的な疾患（てんかん等）について学ぶ。
7	神経・筋・骨格の疾患（2）	原因別の代表的な疾患（筋疾患、筋ジストロフィー等）について学ぶ。
8	内分泌疾患	各種ホルモンの生理を理解し、小児の内分泌謝疾患を学習する。
9	循環器疾患	循環器の生理を理解し、心機能障害（先天性・後天性）の臨床症状を学習する。
10	呼吸器疾患	呼吸器の生理を理解し、呼吸機能の臨床症状や代表的疾患を学習する。
11	眼科、耳鼻科的疾患	視機能の発達と異常、聴覚障害の代表的疾患を学ぶ。
12	心身医学的疾患	重症心身障害児特有の身体的問題と神経学的問題を学ぶ。
13	消化器疾患	小児の消化器疾患の症状の特徴を学ぶ。
14	小児科学トピックス	発達障害（ASD、LD、ADHD）の最新知見を学ぶ。
15	代謝性疾患	代謝の生理を理解し、糖尿病の臨床症状や代表的疾患を学習する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	特になし。
成績評価	☑ 定期試験（100 %）☐ 実技試験（ %）☐ 小テスト（ %）☐ レポート（ %） ☐ 課題（ %）☐ 発表（ %）☐ その他（ ）
教科書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　小児科学　第5版（医学書院）
参考書	特になし。
授業の留意点・備考	担当教員により授業計画は前後する。

科目名	臨床歯科学（口腔外科学）	担当教員	井上　淳貴

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	臨床歯科医学1							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	歯科・口腔外科の実臨床及び研究に携わった経験を活かし、言語聴覚士に必要とされる歯科医学・口腔外科学について講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	口腔・顎顔面領域の構造・機能、及び各種疾患の病態・治療法について講義・演習を行うことで、言語聴覚士として必要な歯科・口腔外科学の知識習得を目指す。
到　達　目　標	各種病態（先天性疾患・感染性疾患。組織病変）及び外科的処置を理解し、各疾患についての特徴・機能障害が説明できる。また、病態による機能障害が、外科的処置によってどのように改善回復出来るか、またどのような術後障害が生じ得るのかについて説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション・歯学総論	歯学の歴史を認識し、歯牙の発生と構造、口腔機能について理解する。
2	臨床歯科医学①	歯科疾患とその治療（保存修復・歯内療法）について理解する。
3	臨床歯科医学②	歯科疾患とその治療（歯周治療・欠損補綴）について理解する。
4	顎顔面の形態異常・先天性疾患	顎顔面形態異常・先天性疾患の特徴・治療法について理解する。
5	顎顔面外傷・炎症	顎顔面領域の外傷と炎症性疾患の特徴・治療法について理解する。
6	口腔粘膜疾患	口腔粘膜疾患の種類・各特徴について理解する。
7	口腔・顎顔面領域の嚢胞	口腔顎顔面領域の嚢胞の特徴・治療法について理解する。
8	中間テスト	第1～7回の講義内容を理解し、知識をアウトプットできる。
9	腫瘍性病変	口腔顎顔面領域の腫瘍の特徴・治療法について理解する。
10	顎関節疾患・唾液腺疾患	顎関節疾患・唾液腺疾患の特徴・治療法について理解する。
11	神経疾患・口腔機能障害①	顎顔面領域における神経疾患の特徴・治療法について理解する。
12	口腔機能障害②	口腔機能障害の概略・治療・評価法について理解する。
13	口腔外科の治療法	口腔外科手術、悪性腫瘍への各種治療法について理解する。
14	口腔ケア・救急蘇生	口腔ケアの役割と重要性、救急蘇生法について理解する。
15	総括	これまでに学習した内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を読んでおくこと。（授業は医学書院の教科書をメインに進めます。医歯薬出版の教科書は参考書として使用することがあるので授業には持参しておいてください。）
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 60 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 40 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	言語聴覚士のための基礎知識 臨床歯科医学・口腔外科学　第2版：医学書院 言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学 器質性構音障害　第版：医歯薬出版
参　考　書	
授業の留意点・備考	授業中に分からないことや疑問に思ったことがあれば遠慮なく質問して頂いて構いません。 可能な限り皆のペースに合わせて講義を進めようと思います。

科目名	脳神経外科学/神経系の構造・機能・病態	担当教員	斎藤　義樹

学科	理学作業言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	疾病と障害の成り立ち及び回復過程の促進							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	脳神経疾患の治療や研究に携わった経験を講義に活用する。
授　業　概　要	神経解剖や脳神経疾患について基本的な知識を概説する。
到　達　目　標	リハビリテーションにおける脳神経外科学の重要性を理解し実臨床に活用できるようにする。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	神経系の解剖１	中枢神経、末梢神経、脳血管、脳脊髄液、等
2	神経系の解剖２	錐体路、錐体外路、知覚伝導路、等
3	脳血管障害１	脳出血、くも膜下出血、等
4	脳血管障害２	脳梗塞、一過性脳虚血発作、等
5	頭部外傷	急性王幕外血腫、急性硬膜下血腫、脳挫傷、等
6	脳腫瘍	脳実質内腫瘍、脳実質外腫瘍、神経皮膚症候群、等
7	脊髄・脊椎疾患	脊髄空洞症、脊髄腫瘍、脊髄半切症候群、等
8	機能的脳神経外科	片側顔面けいれん、三叉神経痛、不随意運動、等
9	先天異常	二分頭蓋、二分脊椎、等
10	中枢神経系の感染症	髄膜炎、脳炎、脳膿瘍、等
11	障害部位と神経症状１	錐体路障害、錐体外路障害、等
12	障害部位と神経症状２	頭蓋内圧亢進、脳ヘルニア、等
13	障害部位と神経症状３	意識障害、高次脳機能障害、等
14	まとめ１	問題を解説しながら疾患の理解を深める
15	まとめ２	問題を解説しながら疾患の理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書を読んでおく。講義ノートを復習する。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準理学療法学・作業療法学　専門基礎分野　神経内科学　第5版：医学書院
参　考　書	病気がみえる vol.7 脳・神経：メディックメディア
授業の留意点・備考	私語を慎み周囲の人に迷惑をかけない。

科目名	呼吸発声発語系の構造・機能・病態	担当教員	田中　裕己

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	音声・言語・聴覚医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	回復期リハビリテーション病院で勤務した経験を活かし、言語聴覚士が対象とする疾患に関わる解剖学的な知識ついて講義・演習を行うことができる。
授業概要	発声発語器官の解剖的な知識を身に付け、より具体的に発声のメカニズムについて学習する。
到達目標	正常な発声時の発声発語器官の動きを説明できる。声帯から口唇に至る発声発語器官の動きを一連の流れとして説明できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	運動障害性構音障害の定義や概要、発声時の各器官の動きの一連の流れを学ぶ。体表解剖や触診を行う上で、基本的な用語や手技の理解。
2	脊柱と横隔膜、胸郭の解剖①	脊柱の構造や胸郭の構成器官について学ぶ
3	脊柱と横隔膜、胸郭の解剖②	脊柱と胸郭の骨と骨指標の確認・脊柱と胸郭の筋肉の触診
4	脊柱と横隔膜、胸郭の解剖③	脊柱と胸郭の骨と骨指標の確認・脊柱と胸郭の筋肉の触診
5	喉頭の解剖①	頭部、頚部、顔面部の骨と骨指標、筋について学ぶ
6	喉頭ぼ解剖②	頭部、頚部、顔面部の骨と骨指標、筋の触診
7	喉頭ぼ解剖③	頭部、頚部、顔面部の骨と骨指標、筋の触診
8	咽頭と軟口蓋の解剖	上中下咽頭と軟口蓋の解剖について学ぶ
9	咽頭と軟口蓋の生理	発声時の軟口蓋の働きについて学ぶ
10	表情筋の解剖	表情筋の解剖、特に神経支配ぼ分布について学ぶ
11	表情筋の生理、発話時の機能	発声時の表情筋の働きについて学ぶ
12	舌の解剖	内外舌筋の解剖について学ぶ
13	舌の生理、発話時の機能	発声時の舌の働きについて学ぶ
14	まとめ①	これまでの授業内容を復習し理解を深める
15	まとめ②	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定教科書の該当箇所について、事前に目を通しておく
成績評価	☑ 定期試験（ 50 %）☐ 実技試験（ %）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（ %） ☐ 課題（ %）☐ 発表（ %）☐ その他（ ）
教科書	ディサースリアの基礎と臨床　第１巻　理論編
参考書	特になし
授業の留意点・備考	触診の回では、Tシャツなどの軽装で実施

科目名	聴覚系の構造・機能・病態	担当教員	山本　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	音声・言語・聴覚医学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	宮崎大学難聴支援センターにおいて、聴覚領域での言語聴覚療法に従事した経験を活かし、聴覚系の構造や機能、各構造に起こる疾患について専門的に指導を行うことが出来る。
授　業　概　要	聴覚系の基本的な構造と各々の機能を理解し、聴覚に関連する用語とともに学ぶ。
到　達　目　標	聴覚系の基本的な構造とその機能、各部疾患を説明出来る。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	スケッチを通して耳の構造を学ぶ。
2	耳の解剖①	外耳、中耳の解剖とその働きを学ぶ。
3	耳の解剖②	内耳の解剖とその働きを学ぶ。
4	聴覚伝導路	音の伝わりの流れを学ぶ。
5	聴覚生理	中耳伝音系、内耳感音系、聴皮質について学ぶ。
6	聴覚検査と鑑別①	純音聴力検査を学ぶ。
7	聴覚検査と鑑別②	自記ｵｰｼﾞｵﾒﾄﾘ、ABR、ｲﾝﾋﾟｰﾀﾞﾝｽｵｰｼﾞｵﾒﾄﾘを学ぶ。
8	聴覚検査体験	検査機器に触れる。
9	外耳の疾患	外耳特有の疾患を理解する。
10	中耳の疾患①	中耳特有の疾患を理解する。
11	中耳の疾患②	中耳特有の疾患を理解する。
12	内耳の疾患①	内耳特有の疾患を理解する。
13	内耳の疾患②	内耳特有の疾患を理解する。
14	後迷路性難聴 機能性難聴	後迷路、機能性難聴について学ぶ。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	授業の最後に次コマの内容の説明を行うので、各自予習をして講義に臨むこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	病気がみえる耳鼻咽喉科（医学情報科学研究所）
参　考　書	ＳＵＣＣＥＳＳ耳鼻咽喉科第２版　金原出版株式会社 イラスト耳鼻咽喉科第４版　文光堂
授業の留意点・備考	聴覚の基盤となる講義です。毎回の復習をしっかり行うこと。

科目名	心理学	担当教員	井田　博子

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	心理学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	心理検査等の客観的データと来談者の主観的世界への共感に基づく支援の両方に関わる経験から、心理学にもともと内包される2つの極（主観と客観）の葛藤と発展のダイナミズムに着目しリハビリテーション実践に活かせる視点を提供したい。
授　業　概　要	人の心は直接目で見ることはできないと言われる一方、他人の痛みや苦しみを自分のことのように感じることもある。心を知る方法について様々の観点をとり上げてみたい。
到　達　目　標	心理学の基礎を学び、人間理解の様々の方法を学ぶ。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション「経験と科学」	論理学や数学とは異なり、経験科学は感覚的に知られた（知覚された）事実に基づいていることを確認する。
2	知覚を説明する試みと概念	客観的な刺激に対応する感覚の一つ一つを連合すると知覚が成立するという仮説について考える。
3	よくある錯覚と、知覚の両義性	知覚は厳密な科学の基礎であるが、その前に生活の基盤であるということを学ぶ。
4	知覚の優位性と意味や価値	知覚はまず、生活の中で主観的な意味や価値を知る手段であることを確認する。
5	行動のとらえ方と学習理論	心は見えにくくても、行動は見たまま観察できると言われる。
6	条件反射と古典的学習	客観的な刺激の一つ一つに反応の一つ一つが対応するという仮説について考える。
7	オペラント学習	生命体の行動は、ロボットのコンピューターをプログラムするより、報酬のあり・なしで、直接実現されることを学ぶ。
8	観察学習と洞察学習	ヒトの子どもは見たら何でも模倣するが、分析した要素を演算する手間もいらず、ひと目で多くのことがわかるようになることを確認する。
9	心理テスト　実習	バウム・テストとエゴグラムの受検体験をする。
10	心理テスト　解釈	初心者でもわかりやすい範囲で解釈を試みる。
11	性格のとらえ方	心理テストには、投映法と質問紙法と作業検査法があることを学ぶ。
12	性格と家族関係の役割	幼い頃から無意識に家族間のバランスをとる行動が発達しやすいことに注目する。
13	無意識と幼児期の発達	幼児期の発達段階に応じた課題と危機について学ぶ。
14	ストレスへの対処と健康	無意識の認知や行動のパターンと心の健康について考える。
15	まとめ	試験

準備学習（予習復習）の具体的な内容	シラバスや配布された資料をよく読み、なじみのない言葉や言葉づかいは、辞書で調べておき、はっきりしない場合は質問すること。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（約95 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☑ その他　（　実習のまとめと解釈を提出　）
教　科　書	講師の先生が資料を準備
参　考　書	斉藤勇著『イラストレート心理学入門』誠信書房
授業の留意点・備考	この教科の配布資料は他の教科のものとは別に、単独のファイルにすること。

科目名	心理測定法	担当教員	林　学

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門基礎分野	教育内容	心理学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	教育学系大学院および医学系大学院での研究を通じ、その知見を活かして講義を行う。
授業概要	言語聴覚士の仕事で用いられる各種心理測定法の意味に関する理解を深めると共に、人間の心理を客観的に把握する方法の習得を目指す。
到達目標	言語聴覚士として必要不可欠な心理学の知識を身につけると共に、国家試験問題に対応できる応用力を身につける。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	授業の進め方について／心理学的測定法とは
2	心理物理学（精神物理学）的測定法（1）	測定と尺度水準／誤差
3	心理物理学（精神物理学）的測定法（2）	心理物理学（精神物理学）的測定法／閾値
4	心理物理学（精神物理学）的測定法（3）	調整法／極限法
5	心理物理学（精神物理学）的測定法（4）	恒常法／マグニチュード推定法
6	心理物理学（精神物理学）的測定法（5）	信号検出理論
7	テスト理論（1）	心理検査（心理テスト）／テスト理論
8	テスト理論（2）	検査の妥当性と信頼性
9	尺度構成法（1）	尺度構成法／評定法
10	尺度構成法（2）	多次元尺度構成法
11	調査法（1）	調査法の概要／質問紙法
12	調査法（2）	サンプリング（標本抽出）
13	データ解析法（1）	統計学と言語聴覚療法
14	データ解析法（2）	多変量解析によるデータ解析
15	心理測定法の総復習	これまでの授業内容を復習し理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	パソコンを持ってきてください。 簡易的なレポートを課題とします。提出期限を厳守してください。
成績評価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	言語聴覚士のための心理学 第２版　山田弘幸編集　医歯薬出版株式会社
参考書	心理学　第５版　鹿取廣人　杉本敏夫　鳥居修晃編　東京大学出版社 キーワードコレクション　心理学改訂版　重野純編　新曜社
授業の留意点・備考	心理測定法の原理を知り、その意味を理解してほしい。また、国家試験の問題を解けるように、基礎学力を身につけて欲しい。

科目名	発達心理学	担当教員	坂本　友昭

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	心理学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	児童相談所やこども総合療育センター等でこどもの相談業務に携わった経験を活かし、こどもの発達を中心に講義を行う。
授　業　概　要	発達心理学は生涯にわたった発達ではあるが、特にこどもの発達を中心に言葉の土台になる認知、愛着、対人関係、自己の発達、社会性、遊び等の発達について学習する。
到　達　目　標	言語療法士として、言葉の発達相談、指導を行う時、言葉の視点からだけでなく、理解や遊びや対人関係など総合的で発達的な視点から子どもをとらえ、説明できる力をつける。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	発達心理学とは	発達とは獲得と喪失のプロセスで胎児期から死ぬまで　第1・3章2
2	遺伝と環境	発達には段階や課題があり、遺伝と環境の相互作用で発達する　第2・3章3.4.5
3	胎児期・周産期	出生前後の発達や母親の身体的・心理的問題の理解　第4章
4	乳児期（感覚の発達）	乳児期の感覚や研究方法を理解　第5章1.2.3
5	乳児期（運動の発達）	乳児期の運動の発達の特徴の理解　第5章4
6	愛着の発達①	愛着の発達段階や個人差を理解　第6章1.2.3
7	愛着の発達②	愛着発達不全の理解　第6章4.5
8	自己と感情の発達	感情の発達が自己意識と関係があること　第7章
9	認知の発達①	乳児期の認知の特徴　ピアジェ　第8章1.2.3
10	認知の発達②	幼児期の認知の特徴　第8章4.5
11	社会性、道徳性の発達	共同注意や心の理論等社会性の発達の特徴　第10章
12	遊び、仲間関係	遊びや仲間関係の発達の特徴　第11章
13	学童期	学童期の認知・社会性の理解　第15章1.2.3
14	青年期	青年期の特徴・アイデンティティの理解　第15章4.5.6
15	成人期～老年期	成人期～老年期の特徴　第16章

準備学習（予習復習）の具体的な内容	「教科書を読んでおく」「講義ノートを復習する」
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	ベーシック発達心理学：東京大学出版会
参　考　書	言語聴覚士のための心理学：医歯薬出版　問いからはじめる発達心理学：有斐閣
授業の留意点・備考	講義に関するテーマで２回レポートを提出し、講義内容を深める。

科目名	学習・認知心理学	担当教員	山口　信

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門基礎分野	教育内容	心理学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	熊本大学大学院博士課程において認知・心理学について学んだ知見を生かして講義を実施する。
授　業　概　要	言語聴覚士に必要とされる学習・認知心理学の諸分野について解説する。「感覚」「知覚・認知」「学習」「記憶」「対人認知」に関する内容を扱う。本講義では言語聴覚士に必要な心理学について学ぶ。
到　達　目　標	以下の４つの問いに対して，心理学の用語と具体例を用いて分かりやすく説明できる。 1．生体はどのようにして外の世界や自己についての情報を受け取るか？（ 感覚） 2．入力された感覚情報から，どのようにして主観的な世界が構成されるのか？（ 知覚・認知） 3．生体はどのようにして新しい知識や行動を獲得するか？（ 学習） 4．記憶はどのように形成され，保持され，思い出されるのか？（ 記憶）

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	科学としての心理学１	心理学の歴史
2	科学としての心理学２	信頼性と妥当性
3	感覚　(1)	感覚の種類と成立過程／心理量と物理量の対応
4	感覚　(2)	網膜と視知覚／色彩の知覚
5	感覚・知覚・認知　演習・レポート①	ストループ現象について
6	知覚・認知　(1)	形の知覚／奥行きの知覚／運動の知覚
7	知覚・認知　(2)	知覚の適応性（錯視と恒常性）／知覚の可塑性
8	感覚・知覚・認知　演習・レポート②	錯視について
9	学習　(1)	古典的条件づけ／オペラント条件づけ
10	学習　(2)	さまざまな学習（条件づけの展開／技能学習／社会的学習）
11	学習　レポート③	技能学習（実験・調査・レポート②）
12	記憶　(1)	記憶の過程と分類
13	記憶　(2)	短期記憶とワーキングメモリ／記憶の神経基盤
14	記憶レポート④	忘却／再生率
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	授業の復習をしてください。授業中に測定やレポート作成等を行います。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 50 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 50 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	言語聴覚士のための心理学
参　考　書	適宜資料を配布します。
授業の留意点・備考	

科目名	言語学	担当教員	山口　信

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義・演習
区分	基礎分野	教育内容	言語学							選択・必修	必修
担当教員の実務経験	大学で国文科に所属して言語学を専門的に学び、その後言語聴覚士として言語学的な治療・研究に携わってきた経験を生かし、学生に実践的な言語学を伝授することが可能と考える。										
授　業　概　要	・学生生活および社会生活に必要な言語的知識について学ぶ。 ・言語学についての基礎的な知識について学ぶ。 ・言語聴覚療法について言語学的な観点から学ぶ。										
到　達　目　標	・学生生活および社会生活に必要な言語的知識を身に着ける。 ・言語学についての基礎的な知識を身に着ける。 ・言語聴覚療法について言語学的な観点から実践できる基礎知識を身に着ける。										

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション 言語聴覚療法と言語学	本講義の進め方・評価の方法などについて説明を受ける。 言語聴覚療法と言語学の関係について学ぶ。
2	言語の性質 読解演習・作文演習	言語の基本的な性質である二重分節性・線条成・規則性・階層性について学ぶ。 日本語の技術についての演習を行う。
3	音韻論1：音素1 日本語技術演習	音素の表記・最小対・相補分布・異音とその障害について学ぶ。
4	音韻論2：音素2 日本語技術演習	母音音素・子音音素・モーラ音素・中和・形態音素とその障害について学ぶ。
5	音韻論3：弁別素性・音韻規則 日本語技術演習	弁別素性・音韻規則とその障害について学ぶ。
6	音韻論4：アクセント・イントネーション 日本語技術演習	アクセント・イントネーションとその障害について学ぶ。
7	統語論1：統語範疇・統語構造 日本語技術演習	統語範疇・統語構造とその障害について学ぶ。
8	統語論2：チョムスキーの生成文法 日本語技術演習	チョムスキーの生成文法とその障害について学ぶ。
9	統語論3：文法現象・文法関係 日本語技術演習	格・文法関係と主題関係・文法的一致とその障害について学ぶ。
10	語彙論1：語と形態素 日本語技術演習	語彙を形成する語・形態素とその障害について学ぶ。
11	語彙論2：語の形成過程 日本語技術演習	語の形成過程である合成(複合)・派生・混成・頭文字語・省略とその障害について学ぶ。
12	語彙論3：語の内部構造 日本語技術演習	語の内部構造とその障害について学ぶ。
13	意味論1：語の意味 日本語技術演習	語の意味とその障害について学ぶ。
14	意味論2：文の意味 日本語技術演習	文の意味とその障害について学ぶ。
15	まとめ	

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	語用論1：語用論とその障害1 日本語技術演習	語用論とその障害である自閉症スペクトラムについて学ぶ。
17	語用論2：語用論とその障害2 日本語技術演習	語用論と自閉症以外の語用論障害について学ぶ。
18	日本語の性質1：系統・語彙層 日本語技術演習	日本語の系統と語彙層について学ぶ。
19	日本語の性質2：音素・音節・モーラ 日本語技術演習	日本語の音素・音節・モーラについて学ぶ。
20	日本語の性質3：文字 日本語技術演習	日本語の文字とその障害について学ぶ。
21	日本語の性質：形態論的観点 日本語技術演習	形態論的な観点から見た日本語について学ぶ。
22	日本語の性質：統語論的観点 日本語技術演習	統語論的な観点から見た日本語について学ぶ。
23	日本語の性質：敬語 日本語技術演習	日本語の敬語について学ぶ。
24	失語症1：概説	失語症の定義・原因疾患・分類などについて学ぶ。
25	失語症2：話す側面	失語症の話す側面の障害とその評価・治療について学ぶ。
26	失語症3：聞く側面	失語症の聞く側面の障害とその評価・治療について学ぶ。
27	失語症4：書く側面	失語症の書く側面の障害とその評価・治療について学ぶ。
28	失語症5：読む側面	失語症の読む側面の障害とその評価・治療について学ぶ。
29	言語聴覚療法と言語学	言語聴覚療法と言語学の関係について改めて考える。
30	まとめ	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教材を事前に配布するので毎回の講義の前にその内容について読み、講義で何が行われるかを把握しておくこと。
成績評価	☑ 定期試験 （ 50 %）☐ 実技試験 （ %）☑ 小テスト （ 25 %）☐ レポート （ %） ☑ 課題 （ 25 %）☐ 発表 （ %）☐ その他 （ ）
教科書	言語聴覚士のための基礎知識　音声学・言語学
参考書	なし
授業の留意点・備考	過重な課題は与えないのでその分講義中には積極的に真剣に参加すること。居眠り等した場合には出席と認めない。

科目名	音声学	担当教員	増田　正彦

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	音声学							選択・必修	必修
担当教員の実務経験	九州大学大学院人文科学研究院　言語運用総合研究センターにて専門研究員として従事										
授　業　概　要	この授業では、言語の媒体である音声の調音的側面を中心に学んでいく。前半では、子音や母音の仕組みを学びつつ、それらを国際音声記号でどう表せばよいかを習得する。後半はプロソディー、つまり音節・アクセント・イントネーションなどについて学ぶ。										
到　達　目　標	日本語共通語に現れる音声を国際音声記号で表記し、その意味を説明できる。調音位置、調音方法、声門の状態などの点から子音を分析できる。舌の前後、高さ、円唇性などの点から母音を分析できる。日本語の韻律について説明できる。										

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション①	音声の種類、音声に関わる諸学問について学ぶ
2	オリエンテーション②	音声の種類、音声に関わる諸学問について学ぶ
3	子音の基本①-1	子音の分類方法（調音位置、調音方法、声帯振動の有無）について学ぶ
4	子音の基本①-2	子音の分類方法（調音位置、調音方法、声帯振動の有無）について学ぶ
5	子音の基本②-1	主に日本語共通語を例として、破裂音について学ぶ
6	子音の基本②-2	主に日本語共通語を例として、破裂音について学ぶ
7	子音の基本③-1	主に日本語共通語を例として、摩擦音について学ぶ
8	子音の基本③-2	主に日本語共通語を例として、摩擦音について学ぶ
9	子音の基本④-1	主に日本語共通語を例として、破擦音について学ぶ
10	子音の基本④-2	主に日本語共通語を例として、破擦音について学ぶ
11	子音の基本⑤-1	主に日本語共通語を例として、鼻音・接近音などについて学ぶ
12	子音の基本⑤-2	主に日本語共通語を例として、鼻音・接近音などについて学ぶ
13	子音の二次的調音①	通常の分類方法だけでは分析できない子音について学ぶ
14	子音の二次的調音②	通常の分類方法だけでは分析できない子音について学ぶ
15	子音の交替①	前後の環境に応じて子音が交替する現象について学ぶ

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	子音の交替②	前後の環境に応じて子音が交替する現象について学ぶ
17	母音①	母音の分類方法、第1次基本母音について学ぶ
18	母音②	母音の分類方法、第2次基本母音について学ぶ
19	母音の交替①	前後の環境に応じて母音が交替する現象について学ぶ
20	母音の交替②	前後の環境に応じて母音が交替する現象について学ぶ
21	音のまとまり①	モーラ・音節など、音のまとまりについて学ぶ
22	音のまとまり②	モーラ・音節など、音のまとまりについて学ぶ
23	アクセント①-1	音の高低の聞き取り、共通語のアクセントの語例について考える。
24	アクセント①-2	音の高低の聞き取り、共通語のアクセントの語例について考える。
25	アクセント②-1	共通語アクセントのパターンについて学ぶ
26	アクセント②-2	共通語アクセントのパターンについて学ぶ
27	アクセント③-1	語の種類（品詞など）によってアクセントがどう変わるかを学ぶ
28	アクセント③-2	語の種類（品詞など）によってアクセントがどう変わるかを学ぶ
29	イントネーション	文末イントネーション、ダウンステップ、自然下降などについて学ぶ
30	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	小テストを頻繁に行うので、講義のプリントを中心に復習をよく行うこと。
成績評価	☑ 定期試験 （ 70 %）☐ 実技試験 （ %）☑ 小テスト （ 30 %）☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %）☐ 発表 （ %）☐ その他 （ ）
教科書	日本語音声学入門　改訂版
参考書	なし
授業の留意点・備考	鏡とペンライトを毎回持参すること。

科目名	音響学	担当教員	藤井　忍

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	音響学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	音の性質の根本原理から音声に至るまでの全内容について、音響技術と教育との実務経験に基づいた、より具体的説明による講義ができる。
授　業　概　要	音の性質、伝搬現象などの基礎を把握した上で、「音声」を声帯や声道から発せられる音として認識し、音圧レベル（振幅）や周波数などの物理的尺度や音の種類との関連性を学習する。
到　達　目　標	音の基本的性質を理解し、振幅波形から波長や周期を求められると共に音の種類についての説明ができる。また、音圧と音圧レベルの相互変換ができ、パワー軸、周波数軸、時間軸の関係性を理解した上で、サウンドスペクトログラムによる母音や子音等の音響的特徴について明確な説明できるようになる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	はじめに／音とは何かを考える。	身近な音を考える。発生や伝搬メカニズム（縦波と横波など）を学ぶ。
2	音波の性質１	波長、周波数、周期の関係を知り、音の基本的性質について学ぶ。
3	音波の性質２	共鳴、回折、反射、屈折、ﾄﾞｯﾌﾟﾗｰ効果などの伝搬現象を学ぶ。
4	音波の性質３	弦、開管、閉管の共鳴の違い、閉管の共鳴と声道・外耳道の関係を把握する。
5	振幅軸の詳細１	音の強さと音圧の関係、音圧レベル変換方法などを学ぶ。
6	振幅軸の詳細２	デシベル（対数）、音圧レベルの位置づけ等の詳細について学ぶ。
7	周波数軸の詳細１	重ね合わせの原理、フィルタ（スペクトル分解）などについて学ぶ。
8	周波数軸の詳細２	楽器音の周波数特性、騒音レベル、音の種類について学ぶ。
9	サンプリング	時間軸と振幅軸のデジタル化について学ぶ。
10	音声音響学１	音声の生成（音源の音響的違い）、ソースフィルター理論などを学ぶ。
11	音声音響学２	母音のサウンドスペクトログラフによるフォルマント読取りを学び、音響的性質を確認する。
12	音声音響学３	子音のサウンドスペクトログラフによるフォルマント読取りを学び、音響的性質を確認する。
13	音声音響学４	アンチフォルマント、母音の無声化など補足的内容について学ぶ。
14	音声音響学５	総合分析、サウンドスペクトログラフによる言語の読取りを学ぶ。
15	試験	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	予めテキストを読み、理解できなくてもよいので配布した資料を下見して授業に望む。 復習よりも予習に時間をかけた方が効果的である。
成　績　評　価	☑ 定期試験（ 70 %）☐ 実技試験（ %）☑ 小テスト（ 20 %）☑ レポート（ %） ☑ 課題（ 10 %）☐ 発表（ %）☐ その他（ ）
教　科　書	青木直史著　「ゼロからはじめる音響学」　講談社　(ISBN978-4-06-156529-6)
参　考　書	吉田友敬著　「言語聴覚士の音響学入門（２訂版）」　海文堂　(ISBN978-4-303-61041-8)
授業の留意点・備考	テキストでは得られない内容を資料として配布します。併せてビデオやイメージ図を使った補足的説明を行います。文系の方に配慮したイメージによる覚え方を取り入れていますが、疑問には積極的に対応しますので気軽な声かけをお願いします。

科目名	聴覚心理学	担当教員	中島　栄俊

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	聴覚心理学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	音声・音響信号を用いた様々な研究に加え、長年に渡り補聴器メーカーとの共同研究を行ってきた中で得られた、聴覚に関する知見に基づいて講義をすることができる。
授業概要	空気の振動として耳に入力される物理的な音を、音情報として我々が理解する過程について学ぶとともに、その理解の過程における聴覚の様々な心理的メカニズムについて理解する。
到達目標	聴覚抹消系の基本的なメカニズムを理解し、音信号の情報が脳に伝達されるまでの過程を説明することができる。「音の大きさ」、「音の高さ」について、物理量と心理的な感覚量の違いについて説明することができる。周波数スペクトルから音の音色について説明することができる。マスキングの概念と、音信号の周波数知覚（周波数選択性）の関係を説明することができる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	聴覚抹消系の構造 1	外耳と中耳の仕組みと、それによって変化する音の特徴について学ぶ
2	聴覚抹消系の構造 2	内耳の生理学的構造と、音信号が神経信号に変換される仕組みについて学ぶ
3	聴覚抹消系の構造 3	音信号の物理的変化に対する聴神経の応答について学ぶ
4	音の大きさの知覚 1	刺激の変化に対する感覚の変化のモデルについて学ぶ
5	音の大きさの知覚 2	音の大きさに影響する物理的要因や音の大きさを表す尺度について学ぶ
6	音の大きさの知覚 3	聴覚障害特有の音の大きさの知覚について学ぶ
7	音の高さの知覚 1	音の高さに影響する物理的要因や音の高さを表す尺度について学ぶ
8	音の高さの知覚 2	聴覚抹消系の構造と音の高さの知覚の関係について学ぶ
9	中間試験	第1回から第8回までに学んだ範囲について理解度を確認する
10	マスキング 1	他の音の存在により音の知覚が困難になる現象であるマスキングについて学ぶ
11	マスキング 2	マスキングが生じる要因を聴覚抹消系の構造から理解する
12	両耳聴効果 1	左右の耳で音を聞くことによる効果について学ぶ
13	両耳聴効果 2	左右の耳で音を聞くことによる効果や視覚が音知覚に与える影響について学ぶ
14	音声音響学	音声生成の原理と音声周波数の特徴について学ぶ
15	総合演習	14回目までに学習した範囲の復習を行う

準備学習（予習復習）の具体的な内容	テキストを読み、サポートサイトで確認できる実際の音を事前に聞くことで大まかなイメージを掴んでおく
成績評価	☑ 定期試験　（ 60 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☑ その他（中間試験　40 %　）
教科書	青木直史著　「ゼロからはじめる音響学」　講談社　（ISBN978-4-06-156529-6）
参考書	B. C. J. ムーア 著　大串健吾 監訳　「聴覚心理学概論」　誠信書房（ISBN4-414-30275-7C3011）
授業の留意点・備考	なるべく平易に理解できるテキストを指定していますので、不足する内容については適宜資料を配布します。その他、メールやSNSを利用して情報発信をしますので、気軽に質問してください。

科目名	言語発達学	担当教員	黒川　一也

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	言語発達学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	県福祉総合相談所（児童相談所を含む）において、子どもの聞こえとことばの相談・指導の業務経験を活かし、こどものことばの発達について具体的な講義を行うことが出来る。
授業概要	乳児期、幼児期、学童期における言語発達過程について学ぶとともに、きこえとことばとの関係や全体発達の中でのことばの位置づけ、ことばの働きなどについて理解することを目的とする。 言語発達障害について学ぶ基礎とする。
到達目標	・ことばの働きについて理解する。 ・乳児期、幼児期、学童期における言語発達の特徴を理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	ことばときこえの関係、ことばの働き、ことばと概念
2	言語発達理論	学習説、生得説、認知説、社会認知説
3	ことばの側面	音韻論、意味論、統語論、語用論
4	前言語期の発達①	コミュニケーション行動の発達
5	前言語期の発達②	音韻の知覚と産出
6	前言語期の発達③	認知発達と言語
7	前言語期の発達④	認知発達と言語
8	一語文期の特徴	一語文から多語文へ
9	幼児期中期	自我の形成とことば
10	幼児期中期	内言と外言
11	幼児期後期	読み書き能力、一次的ことばと二次的ことば
12	学童期以降	コミュニケーション機能の発達
13	全体発達の流れ	子どもの遊びの観察（ビデオ）
14	子どもの遊びの観察（ビデオ）とまとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配付資料を確認の上、事前に読むこと
成績評価	☑ 定期試験（100 %）☐ 実技試験（　%）☐ 小テスト（　%）☐ レポート（　%） ☐ 課題（　%）☐ 発表（　%）☐ その他（　）
教科書	標準言語聴覚障害学　言語発達障害学　第２版・発声発語障害学　第2版
参考書	
授業の留意点・備考	

科目名	リハビリテーション概論	担当教員	有働　正二郎・平尾　浩志 林　　学

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	社会福祉・教育							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	１０年以上の臨床経験を活かし、リハビリテーションの概要について指導することが出来る。
授　業　概　要	リハビリテーションの理念と基本原理及びその仕組みについて学習する。病気・障害・発達・心理等の基本的内容について教授する。その後、リハビリテーションの諸段階及びリハビリテーションの過程の概要を学習する。　リハビリテーション概論で学習した内容を基盤として、各専門分野の理解が深まることを目的とする。
到　達　目　標	リハビリテーションの概念理解が出来る。病気・障害・発達の概念理解が出来る。人間活動の階層構造が理解出来る。国際生活機能分類の概略が理解出来る。神経心理学・臨床心理学とその内容について説明出来る。リハビリテーションの過程と諸段階での課題について説明出来る。医学的・教育的・職業的・社会的・高齢者の諸相について説明出来る。リハビリテーションのプロセスと手段について説明出来る。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション 障害者と社会	理学療法（士）及び作業療法（士）・言語聴覚（士）は法律にどのように規定されているのかを学ぶ　（有働）
2	リハビリテーションの定義と目的	リハビリテーションの言葉の由来や意味について学び、リハビリテーションの目的の変遷や社会制度の変革について学ぶ　（有働）
3	病気とは	病気の捉え方について、歴史的変遷について学ぶ　（有働）
4	障害とは	障害のモデル、特に国際障害分類（ＩＣＩＤＨ）・国際生活機能分類（ＩＣＦ）について学ぶ　（有働）
5	患者と障害者 慢性疾患モデル	患者と疾病行動や役割について学び、科学的根拠に基づく医療（ＥＢＭ）やクリニカルパス、二次的障害や予防医学について学ぶ　（有働）
6	機能志向的アプローチ ヘルスケア・システムと包括的ケア	機能志向的アプローチについて学び、ヘルスケアの概要について学ぶ　（有働）
7	発達とは 人間活動	発達の定義を知り、発達研究や発達理論について概要を学ぶ　（有働）
8	リハビリテーションの過程 リハビリテーションの諸段階	評価とはなにか、評価学の重要性を学ぶ　（平尾） 医学的・職業的・社会的・教育的リハビリテーション
9	チームアプローチ	リハ専門職の役割　（平尾）
10	機能障害	疾病と外傷、先天異常及び精神障害　（平尾）
11	地域リハビリテーションと高齢者対策	老人福祉法・老人保健法・介護保険制度　（平尾）
12	#REF!	#REF!
13	#REF!	#REF!
14	#REF!	#REF!
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書のすべてを授業では行えません。講義が終わった項目までは、当日、教科書を読み直し復習を充分に行うこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	入門　リハビリテーション概論　第7版　　中村隆一　編　　医歯薬出版 リハビリテーション総論　診断と治療社
参　考　書	なし
授業の留意点・備考	リハビリテーションを学習する上での基本となる科目であることを充分認識しておくこと。

科目名	社会保障制度	担当教員	黒川　一也 山本　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	社会福祉・教育							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	県福祉総合相談所（身体障害者更生相談所）勤務中、身体障害者福祉司として従事。福祉行政の経験を活かした講義を構築し、指導することが出来る。
授　業　概　要	わが国の社会保障制度の全体構造を把握すると共にその仕組みを理解する。また、社会保障制度を各制度ごとに、法律・制度概要及びその実施方法などを理解する。
到　達　目　標	・　社会保障制度全体の法体系を理解する。 ・　社会保障制度毎にその関係法・内容や仕組みを理解する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	1．講義の目標と構成・講義での約束 2．社会保障の定義と理念・機能
2	社会保障制度の体系	1．社会保険 2．社会扶助①公的扶助　②社会手当て　③社会福祉
3	社会保障の財源と実施体制	1．財源 2．実施体制
4	年金保険制度	年金保険制度関係各法
5	医療保険制度①	医療保険各法 国民健康保険
6	医療保険制度②	厚生医療保険 その他の医療保険制度
7	社会福祉制度	（1）社会福祉制度の法体系 （2）社会福祉制度の基本的運用制度
8	生活保護制度と社会手当て	生活保護制度
9	児童福祉制度①	（1）児童福祉法の概要 （2）障害児対策
10	児童福祉制度②	（3）子育て支援制度　一人親対策制度
11	障害福祉制度①	（1）法体系と基本的考え方 （2）障害者総合支援法
12	障害福祉制度②	（3）総合支援法以外の障害福祉制度
13	高齢者福祉制度①	（1）法体系 （2）高齢者医療制度
14	高齢者福祉制度②	（3）介護保険制度
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書、配布資料をよく読むこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 80 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 20 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	新・社会福祉士養成講座　社会保障　第６版　中央法規 社会保障制度指さしガイド　２０年度版　日総研
参　考　書	
授業の留意点・備考	覚えることの多い科目ですが、国家試験を見据え、整理して理解しましょう。

科目名	言語聴覚障害概論Ⅰ	担当教員	ST学科教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	言語聴覚障害学総論							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	各教員が豊かな経験に基づき講義・演習を行う
授業概要	・言語聴覚リハビリテーションに関連する音声、言語、聴覚における障害に触れる。
到達目標	・言語聴覚士法について知る。 ・スピーチチェインを理解する。 ・言語聴覚障害の種類と原因を知る。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	言語聴覚障害と言語聴覚士
2	言語聴覚士の業務内容	STの法律的位置、職場、活動、倫理
3	言語聴覚士に必要な基礎知識１	コミュニケーション障害にかかわる解剖1
4	言語聴覚士に必要な基礎知識２	コミュニケーション障害にかかわる解剖2
5	言語聴覚士に必要な基礎知識３	コミュニケーション障害にかかわる生理
6	言語聴覚士に必要な基礎知識４	言語聴覚障害・摂食嚥下障害の概要・分類
7	言語聴覚士に必要な基礎知識５	失語症Ⅰ
8	言語聴覚士に必要な基礎知識６	失語症Ⅱ
9	言語聴覚士に必要な基礎知識７	運動障害性構音障害Ⅰ
10	言語聴覚士に必要な基礎知識８	運動障害性構音障害Ⅱ
11	言語聴覚士に必要な基礎知識９	小児言語発達
12	言語聴覚士に必要な基礎知識１０	器質性・機能性構音障害
13	言語聴覚士に必要な基礎知識１１	聴覚障害Ⅰ(小児)
14	言語聴覚士に必要な基礎知識１２	聴覚障害Ⅱ(補聴器・人工内耳)
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	復習をしっかり行ってください。
成績評価	☑ 定期試験 （ 100 %）☐ 実技試験 （ %）☐ 小テスト （ %）☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %）☐ 発表 （ %）☐ その他 （ ）
教科書	標準言語聴覚障害学　言語聴覚障害学概論　言語聴覚士ドリルプラスシリーズ
参考書	
授業の留意点・備考	聞きなれない専門用語等がたくさんでてきますが、１つ１つしっかり理解しましょう。

科目名	言語聴覚障害概論Ⅱ	担当教員	ST学科教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	言語聴覚障害学総論							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	各教員が豊かな経験に基づき講義・演習を行う
授業概要	・三大コミュニケーション障害について理解する。
到達目標	・音声障害の概要について説明できる。 ・認知症によるコミュニケーション障害の概要について・高次脳機能障害の概要について説明できる。 ・言語発達障害の概要について説明できる。 ・摂食嚥下障害の概要について説明できる。 ・聴覚障害の概要について説明できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	高次脳機能障害について１	高次脳機能障害１（注意障害）
2	高次脳機能障害について２	高次脳機能障害２（記憶障害）
3	高次脳機能障害について３	高次脳機能障害３（遂行機能障害）
4	音声障害１	音声障害・無喉頭音声（喉頭の機能・発声の仕組み）
5	音声障害２	音声障害・無喉頭音声障害（障害と代替方法）
6	言語発達障害１	言語発達障害Ⅰ（コミュニケーション障害）
7	言語発達障害２	言語発達障害Ⅱ（自閉症・注意欠如多動性障害）
8	言語発達障害３	言語発達障害（吃音）
9	聴覚障害１	小児聴覚障害
10	聴覚障害２	成人聴覚障害
11	摂食・嚥下について１	摂食・嚥下障害Ⅰ（嚥下に必要な器官・嚥下の仕組み）
12	摂食・嚥下について２	摂食・嚥下障害Ⅱ（嚥下障害を引起す疾患）
13	摂食・嚥下について３	摂食・嚥下障害Ⅲ（嚥下障害の訓練）
14	コミュニケーション実際	実習発表
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	復習を行ってください。
成績評価	☑ 定期試験（ 70 %）☐ 実技試験（ %）☑ 小テスト（ 30 %）☐ レポート（ %） ☐ 課題（ %）☐ 発表（ %）☐ その他（ ）
教科書	標準言語聴覚障害学　言語聴覚障害学概論　言語聴覚士ドリルプラスシリーズ
参考書	適宜紹介します。
授業の留意点・備考	

科目名	言語聴覚障害診断学Ⅰ（成人分野）	担当教員	林　　学

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	言語聴覚障害学総論							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験５年以上（介護老人保健施設・成人期の病院）の臨床経験を活かし、また医学系大学院で研鑽を積んだ脳機能病態学をもとに、成人分野における言語聴覚障害診断に関する講義・演習を行うことができる。
授業概要	・言語聴覚障害における診断の流れについて学ぶ。 ・言語聴覚障害を診断する上での重要な視点について学ぶ。 ・成人分野における言語聴覚障害について学ぶ。 ・失語症・高次脳機能障害・運動性構音障害・嚥下障害等の診断について学ぶ。
到達目標	・言語聴覚障害における診断の流れが説明できる。 ・言語聴覚障害を診断する上での重要な視点について説明できる。 ・成人分野における言語聴覚障害について説明できる。 ・失語症・高次脳機能障害・運動性構音障害・嚥下障害等の診断について説明できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	言語聴覚障害診断について１	言語聴覚障害における診断の流れについて学ぶ。
2	言語聴覚障害診断について２	言語聴覚障害を診断する上での重要な視点について学ぶ。
3	言語聴覚障害について１	失語症について学ぶ。
4	言語聴覚障害について２	高次脳機能障害について学ぶ。
5	言語聴覚障害について３	運動性構音障害について学ぶ。
6	言語聴覚障害について４	嚥下障害について学ぶ。
7	言語聴覚障害について５	上記以外の言語聴覚士が遭遇する言語聴覚障害について学ぶ。
8	言語聴覚障害診断１	失語症の評価・診断について学ぶ。
9	言語聴覚障害診断２	高次脳機能障害の評価・診断について学ぶ。
10	言語聴覚障害診断３	運動性構音障害の評価・診断について学ぶ。
11	言語聴覚障害診断４	嚥下障害の評価・診断について学ぶ。
12	言語聴覚障害診断５	上記以外の言語聴覚士が遭遇する言語聴覚障害の評価・診断について学ぶ。
13	診断実践１	症状から問題点の抽出までを学ぶ。
14	診断実践２	症状から問題点の抽出までを学ぶ。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	言語聴覚障害の診断は一連の流れを経て確定診断を下すに至る訳だが、症状としては見た目同じであってもその実障害の中身が全く異なっていることも多い。これら紛らわしい障害を鑑別し診断を下すことは、経験を積まなければ難しい。ここでは各障害の特性を、まずはテキストを使って予習してきて貰いたい。
成績評価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	言語聴覚療法臨床マニュアル　改訂第３版　協同医書出版社
参考書	
授業の留意点・備考	適宜必要な資料は配布する。

科目名	言語聴覚障害診断学Ⅱ（小児分野）	担当教員	山本　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	言語聴覚障害学総論							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	小児臨床に携わった経験を活かし、小児言語聴覚リハビリテーションにおいて言語聴覚士が携わることの多い小児疾患の特徴と臨床の進め方を指導できる。
授　業　概　要	本授業は、小児の言語障害に対する評価から診断、訓練といった一連の流れについて学習する。 また、症例を通してレポート作成方法を学習する。
到　達　目　標	・情報収集内容を知る。 ・診断の流れを理解する。 ・レポートの作成方法を身につける。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	臨床実習の目的・種類・目標について学ぶ。
2	情報収集の項目と方法およびその解釈	臨床を行う上で基礎情報、現症に関する情報の収集について学ぶ。
3	評価・診断の知識①	知的障害領域の言語聴覚療法について学ぶ。
4	評価・診断の知識②	自閉症スペクトラム障害の言語聴覚療法について学ぶ。
5	評価・診断の知識③	学習障害領域の言語聴覚療法について学ぶ。
6	評価・診断の知識④	特異的言語発達障害領域の言語聴覚療法について学ぶ。
7	評価・診断の知識⑤	聴覚障害領域の言語聴覚療法について学ぶ。
8	評価・診断の知識⑥	構音障害、吃音領域の言語聴覚療法について学ぶ。
9	評価・診断の知識⑦	脳性麻痺、重症心身障害領域の言語聴覚療法について学ぶ。
10	評価・診断のまとめ方①	ケースレポートのまとめ方を学ぶ。
11	評価・診断のまとめ方②	ケースレポートのまとめ方を学ぶ。
12	小児評価法①	小児評価法をまとめる。
13	小児評価法②	小児評価法をまとめる。
14	小児訓練法	小児訓練法をまとめる。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書をよく読んでおくこと。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 20 %） ☑ 課題　（ 80 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	言語聴覚士のための臨床実習テキスト　小児編　建帛社
参　考　書	
授業の留意点・備考	提出課題を計画的に進めること。

科目名	失語症Ⅰ	担当教員	林　　学

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	失語症　高次脳機能障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験５年以上（介護老人保健施設・成人期の病院）の臨床経験を活かし、また医学系大学院で研鑽を積んだ脳機能病態学をもとに、失語症に関する講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	・失語症の定義について学ぶ。 ・失語症の機序について学ぶ。 ・失語症の分析手法、古典分類とその障害像について学ぶ。 ・失語症の類縁症状について学ぶ。
到　達　目　標	・失語症の定義について説明できる。 ・失語症の機序について説明できる。 ・失語症の分析手法、古典分類とその障害像について説明できる。 ・失語症の類縁症状について説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	失語症について１	失語症を理解する上で必要な言語の４要素（聴く・話す・読む・書く）について理解する。
2	失語症について２	失語症の定義とその機序（メカニズム）について理解する。
3	失語症の分析手法１	失語症における分析法の１つである古典分類を理解する。
4	失語症の分析手法２	失語症における分析法の１つである認知神経心理学的手法を理解する。
5	失語症の古典分類１	ブローカ失語を理解する。
6	失語症の古典分類２	ウェルニッケ失語を理解する。
7	失語症の古典分類３	伝導失語・健忘失語を理解する。
8	失語症の古典分類４	重度の失語症を理解する。
9	失語症の古典分類５	超皮質性失語（運動・感覚）を理解する。
10	失語症の古典分類６	その他の失語（混合性失語等）を理解する。
11	失語症の類縁症状１	発語失行（純粋語唖）を理解する。
12	失語症の類縁症状２	純粋失読を理解する。
13	失語症の類縁症状３	純粋失書を理解する。
14	失語症の類縁症状４	失読失書を理解する。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	事前に失語症とはどういうものか教科書などを使って調べておくと解りやすい。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　失語症学　第２版　医学書院
参　考　書	脳卒中後のコミュニケーション障害　協同医書出版社 神経心理学入門　医学書院
授業の留意点・備考	

科目名	失語症Ⅱ	担当教員	林　　学

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	失語症　高次脳機能障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験５年以上（介護老人保健施設・成人期の病院）の臨床経験を活かし、また医学系大学院で研鑽を積んだ脳機能病態学をもとに、失語症に関する講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	・失語症の一般論について学ぶ。 ・失語症の古典分類、認知神経心理学的モデルについて学ぶ。 ・失語症のコミュニケーションに与える影響ついて学ぶ。 ・失語症の各障害像や評価（ＳＬＴＡ）について学ぶ。
到　達　目　標	・失語症の一般論について説明できる。 ・失語症の古典分類、認知神経心理学モデルについて説明できる。 ・失語症のコミュニケーション障害について説明できる。 ・失語症の評価（ＳＬＴＡ）について説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	失語症の基礎	失語症理解の歴史について学ぶ。
2	失語症についての理解を深める	その定義と学び方について概説する。
3	大脳の機能と失語症の関係	ブローカ野からウェルニッケ野まで脳の機能局在について学ぶ。
4	失語症の原因疾患	失語症の原因疾患である脳血管障害、頭部外傷、脳変性等について学ぶ。
5	失語症の言語症状１	聴覚的理解について理解する。
6	失語症の言語症状２	発話について理解する。
7	失語症の言語症状３	読字について理解する。
8	失語症の言語症状４	書字について理解する。
9	失語症候群を知る１	古典的分類について総括する。
10	失語症候群を知る２	認知神経心理学の概要について理解する。
11	失語症候群を知る３	各失語型の特徴、失語各論を理解する。
12	失語症候群を知る４	失語各論、失語の類縁症状について理解する。
13	失語の評価を知る１	評価の流れ、情報収集他について理解する。
14	失語の評価を知る２	鑑別診断、総合評価、評価目標を理解する。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	失語症をさらに深めていくため、失語症ではない類似の症状についてどういうものか教科書などを使って調べておくと解りやすい。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　失語症学　第２版　医学書院
参　考　書	脳卒中後のコミュニケーション障害　協同医書出版社 神経心理学入門　医学書院
授業の留意点・備考	

科目名	失語症Ⅲ	担当教員	林　　学

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	失語症　高次脳機能障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験５年以上（介護老人保健施設・成人期の病院）の臨床経験を活かし、また医学系大学院で研鑽を積んだ脳機能病態学をもとに、失語症に関する講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	・失語症Ⅰ・Ⅱで学習した内容をもとに高次脳機能と絡めた形で失語症を学ぶ。 ・失語症の評価・訓練について学ぶ。 ・失語症の評価・訓練立案について学ぶ。 ・失語症の報告書作成について学ぶ。
到　達　目　標	・失語症について高次脳機能障害との関連の中で説明ができる。 ・失語症の評価・訓練の内容について説明できる。 ・失語症の評価・訓練立案について説明できる。 ・失語症の評価結果まとめ、報告書を作成することができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	失語症の評価１	評価の流れについて学ぶ。
2	失語症の評価２	インテーク面接について学ぶ。
3	失語症の評価３	鑑別診断について学ぶ。（ＳＬＴＡ、ＷＡＢを含めて）
4	失語症の評価４	掘り下げ検査（手順とその内容）について学ぶ。
5	失語症の評価５	認知神経心理学的分析法について理解する。
6	高次脳機能障害を知る１	言語治療において臨床上必要な事項について理解する。
7	高次脳機能障害を知る２	視覚・聴覚・触覚の各失認について理解する。
8	高次脳機能障害を知る３	失行（観念運動失行、観念失行）について理解する。
9	高次脳機能障害を知る４	記憶障害、健忘症と各種検査を理解する。
10	高次脳機能障害を知る５	各種検査（ＴＭＴ，ＷＣＳＴ等）について理解する。
11	失語症の言語治療を知る１	疾患を含めた急性期・慢性期の治療について理解する。
12	失語症の言語治療を知る２	言語訓練法（各種訓練法）ついて理解する。
13	失語症の言語治療を知る３	評価の流れから各種訓練について理解する。
14	失語症の言語治療を知る４	報告書の書き方、失語症者の社会との関わりを理解する。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	失語症を高次脳機能と絡めて授業を行うのは、高次脳機能の障害内容によっては失語症の症状の一部と類似しており、その鑑別が求められるためである。症状が類似していてもメカニズムが異なることがあるため、その違いを理解できるように予め高次脳機能障害についても予習をして欲しい。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 ％）☐ 実技試験　（　　％）☐ 小テスト　（　　％）☐ レポート　（　　％） ☐ 課題　（　　％）☐ 発表　（　　％）☐ その他（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　失語症学　第２版（医学書院） 失語症言語治療の基礎　診断と治療社
参　考　書	脳卒中後のコミュニケーション障害　協同医書出版社 神経心理学入門　医学書院
授業の留意点・備考	

科目名	高次脳機能障害Ⅰ	担当教員	林　　学

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	失語症　高次脳機能障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験５年以上（介護老人保健施設・成人期の病院）の臨床経験を活かし、また医学系大学院で研鑽を積んだ脳機能病態学をもとに、高次脳機能障害に関する講義・演習を行うことができる。
授　業　概　要	・高次脳機能障害の定義について学ぶ。 ・高次脳機能障害の機序について学ぶ。 ・高次脳機能障害の障害像について学ぶ。
到　達　目　標	・高次脳機能障害の定義について説明できる。 ・高次脳機能障害の機序について説明できる。 ・高次脳機能障害の障害像について説明できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	高次脳機能障害について	高次脳機能障害とは何か。その定義について理解する。
2	高次脳機能障害の基礎１	脳の構造・機能局在について理解する。
3	高次脳機能障害の基礎２	大脳の構造・機能局在について理解する。
4	脳機能障害（病態）について	脳血管障害・外傷他、病態を理解する。
5	神経心理学と脳機能病態との関係について	脳機能の回復機序について理解する。
6	全体症状としての高次脳機能障害１	意識障害について理解する。
7	全体症状としての高次脳機能障害２	認知症について理解する。
8	一般的な高次脳機能障害を知る１	注意障害・記憶障害の定義・機序を理解する。
9	一般的な高次脳機能障害を知る２	前頭葉症候群について理解する。
10	一般的な高次脳機能障害を知る３	視覚失認について理解する。
11	一般的な高次脳機能障害を知る４	聴覚失認について理解する。
12	一般的な高次脳機能障害を知る５	純粋語聾について理解する。
13	一般的な高次脳機能障害を知る６	環境音失認・感覚性失音楽について理解する。
14	一般的な高次脳機能障害を知る７	触覚失認、その他の失認について理解する。
15	まとめ	これまでの内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	高次脳機能障害を知る上でその基盤にあるものは、メカニズムを理解することである。メカニズムを理解する上で必要になることが、まずは機能局在を知ることである。準備として機能局在をまずはしっかり学習した上で授業に臨むと、理解しやすい。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　高次脳機能障害学　第２版　医学書院
参　考　書	高次脳機能障害学　第２版　医歯薬出版株式会社 神経心理学入門　医学書院
授業の留意点・備考	

科目名	高次脳機能障害Ⅱ	担当教員	林　　学

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	失語症　高次脳機能障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士として実務経験５年以上（介護老人保健施設・成人期の病院）の臨床経験を活かし、また医学系大学院で研鑽を積んだ脳機能病態学をもとに、高次脳機能障害に関する講義・演習を行うことができる。
授業概要	・高次脳機能障害の定義について学ぶ。 ・高次脳機能障害の機序について学ぶ。 ・高次脳機能障害の障害像ついて学ぶ。 ・高次脳機能障害のリハビリテーションについて学ぶ。
到達目標	・高次脳機能障害の定義について説明できる。 ・高次脳機能障害の機序について説明できる。 ・高次脳機能障害の障害像について説明できる。 ・高次脳機能障害のリハビリテーションについて説明できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	一般的な高次脳機能障害８	失行：古典的三大失行（観念運動・観念・肢節運動）とその機序について理解する。
2	一般的な高次脳機能障害９	古典的三大失行についてその内容を理解する。
3	一般的な高次脳機能障害１０	構成失行・着衣失行・発語失行の各失行について理解する。
4	一般的な高次脳機能障害１１	発語失行と運動障害性構音障害の鑑別点について理解する。
5	言語聴覚障害と関連する高次脳機能障害１	言語聴覚障害と高次脳機能障害との関連性を理解する。
6	言語聴覚障害と関連する高次脳機能障害２	言語聴覚障害と聴覚失認との関連性を理解する。
7	言語聴覚障害と関連する高次脳機能障害３	言語聴覚障害と発語失行との関連性を理解する。
8	言語聴覚障害と関連する高次脳機能障害４	言語聴覚障害と失読や失書との関連性を理解する。
9	その他の高次脳機能障害１	小児の高次脳機能障害について理解する。
10	その他の高次脳機能障害２	右半球損傷と高次脳機能障害について理解する。
11	その他の高次脳機能障害３	頭部障害と高次脳機能障害の関係について理解する。
12	高次脳機能障害のリハビリテーション１	職種連携と言語聴覚士の役割について理解する。
13	高次脳機能障害のリハビリテーション２	評価とリハビリテーションについて理解する。
14	高次脳機能障害のケアを知る	周囲の対応における留意点について理解する。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し、理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	高次脳機能障害を知る上でその基盤にあるものは、メカニズムを理解することである。メカニズムを理解する上で必要になることが、まずは機能局在を知ることである。準備として機能局在をまずはしっかり学習した上で授業に臨むと、理解しやすい。
成績評価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	標準言語聴覚障害学　高次脳機能障害学　第２版　医学書院
参考書	高次脳機能障害学　第２版　医歯薬出版株式会社 神経心理学入門　医学書院
授業の留意点・備考	２年次後期からの続きである。

科目名	失語・高次脳機能障害評価・訓練法Ⅰ	担当教員	田中　裕己

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	失語症　高次脳機能障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床経験の際に、高次脳機能障害の症例に対して評価・訓練を実施し、在宅復帰へ向けてリハビリを行った経験を基に実際の症例を呈示し、検査方法及び言語訓練の立案について講義・演習を行う。
授　業　概　要	標準失語症検査（SLTA）の概要及び実施についての解説及び演習を行う。
到　達　目　標	・標準失語症検査の内容について理解できる。 ・標準失語症検査をマニュアルを見ずに適切な手順で実施し、評価点をつけることができる。 ・標準失語症検査の結果をプロフィールにプロットできる。 ・標準失語症検査の結果を見て分析ができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	失語症と失語症標準検査（SLTA）の概要	検査の概要の説明
2	ＳＬＴＡの【聴く】について①	標準失語症検査【聴く】についての実施手順と留意点の説明。
3	ＳＬＴＡの【聴く】について②	標準失語症検査【聴く】実技演習
4	ＳＬＴＡの【聴く】について③	標準失語症検査【聴く】実技演習
5	ＳＬＴＡの【話す】について①	標準失語症検査【話す】についての実施手順と留意点の説明。
6	ＳＬＴＡの【話す】について②	標準失語症検査【話す】実技演習
7	ＳＬＴＡの【話す】について③	標準失語症検査【話す】実技演習
8	ＳＬＴＡの【読む】について①	標準失語症検査【読む】についての実施手順と留意点の説明。
9	ＳＬＴＡの【読む】について②	標準失語症検査【読む】実技演習
10	ＳＬＴＡの【読む】について③	標準失語症検査【読む】実技演習
11	ＳＬＴＡの【書く】について①	標準失語症検査【書く】についての実施手順と留意点の説明。
12	ＳＬＴＡの【書く】について②	標準失語症検査【書く】実技演習
13	ＳＬＴＡの【書く】について③	標準失語症検査【書く】実技演習
14	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	失語症の古典的タイプ分類と症状について復習しておいてください。 １つのモダリティが終わる毎に検査練習をしっかりしてください。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 30 %）☑ 実技試験　（ 50 %）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☑ 課題　（ 20 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準失語症マニュアル なるほど！失語症
参　考　書	・『失語症学』（第２版）医学書院　・『高次脳機能障害学』（第２版）医歯薬出版 ・『失語症言語治療の基礎』紺野加奈江著　・『言語治療ハンドブック』医歯薬出版　等
授業の留意点・備考	標準失語症検査の実施についての授業です。評価実習で実際に患者様に対して実施する場合がありますので、手順と評価点を完璧に覚えるまで検査練習を実施してください。

科目名	失語・高次脳機能障害評価・訓練法Ⅱ	担当教員	田中　裕己

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	失語症　高次脳機能障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床経験の際に、高次脳機能障害の症例に対して評価・訓練を実施し、在宅復帰へ向けてリハビリを行った経験を基に実際の症例を呈示し、検査方法及び言語訓練の立案について講義・演習を行う。
授　業　概　要	・失語症のメカニズムを認知神経心理学的視点から解釈する。 ・高次脳機能についての理解を深める。
到　達　目　標	・高次脳機能検査の検査にどんな物があるか把握することができる。 ・検査の目的を理解すし、適切に検査を選択・実施することができる。 ・検査結果から訓練について考えを深めることができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション 高次脳機能障害について	評価の概要とその手法について。
2	認知神経心理学的モデルについて①	聴覚的理解障害の認知神経心理学的モデルによる解釈。
3	認知神経心理学的モデルについて②	発話障害の認知神経心理学的モデルによる解釈。
4	認知神経心理学的モデルについて③	読解障害の認知神経心理学的モデルによる解釈。
5	認知神経心理学的モデルについて④	書字障害の認知神経心理学的モデルによる解釈。
6	認知神経心理学的モデルについて⑤	認知神経心理学モデルを用いた考察のまとめ方①
7	認知神経心理学的モデルについて⑥	認知神経心理学モデルを用いた考察のまとめ方②
8	認知神経心理学的モデルについて⑦	認知神経心理学モデルを用いた考察のまとめ方③
9	認知神経心理学的モデルについて⑧	認知神経心理学モデルを用いた考察のまとめ方④
10	高次脳機能障害評価　（認知機能）	認知機能の概要評価方法
11	高次脳機能障害評価　（注意機能）	注意機能の概要評価方法
12	高次脳機能障害評価　（記憶）	記憶機能の概要評価方法
13	高次脳機能障害評価　（遂行機能）	遂行機能の概要評価方法
14	高次脳機能障害評価　（空間認知）	空間認知機能の概要評価方法
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	6～9はパソコンを使用し考察を実際に組み立てていきます。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☑ 課題　（ 100 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	なるほど!失語症の評価と治療
参　考　書	・『失語症学』（第２版）医学書院　・『高次脳機能障害学』（第3版）医歯薬出版 ・『失語症言語治療の基礎』紺野加奈江著　・『言語治療ハンドブック』医歯薬出版
授業の留意点・備考	高次脳機能障害に対する評価演習の授業です。実習を見据えて準備及び練習に取り組んでください。

科目名	言語発達障害Ⅰ	担当教員	黒川　一也

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門基礎分野	教育内容	言語発達障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	児童相談所でのことばの相談・指導業務を通した経験を基に、ことばの発達に影響を与える障害や指導方法について実践的な講義・演習を行う。
授　業　概　要	小児の言語発達障害を理解するために必要な基礎知識を身につけるための専門科目である。２年前期に学んだ言語発達学を基盤とし、言語発達障害の概要、種類、原因、用いる評価方法などを幅広く学習する。言語発達障害を持つ子ども側の視点に立ち、必要な支援方法を選択する能力を身につける。
到　達　目　標	・定型的な言語発達をベースに言語発達障害を理解する。 ・言語発達障害の種類や原因について知る。 ・言語発達障害状況や年齢に合わせた評価方法を知る

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	言語発達障害とは	定型発達と発達障害について
2	言語・コミュニケーションの発達（胎児期・周産期）	胎児期、周産期の障害について
3	言語・コミュニケーションの発達（乳児期）	前言語期の発達および障害について
4	言語・コミュニケーションの発達（幼児期）	語彙獲得期の発達および障害について
5	言語発達の阻害要因と言語発達障害	言語発達の阻害要因と症状の特徴を理解する
6	言語発達障害の臨床	臨床現場を理解する
7	言語発達障害の病態①	DSM-5における分類を理解する①
8	言語発達障害の病態②	DSM-5における分類を理解する②
9	評価のための情報収集	模擬面接や模擬問診をとおして情報の収集を行う
10	言語発達障害評価のための検査①	発達の状態（知的・認知等）を確認するための検査を理解する
11	言語発達障害評価のための検査②	言語状態を確認するための検査を理解する
12	検査結果のまとめと評価	検査表から状態を把握する
13	検査結果のまとめと評価（症例検討）	症例をとおして検査結果を整理する
14	全体を通してのまとめ	情報収集から評価までの概略を理解する
15	総括	まとめ

準備学習（予習復習）の具体的な内容	言語発達学の復習を兼ね、定型的言語発達（胎児期からの）を支える、感覚－運動、認知－社会性の発達に触れながら進める。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　言語発達障害学　第２版
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	言語発達障害Ⅱ	担当教員	黒川　一也

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	言語発達障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	児童相談所でのことばの相談・指導業務を通した経験を基に、ことばの発達に影響を与える障害や指導方法について実践的な講義・演習を行う。
授　業　概　要	本授業は、小児の言語発達障害を理解するための専門科目として位置づけている。2年前期に学んだ言語発達学を基盤とし、言語発達障害の原因、評価方法について学習する。
到　達　目　標	・言語発達障害の原因について知る。 ・言語発達障害の評価方法について知る。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	ビデオ視聴　「自閉症の我が子へ」
2	小児の成長①	発達区分、発育の原則
3	小児の成長②	成長に関係する因子、正常発達、反射の発達
4	周産期異常①	周産期医療の問題
5	周産期異常②	周産期異常による障害
6	出生前要因（先天異常）①	単一遺伝子疾患について
7	出生前要因（先天異常）②	染色体異常症について
8	出生前要因（先天異常）③	多因子遺伝疾患について
9	出生前要因（環境要因）	化学物質、放射線、感染症について
10	先天代謝異常症	新生児マススクリーニング、各代謝異常症
11	先天奇形症候群	各奇形症候群の特徴について
12	精神遅滞①	定義、原因、分類
13	精神遅滞②	症状、合併症、言語特徴
14	言語発達障害の評価の流れ	評価の流れのまとめ
15	総括	総括

準備学習（予習復習）の具体的な内容	2年前期で学んだ言語発達学を復習しておくこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　言語発達障害学　第２版
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	言語発達障害Ⅲ	担当教員	黒川　一也

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門基礎分野	教育内容	言語発達障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	児童相談所でのことばの相談・指導業務を通した経験を基に、ことばの発達に影響を与える障害や指導方法について実践的な講義・演習を行う。
授　業　概　要	本授業は、３年前期の言語発達障害Ⅱを基盤にし、更に軽度発達障害を中心に言語聴覚士が関わる言語発達障害について学習する。
到　達　目　標	・各障害の原因、診断基準を知る。・各障害の言語特徴、指導方法を知る。 ・家族への支援方法を知る。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	軽度発達障害の定義
2	自閉症①	定義、原因、診断基準
3	自閉症②	評価方法、指導方法
4	アスペルガー障害①	定義、原因、診断基準
5	アスペルガー障害②	評価方法、指導方法
6	注意欠陥／多動性障害①	定義、原因、診断基準
7	注意欠陥／多動性障害②	評価方法、指導方法
8	特異的言語発達障害	定義、原因、診断基準、評価方法、指導方法
9	学習障害①	定義、原因、診断基準
10	学習障害②	評価方法、指導方法
11	後天性小児失語症	定義、原因、診断基準、評価方法、指導方法
12	ダウン症	定義、原因、診断基準、評価方法、指導方法
13	発達障害児の家族心理	発達障害児の家族心理
14	発達障害児の家族への支援方法	発達障害児の家族への支援方法
15	総括	まとめ

準備学習（予習復習）の具体的な内容	各障害の特徴を十分に理解し、区別できるように学習すること。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 100 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	標準言語聴覚障害学　言語発達障害学　第２版
参　考　書	
授業の留意点・備考	

科目名	重度心身障害	担当教員	本村　富士子

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	言語発達障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	重症心身障害児・者施設２９年勤続（保育士７年　言語聴覚士２２年）　特別支援学校ほか食事・言語コミュニケーション支援
授　業　概　要	重症心身障害児・者の特性や「生命・生活・人生の質」について実技を交えて講義　特別支援学校を見学し実態を知る
到　達　目　標	重症心身障害児・者の理解と支援、特に言語聴覚士の役割や支援方法について知る　学生自身が感じる力考える力を培う

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション　重症心身障害について	「重症心身障害」の定義と医学的背景について
2	重症心身障害児施設の歴史的変遷	重症心身障害児施設における現状とパラダイムシフトを概説
3	重症心身障害児・者の理解	重症心身障害「児・者」について、生活の状況について
4	重症心身障害児・者のコミュニケーション①	コミュニケーションの定義と重症心身障害児・者のコミュニケーションの特徴について
5	重症心身障害児・者のコミュニケーション②	重症心身障害児・者の非言語コミュニケーションとATACについて
6	重症心身障害児・者のコミュニケーション③	重症心身障害児・者の具体的なコミュニケーション支援について
7	プレスピーチの評価と治療①	正常機能分析と重症心身障害児・者の食事状況、摂食嚥下機能の特徴
8	プレスピーチの評価と治療②	重症心身障害児・者の食事状況、摂食嚥下機能の能力と問題点
9	プレスピーチの評価と治療③	重症心身障害児・者の食事状況、摂食嚥下機能への支援
10	プレスピーチの評価と治療④	子どもの「食事」の発達
11	重症心身障害児・者の教育①	熊本県特別支援学校の実態　重症心身障害児の教育の現状と歴史的変遷について
12	重症心身障害児・者の教育②　「熊本かがやきの森支援学校」見学	実際の教育の現場を見学し実態を知る
13	重症心身障害児・者の教育③	教育現場での言語聴覚士の役割について検討
14	チームアプローチとまとめ	ライフステージに応じた「生命・生活・人生」の質を高めていくための言語聴覚士の役割
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	随時プリント配布
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 40 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 60 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	重症心身障害療育マニュアル 新版(医歯薬出版)
参　考　書	なし
授業の留意点・備考	実技の場合は動きやすい服装

科目名	言語発達障害評価・訓練法Ⅰ	担当教員	髙森　敦子

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	言語発達障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	医療機関や福祉行政で発達障害児はじめ児童のアセスメントや支援を行った経験を活かし、検査の概要や方法についての講義・演習を行うことができる。
授業概要	言語発達障害学を基盤として、小児のリハビリテーションの現場で使用される頻度の高い知能検査、発達検査の実施について講義と演習で学習する。
到達目標	知能検査や発達検査を実施する上で身につけておくべき態度や、検査を受ける子どもの心について知り、検査の準備と実施、報告の一連の流れを身につけることができる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	発達障害のある子どもと検査を通じて出会うということについて学ぶ
2	検査実施前の準備	検査環境への配慮や検査を始めるまでの流れを学ぶ（ロールプレイあり）。
3	ウェクスラー式知能検査	WISC知能検査の実施方法について学ぶ。
4	ウェクスラー式知能検査	WISC知能検査の実施方法について学ぶ。
5	ウェクスラー式知能検査	WISC知能検査の実施方法について学ぶ。
6	ウェクスラー式知能検査	WISC知能検査の実施方法について学ぶ。
7	ウェクスラー式知能検査	WISC知能検査の実施方法について学ぶ。
8	ウェクスラー式知能検査	WISC知能検査の実施方法について学ぶ。
9	ウェクスラー式知能検査	WISC知能検査の実施方法について学ぶ。
10	ウェクスラー式知能検査	WIPPSIについて学ぶ。
11	ウェクスラー式知能検査	WIPPSIについて学ぶ。
12	K-ABC検査	K-ABC検査の概要について学ぶ
13	LDの検査	STRAW読み書きスクリーニング検査や読み算数テストの概要について学ぶ。
14	各種検査	ITPA言語学習能力診断検査やDN-CAS認知評価システム検査など各種検査を知る
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	小児の言語療法に関連する教科書を読んでおく。
成績評価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 90 %） ☑ 課題　（ 10 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	適宜資料を配布する。
参考書	特になし
授業の留意点・備考	演習を中心に授業を行うので、グループワークに積極的に参加する

科目名	言語発達障害評価・訓練法Ⅱ	担当教員	髙森　敦子

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	言語発達障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	医療機関や福祉行政で発達障害児はじめ児童のアセスメントや支援を行った経験を活かし、検査の概要や方法についての講義・演習を行うことができる。
授業概要	言語発達障害学を基盤として、小児のリハビリテーションの現場で使用される頻度の高い知能検査、発達検査の実施について講義と演習で学習する。
到達目標	知能検査や発達検査を実施する上で身につけておくべき態度や、検査を受ける子どもの心について知り、検査の準備と実施、報告の一連の流れを身につけることができる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	田中ビネーⅤ知能検査	田中ビネーⅤ知能検査の概要について学ぶ。
2	田中ビネーⅤ知能検査	田中ビネーⅤ知能検査の実施方法について学ぶ。
3	田中ビネーⅤ知能検査	田中ビネーⅤ知能検査の実施方法について学ぶ。
4	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
5	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
6	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
7	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
8	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
9	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
10	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
11	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
12	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
13	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
14	新版K式発達検査	新版K式発達検査の実施方法について学ぶ。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	小児の言語療法に関連する教科書を読んでおく。
成績評価	☐ 定期試験　（　　%）☑ 実技試験　（ 80 %）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☑ 課題　（ 20 %）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	適宜資料を配布する。
参考書	特になし
授業の留意点・備考	演習を中心に授業を行うので、グループワークに積極的に参加する

科目名	音声障害	担当教員	山口信

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	音声障害							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	計20年間の病院勤務・臨床研修にて音声治療の経験があり、音声の評価について学会発表・論文掲載の実績もある。運動障害性構音障害や小児の発話障害にも応用可能な治療の知識・手技について学生に伝授することが可能である。
授業概要	・音声障害の診断・検査について系統的に学習する。 ・音声障害の治療方法について学習し実践する。
到達目標	・音声障害の診断・検査について実践できる。 ・音声障害の治療を実践できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	音声障害の概要	1年の言語聴覚障害概論Ⅱで学習した音声障害の概要について復習する。
2	喉頭の解剖	喉頭の解剖について学習する。喉頭の構造について触診演習を行う。音声障害の概要について確認テストあり。
3	喉頭の生理	喉頭の生理について学習する。喉頭の解剖について確認テストあり。
4	器質性音声障害	声帯ポリープ・声帯結節・ポリープ様声帯器質的音声障害についてその病態・症状などを聴覚的・視覚的な情報を通して学習する。確認テストあり。
5	運動障害性音声障害	反回神経麻痺などの運動障害性音声障害についてその病態・症状などを聴覚的・視覚的な情報を通して学習する。器質性音声障害の確認テストあり。
6	機能性音声障害	過緊張性発声などの機能性音声障害について病態・症状などを聴覚的・視覚的な情報を通して学習する。運動障害性音声障害の確認テストあり。
7	音声評価法Ⅰ	GRBAS評価、VHIなど音声障害の主観的評価法について学習する。主観的評価について演習を行う。機能性音声障害の確認テストあり。
8	音声評価法Ⅱ	音響分析などの客観的評価法について学習する。音声の主観的評価の確認テストあり。
9	音響分析Ⅰ	音響分析ソフトPraatの使用方法を学習する。音声の客観的評価の確認テストあり。
10	音響分析Ⅱ	音響分析ソフトPraatを用いてpitch, intencity, APQ, PPQなどを測定し、数値について分析する。
11	音声治療Ⅰ	音声治療の基本的な進め方について学習する。
12	音声治療Ⅱ	あくび-ため息法など主に喉頭のリラクゼーションについて学習する。具体的な手技について演習を行う。
13	音声治療Ⅲ	プッシング法など主に声帯閉鎖を強化する技法について学習する。具体的な手技について演習を行う。
14	音声治療Ⅳ	カイザー・グッツマン法など主に声の高さを変える技法について学習する。具体的な手技について演習を行う。
15	無喉頭音声	喉頭摘出術後の無喉頭音声についてその種類・特性を学習する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	最初の講義で半期分のコースパケットを配布するので毎回の講義の前にその内容を読んでおくこと。
成績評価	☑ 定期試験 （ 50 %）☑ 実技試験 （ 25 %）☑ 小テスト （ 25 %）☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %）☐ 発表 （ %）☐ その他 （ ）
教科書	言語聴覚士のための音声障害学　医歯薬出版
参考書	なし
授業の留意点・備考	音声障害の評価と治療手技は運動障害性構音障害や小児の発話障害などにも応用の利く極めて有用なものであるので自分と縁遠い科目と考えず真剣に取り組むこと。評価は実技試験を含む。

科目名	運動障害性構音障害Ⅰ	担当教員	田中　裕己

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	発声発語・嚥下障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	回復期リハビリテーション病院で勤務した経験を活かし、言語聴覚士の行う運動障害性構音障害に対する講義・演習を行うことができる。
授業概要	運動障害性構音障害の7種類のタイプについて、それぞれの特徴や代表的な疾患について学習する。
到達目標	各タイプ分類ごとの発話特徴や代表的な疾患について説明できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	運動系総論・錐体路について	皮質延髄路を含む錐体路の定義や各末梢神経との繋がりを学ぶ。
2	UUMNディサースリアについて①	UUMNディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
3	UUMNディサースリアについて②	UUMNディサースリアの発話特徴について学ぶ
4	痙性ディサースリアについて①	痙性ディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
5	痙性ディサースリアについて②	痙性ディサースリアの発話特徴について学ぶ
6	失調性ディサースリアについて①	失調性ディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
7	失調性ディサースリアについて②	失調性ディサースリアの発話特徴について学ぶ
8	運動低下性ディサースリアについて①	運動低下性ディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
9	運動低下性ディサースリアについて②	運動低下性ディサースリアの発話特徴について学ぶ
10	運動過多性ディサースリアについて①	運動過多性ディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
11	運動過多性ディサースリアについて②	運動過多性ディサースリアの発話特徴について学ぶ
12	弛緩性ディサースリアについて①	弛緩性ディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
13	弛緩性ディサースリアについて②	弛緩性ディサースリアの発話特徴について学ぶ
14	混合性ディサースリアについて	混合性ディサースリアの運動系の損傷部位と発声発語器官の障害について学ぶ
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習(予習復習)の具体的な内容	指定教科書の該当箇所について、事前に目を通しておく
成績評価	☑ 定期試験（ 50 %）☐ 実技試験（ %）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（ %） ☐ 課題（ %）☐ 発表（ %）☐ その他（ ）
教科書	ディサースリアの基礎と臨床　第１巻　理論編　西尾正輝　著　：医歯薬出版
参考書	特になし
授業の留意点・備考	特になし

科目名	運動障害性構音障害Ⅱ	担当教員	田中　裕己

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	発声発語・嚥下障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	回復期リハビリテーション病院で勤務した経験を活かし、言語聴覚士の役割や制度について講義・演習を行うことができる。
授業概要	運動障害性構音障害の評価に全国的に使用されている標準ディサースリア検査（AMSD）の手技を
到達目標	標準ディサースリア検査（AMSD）の手順を理解しマニュアルを見ずに実施できるようになる。 標準ディサースリア検査（AMSD)の各検査項目の目的を理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	標準ディサースリア検査（AMSD）の概要	標準ディサースリア検査の概要について学習する
2	発話の検査について	発話特徴や発話速度の測定方法について学習する
3	発声発語器官の検査について①	呼吸機能の測定方法について学習する
4	発声発語器官の検査について②	発声機能の測定方法について学習する
5	発声発語器官の検査について③	鼻咽腔閉鎖機能の測定方法について学習する
6	発声発語器官の検査について④	舌の運動範囲の測定方法について学習する
7	発声発語器官の検査について⑤	口唇の運動範囲の測定方法について学習する
8	発声発語器官の検査について⑥	下顎の運動範囲の測定方法について学習する
9	発声発語器官の検査について⑦	反復運動速度の測定方法について学習する
10	発声発語器官の検査について⑧	筋力の測定方法について学習する
11	発声発語器官の検査について⑨	補助検査の測定方法について学習する
12	まとめ①	発話検査から補助検査まで一連の流れで測定する
13	まとめ②	発話検査から補助検査まで一連の流れで測定する
14	SLTA補助検査について①	SLTA補助検査の概要について学習する
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習(予習復習)の具体的な内容	指定教科書の該当箇所について、事前に目を通しておく
成績評価	☑ 定期試験（ 100 %）☐ 実技試験（　　%）☐ 小テスト（　　%）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☐ その他(　　)
教科書	バイトブロック（標準）、ハンドル：インテルナ出版 標準ディサースリア臨床　新装版　西尾正輝　著　：インテルナ出版 評価基準スピーチ・サンプル集　西尾正輝　著　：インテルナ出版
参考書	特になし
授業の留意点・備考	

科目名	運動障害性構音障害Ⅲ	担当教員	田中　裕己

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	発声発語・嚥下障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	回復期リハビリテーション病院で勤務した経験を活かし、言語聴覚士の役割や制度について講義・演習を行うことができる。
授業概要	標準ディサースリア検査の結果から抽出された問題点に応じた訓練を実技を交えて学習する。症例報告に必要となるレポートの作成方法を、模擬症例を通して実際に作成していく。
到達目標	問題点に応じた訓練の立案と実施が可能となる。運動障害性構音障害患者の症例レポートを作成できるようになる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	運動障害性構音障害の機能訓練①	問題点に応じた訓練の概要について学習する
2	運動障害性構音障害の機能訓練②	舌・口唇・下顎の機能訓練について学習する
3	運動障害性構音障害の機能訓練③	呼吸機能訓練について学習する
4	運動障害性構音障害の機能訓練④	発声機能訓練について学習する
5	運動障害性構音障害の機能訓練⑤	鼻咽腔閉鎖機能訓練について学習する
6	運動障害性構音障害の機能訓練⑥	発話速度調節法について学習する
7	症例レポートの作成方法①	症例レポートの概要について学習する
8	症例レポートの作成方法②	個人情報保護の観点を踏まえ一般的情報の記載方法を学習する
9	症例レポートの作成方法③	評価結果の記載方法について学習する
10	症例レポートの作成方法④	測定結果の分析手段と記載方法について学習する
11	症例レポートの作成方法⑤	問題点の記載方法について学習する
12	症例レポートの作成方法⑥	目標設定の方法について学習する
13	症例レポートの作成方法⑦	訓練立案の方法について学習する
14	症例レポートの作成方法⑧	考察の作成方法について学習する
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定教科書の該当箇所について、事前に目を通しておく
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☐ 小テスト（　　%）☑ レポート（ 80 %） ☑ 課題（ 20 %）☐ 発表（　　%）☐ その他(　　)
教科書	ディサースリア臨床標準テキスト　西尾正輝　著　：医歯薬出版 言語聴覚士ドリル＋運動障害性構音障害　大塚裕一　著　：診断と治療者
参考書	特になし
授業の留意点・備考	officeソフト（Microsoft以外でも可）が搭載されたパソコンを持参してください。

科目名	機能性構音障害	担当教員	河上　小瑠璃

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	発声発語・嚥下障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	発達障害児やその疑いをもつ児の通所する事業所（児童発達支援、放課後等デイサービス）にて個別・集団療育を行っている。
授　業　概　要	定型発達の音韻発達、構音発達をベースに、「機能性構音障害」の実際を学ぶ。 機能性構音障害を持つことにより起こり得る、様々な問題を知り、ＮＥＥＤに基づいた支援方法を探る。 構音障害に対する具体的な訓練方法を学び、子ども一人一人の状況に応じた訓練プログラムを立案する。
到　達　目　標	１．　機能性構音障害を持つ子どもの評価、訓練を行うために必要な基礎知識を得る。 ２．　評価に必要な情報収集、検査の実際を学習する。 ３．子どもを囲む様々な環境の阻害因子をさぐり、調整できるようになる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	機能性構音障害とは	機能性構音障害の概要
2	日本語の子音と半母音	音が作られる場所（音声記号との対応）
3	発話の発達について	音韻発達と構音発達
4	小児の全体発達について	小児の認知発達・社会性の発達について
5	小児の発達検査について	発達検査　演習
6	誤り音の産生・聞き取り	聞き取り練習
7	鑑別診断	聞き取り練習
8	構音検査について	検査のトレーニング
9	インテーク・問診	実際の評価の場面
10	様々な訓練法	系統的構音訓練法
11	訓練法①	プログラム・教材等作成
12	訓練法②	プログラム・教材等作成
13	症例を通しての訓練プログラム作成	発表
14	訓練プログラムの発表・まとめ	発表
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	復習をしっかりしておいてください。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 60 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 20 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☑ 発表　（ 20 %）☐ その他（　　）
教　科　書	・構音障害の臨床ー基礎知識と実践マニュアル改訂第２版
参　考　書	適宜紹介します
授業の留意点・備考	

科目名	器質性構音障害	担当教員	三浦　眞弓

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	発声発語・嚥下障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	医療機関における口唇裂口蓋裂診療チームの一員として、また言語関連学会の検査法作成委員の経験をいかし、当該疾患が示す特徴的な言語障害について講義・演習を行う。
授業概要	器質性構音障害、特に口蓋裂に伴う言語障害について学ぶ。先天性の疾患であること、治療には多職種によるチームワークが不可欠であること、治療には20年近い長期間を要する特殊な病態であることを知り、その中で言語聴覚士がどのような役割を担い、実際に活動するかを学ぶ。
到達目標	口蓋裂に伴う言語障害の発現機序、メカニズムなどを理解し、患者が示す言語を中心とした症状を改善するための評価・訓練技術を身につける。疾患に関する基礎知識を身につける。口蓋裂言語の特徴を理解し、適切な評価ができる。評価に必要な情報を収集し、的確に検査できる。訓練プログラムを作成し、具体的な訓練が実施できる。保護者へ説明・指導ができる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	発声発語器官の構造 日本語の音の体系	矢状断面図、開口正面図を用いて発声発語器官の名称と働きを学ぶ 日本語の子音を構音点、構音方法、有声無声で特定し、日本語音声表記を学ぶ
2	口唇裂口蓋裂に関する基礎知識(1) (形成外科関連、術前術後の看護の関わり)	家族教室のﾊﾟﾜｰﾎﾟｲﾝﾄを参照して、疾患の発生頻度、裂型、手術時期・手術方法、入院時の看護上の留意点などについて知る
3	口唇裂口蓋裂に関する基礎知識(2) (歯科･矯正歯科、言語、耳鼻科、社会資源の活用)	歯科・矯正歯科的領域、耳鼻科領域の問題点と治療の概要、言語障害について学ぶ 利用できる社会資源の種類と利用方法を知る
4	口唇裂口蓋裂に関する基礎知識(3) (心理社会的問題点のケア) 口唇裂口蓋裂に伴う問題点のまとめ 口唇裂口蓋裂に対するチーム医療について	小児期から成人に至るまでの患者と家族の心理社会的問題点について考える 各領域ごと・裂型ごとに問題点をまとめ、医療側の主な担当者を知る チーム医療の概要と治療の流れを知り、各職種の役割を考える
5	口蓋裂の手術について 口蓋裂に関連する言語障害について	小テスト（口唇裂口蓋裂について：疾病に関して得た情報や理解したことを記述する） 口蓋裂の手術目的、手術の時期、手術法について学ぶ 口蓋裂に起こり得る言語発達・声・鼻咽腔閉鎖機能・構音の問題について考える
6	鼻咽腔閉鎖機能について	鼻咽腔閉鎖機能の定義、関与する筋肉、STが臨床場面で行える検査方法を学ぶ
7	鼻咽腔閉鎖機能について　(DVD「口蓋裂言語検査(言語臨床用)」を用いて)	「口蓋裂言語検査(言語臨床用)」のDVDを用いて、検査の成り立ち、検査の内容、検査実施手順、音声の聴覚判定、鼻咽腔閉鎖機能の総合判定の方法を学ぶ
8	鼻咽腔閉鎖機能の判定[演習]	2人一組で検査者と被検者になり、鼻咽腔閉鎖機能検査を体験する
9	構音の発達について 構音障害について	母音の完成、子音の獲得時期など、構音の発達について学ぶ 構音障害の定義、誤り音の分類、診断のための検査、留意点について理解する
10	異常構音について　(DVD「口蓋裂言語検査(言語臨床用)」を用いて)	異常構音について、構音のしかた、聴覚的特徴、構音動態の観察法、診断評価上の留意点について学ぶ。音声サンプルを聴いて音の特徴を実感する
11	構音障害の判定[演習]	グループごとに実際の音声サンプルを聴き、構音障害を判定する
12	構音障害の判定(続き)[演習] 構音障害の評価・訓練の流れ	グループごとの判定結果を発表し、他グループのサンプルも聴き、結果を共有する 発音の誤りを主訴に医療機関を受診した子の診察、評価、診断、訓練の流れを知る
13	評価・報告書の書式について 報告書作成、治療プログラムの作成[演習]	「言語評価・報告書」の書式に沿って、検査所見など記載すべき内容について学ぶ 模擬症例の検査データを用いて報告書を作成し、治療プログラムを作成する 報告書作成後、模範解答を参考にして記載内容の妥当性を検討する
14	構音訓練について	音訓練の定義、訓練対象者・対象音、開始時の条件、音の矯正方法について学ぶ 音の矯正方法について、対象者を想定して具体的な教示の方法を実践する
15	まとめ・試験	試験内容は構音の聴覚判定と配布資料に中から出題。回答方法は記述式を主とする

準備学習（予習復習）の具体的な内容	教科書に加えて、作成した資料を多く用いて講義を行うので、配布資料や筆記したノートの復習を確実に。
成績評価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	口蓋裂の言語臨床　第3版：医学書院
参考書	構音訓練のためのドリルブック　改訂第2版：協同医書出版 構音障害の臨床－基礎知識と実践マニュアル－　改訂第2版：金原出版 口蓋裂言語検査（言語臨床用）：インテルナ出版　＊学校備品として
授業の留意点・備考	臨床に根ざした具体的な授業をするために、音声をふんだんに聴き、判定などの演習を十分に取り入れます。質問歓迎、積極的な発言を期待します。 講義の終わりに次回に使用する機材や実習に必要な物品を指定します。準備を確実に。演習のグループ分けなども事前に行い、時間を無駄にしないことを心掛けましょう。

科目名	摂食・嚥下障害Ⅰ	担当教員	山口　信

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	摂食嚥下障害							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	維持期病院での摂食嚥下療法業務と、教育機関の関連施設・病院での研修・研究経験を活かし、摂食・嚥下障害の評価・治療に関する体系的かつ実践的な知識と技術を伝授することができる。
授業概要	・摂食嚥下障害に関する解剖・生理・発達・加齢・関与する諸因子について学習し、評価と治療につながる基礎的な知識を身につける。 ・摂食嚥下障害のチームアプローチについて学習し、実践のための基礎的な知識を身につける。 ・摂食嚥下障害の評価・検査・診断の基礎知識について説明できる。
到達目標	・摂食嚥下障害に関する諸器官の解剖・生理について説明できる。 ・摂食嚥下障害に関与する諸因子である唾液・栄養・呼吸・姿勢・発声構音について説明できる。 ・摂食嚥下障害のチームアプローチについて各職の役割とSTとの連携について説明できる。 ・摂食嚥下障害の評価・検査・診断の基礎的知識について説明できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	摂食・嚥下障害　総論	1年次の言語聴覚障害学概論で学習した摂食・嚥下障害の内容について復習し、概説について再認識する。1年次の内容についての確認テストあり。
2	摂食嚥下器官の解剖Ⅰ	口腔・鼻腔・咽頭・喉頭・食道の構造について学習する。講義のほか、口腔内視診・触診などにより構造を臨床的に理解するための演習を行う。
3	摂食嚥下器官の解剖Ⅱ	表情筋・咀嚼筋・口蓋筋・舌骨上下筋群などについて学習する。講義のほか、筋の触診により構造を臨床的に理解するための演習を行う。
4	摂食嚥下器官の生理Ⅰ	食物の認知・取り込み・咀嚼・味の伝達・嚥下の神経機構について学習する。咀嚼時・嚥下時の器官の動きを理解するため食物を用いた演習を行う。
5	摂食嚥下器官の生理Ⅱ	摂食・嚥下に関連する筋や神経機構について自ら描画しながら学習する。ここまでの内容について口頭試問を行う。
6	摂食嚥下のモデル	摂食嚥下のモデルについて学習する。5期モデルだけでなくプロセスモデルについて実感的に理解するために食物を用いた演習を行う。
7	摂食嚥下機能と発達	摂食嚥下機能の発達について学習する。乳児嚥下から押しつぶし・すりつぶしと発達する子どもの動画を視聴して気づきをまとめる演習を行う。
8	摂食嚥下機能と加齢	摂食嚥下機能の加齢による衰えをフレイルとサルコペニアの観点から学習する。舌骨と喉頭の距離を変化させるなど加齢の影響を実感する演習を行う。
9	摂食嚥下に関与する諸因子Ⅰ　唾液・栄養	摂食嚥下に関与する諸因子のうち唾液・栄養について学習する。唾液不足が嚥下に与える悪影響を実感する演習や自らの栄養状態を評価する演習を行う。
10	摂食嚥下に関与する諸因子Ⅱ 呼吸・姿勢・発声・構音	摂食嚥下に関与する諸因子のうち呼吸・姿勢・発声・構音を学習する。姿勢によって大きく変わる嚥下機能を実感するため食物を用いた演習を行う。
11	摂食嚥下リハビリテーション序説Ⅰ チームアプローチの意義・医師の役割	チームアプローチの意義と他職種の中でもSTに指示を下す医師の役割について学習する。この授業で初めて患者を全体的に評価する演習を行う。
12	摂食嚥下リハビリテーション序説Ⅱ リハ職の役割	チームアプローチに関わるリハ職の役割について学習する。STにも必須である体位変換・移乗・姿勢調整など身体の動き方について理解する演習を行う。
13	摂食嚥下の評価・検査・診断Ⅰ 診察・栄養評価・ROM1・MMT1	摂食嚥下障害の診察と評価について学習する。リハ職に必須の手技であるROM測定とMMTについて理論を学ぶ。
14	摂食嚥下の評価・検査・診断Ⅱ ROM2・MMT2	STに必須の手技である頭頸部・体幹の関節可動域測定(ROM)と徒手筋力テスト(MMT)について実技演習を行う。
15	摂食嚥下の評価・検査・診断Ⅲ MMT3	STに必須の手技である頭頸部・体幹の徒手筋力テスト(MMT)について実技演習を行う。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義は教科書に沿って行われるので授業内容を見て次に行う学習について教科書を読んで予習しておくこと。また、基本的に実習着を着ての演習授業となるので実習着を用意する。水や食物を使用する場合も多いので次回の内容をよく確認しておくこと。
成績評価	☑ 定期試験　（ 50 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（ 50 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	摂食嚥下リハビリテーション　第3版　医歯薬出版
参考書	摂食障害ポケットマニュアル　第4版　医歯薬出版
授業の留意点・備考	今後の職業人生の中で重要な糧になる科目であることを自覚して真剣に取り組むこと。常に実践を求められる科目であり、自らの知識・技術・態度が対象者の生命に直結することを意識し、患者・家族と接する際と同じ心構えと身だしなみで臨むこと。

科目名	摂食・嚥下障害Ⅱ	担当教員	山口　信

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	摂食嚥下障害							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	維持期病院での摂食嚥下療法業務と、教育機関の関連施設・病院での研修・研究経験を活かし、摂食・嚥下障害の評価・治療に関する体系的かつ実践的な知識と技術を伝授することができる。
授　業　概　要	・摂食嚥下障害の評価・検査・診断手技を実践的に学ぶ。 ・摂食嚥下障害の治療の基本方針について学ぶ。 ・摂食嚥下障害の治療手技を実践的に学ぶ。
到　達　目　標	・摂食嚥下障害の評価・検査・診断手技を実践できる。 ・摂食嚥下障害の治療の基本方針について説明できる。 ・摂食嚥下障害の治療手技を実践できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	摂食嚥下障害のスクリーニングⅠ RSST・MWST・FT	摂食嚥下障害の基本的なスクリーニングテストである反復唾液嚥下検査(RSST)・改定水のみテスト(MWST)・食物テスト(FT)の演習を行う。
2	摂食嚥下障害のスクリーニングⅡ TorBSST・MASA	摂食嚥下障害の総合的スクリーニングテストであるTorBSST・MASAについて学習する。TorBSSTについて演習を行う。
3	摂食嚥下障害のスクリーニングⅢ　MASA	摂食嚥下障害の総合的スクリーニングテストであるMASAの演習を行う。
4	摂食嚥下障害のスクリーニングⅣ 頚部聴診法・排痰法	摂食嚥下障害の基本的なスクリーニングである頚部聴診法について学習する。頚部聴診法およびその準備である排痰法の演習を行う。
5	ポジショニングⅠ 体位変換・移乗・ポジショニング	摂食嚥下障害の治療の基本であるポジショニングについて学習する。体位変換・移乗・ポジショニングの演習を行う。
6	ポジショニングⅡ ポジショニング・シーティング	摂食嚥下障害の治療の基本である移乗とポジショニングの演習を行う。同じく治療の基本であるシーティングについて学ぶ。
7	間接訓練Ⅰ　概説	摂食嚥下障害の間接訓練についての基本的な方針・概説を学習する。各器官の障害について訓練を立案する演習を行う。
8	間接訓練Ⅱ　口腔器官の訓練	口腔器官の間接訓練について学習する。口腔器官の間接訓練を演習する。
9	間接訓練Ⅲ　喉頭挙上の訓練	喉頭挙上の間接訓練について学習する。喉頭挙上の間接訓練を演習する。
10	間接訓練Ⅳ 頭頸部リラクゼーション・ストレッチ	頭頸部リラクゼーション・ストレッチについて学習する。頭頸部リラクゼーション・ストレッチを演習する。
11	間接訓練Ⅴ　体幹機能強化訓練	体幹機能強化訓練について学習する。体幹機能強化訓練を演習する。
12	頚部胸部聴診法Ⅰ	頚部胸部聴診法の基礎である肺区・正常音・異常音について学習する。ブロンコ体操、互いの胸郭を用いた演習を行う。
13	頚部胸部聴診法Ⅱ・打診	頚部胸部聴診法を頭頸部・胸部模型を用いて演習する。打診により横隔膜の位置を特定する講義と演習を行う。
14	呼吸訓練Ⅰ	呼吸リハの手技のうち口すぼめ呼吸・胸部打診法・呼吸介助法について学習する。これらの手技について演習を行う。
15	呼吸訓練Ⅱ	呼吸リハの手技のうちハッフィング・咳嗽訓練・ブロンコ体操・体位ドレナージなどの排痰手技について学習する。これらの手技について演習する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義は教科書に沿って行われるので授業内容を見て次に行う学習について教科書を読んで予習しておくこと。また、基本的に実習着を着ての演習授業となるので実習着を用意する。水や食物を使用する場合も多いので次回の内容をよく確認しておくこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 50 %）☑ 実技試験　（ 50 %）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	摂食嚥下リハビリテーション　第3版　医歯薬出版 “もっと”嚥下の見える評価をしよう!頚部聴診法トレーニング 第2版　メディカ出版
参　考　書	摂食障害ポケットマニュアル　第4版　医歯薬出版
授業の留意点・備考	今後の職業人生の中で重要な糧になる科目であることを自覚して真剣に取り組むこと。常に実践を求められる科目であり、自らの知識・技術・態度が対象者の生命に直結することを意識し、患者・家族と接する際と同じ心構えと身だしなみで臨むこと。

科目名	摂食・嚥下障害Ⅲ	担当教員	山口　信

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	摂食嚥下障害							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	維持期病院での摂食嚥下療法業務と、教育機関の関連施設・病院での研修・研究経験を活かし、摂食・嚥下障害の評価・治療に関する体系的かつ実践的な知識と技術を伝授することができる。
授　業　概　要	・小児の摂食・嚥下障害の治療手技について学ぶ。 ・摂食・嚥下障害のリスク管理について学ぶ。 ・摂食・嚥下障害の疾患別治療について学ぶ。
到　達　目　標	・小児の摂食嚥下障害の治療手技を実践できる。 ・摂食嚥下障害の治療のリスク管理ついて説明できる。 ・摂食嚥下障害の疾患別治療手技を実践できる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	小児の摂食嚥下訓練Ⅰ	小児の接食嚥下障害の治療の基本方針について学習する。小児の代表的な治療手技であるバンケード法の受動的訓練を演習する。
2	小児の摂食嚥下訓練Ⅱ	小児の代表的な治療手技であるバンゲード法の受動的訓練を演習する。
3	小児の摂食嚥下訓練Ⅲ	小児の代表的な治療手技であるバンゲード法の能動的訓練を演習する。
4	直接的嚥下訓練	接食嚥下障害の直接的訓練について学習する。直接的訓練を演習する。
5	リスク管理Ⅰ　誤嚥性肺炎	接食嚥下リハの最大のリスクの1つである誤嚥性肺炎の予防について学習する。誤嚥性肺炎の呼吸リハを演習する。
6	リスク管理Ⅱ　窒息・気管切開	接食嚥下リハのリスクの1つである窒息の予防と対処法について学習する。窒息の対処法を演習する。気管切開した接食嚥下障害患者のリハを学習する。
7	嚥下障害と栄養Ⅰ　NST	嚥下障害と関連の深い栄養管理についてNSTと関連付けながら学習する。
8	1.嚥下障害と栄養Ⅱ　経管栄養 2.嚥下手術	1.嚥下障害患者が多く直面する経管栄養について学習する。 2.嚥下障害の外科的治療について学習する。
9	原疾患別リハⅠ　脳血管障害	接食嚥下障害の代表的な原疾患であるCVAについてそれによる障害の特性と基本的治療方針を学ぶ。CVA患者によく使う手技の演習を行う。
10	原疾患別リハⅡ　その他の神経疾患	パーキンソン病など接食嚥下障害を来たす神経疾患についてそれによる障害の特性と基本的治療方針を学ぶ。神経疾患患者によく使う手技の演習を行う。
11	原疾患別リハⅢ　器質性嚥下障害	器質性嚥下障害特に頭頸部癌術後の接食嚥下障害の特性と基本的治療方針を学ぶ。頭頸部癌患者によく使う手技の演習を行う。
12	症例検討Ⅰ　検査結果の解釈	患者情報・嚥下評価を基に検査結果の解釈の学習と演習を行う。
13	症例検討Ⅱ　問題点抽出	患者情報・嚥下評価を基に問題点抽出の学習と演習を行う。
14	症例検討Ⅲ　目標設定	患者情報・嚥下評価を基に目標設定を行う。
15	症例検討Ⅳ　訓練立案	患者情報・嚥下評価を基に訓練立案を行う。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	講義は教科書に沿って行われるので授業内容を見て次に行う学習について教科書を読んで予習しておくこと。また、基本的に実習着を着ての演習授業となるので実習着を用意する。水や食物を使用する場合も多いので次回の内容をよく確認しておくこと。
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 50 %）☑ 実技試験　（ 25 %）☑ 小テスト　（ 25 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	摂食嚥下リハビリテーション　第3版　医歯薬出版
参　考　書	摂食障害ポケットマニュアル　第4版　医歯薬出版
授業の留意点・備考	今後の職業人生の中で重要な糧になる科目であることを自覚して真剣に取り組むこと。常に実践を求められる科目であり、自らの知識・技術・態度が対象者の生命に直結することを意識し、患者・家族と接する際と同じ心構えと身だしなみで臨むこと。

科目名	吃音	担当教員	山本麻代・飯村知己

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	発声発語・嚥下障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	熊本市の小児相談施設で発達障害および小児吃音の相談・評価を実施した経験をもとに実際の症例を呈示し、検査方法及び言語訓練の立案について講義・演習を行う。
授業概要	・流暢性障害の特徴を知る。 ・流暢性障害の評価方法を知る。 ・流暢性障害の指導方法を知る。
到達目標	・流暢性障害を評価できる。 ・流暢性障害の指導方法を述べることができる。 ・指導プログラムを立案できる。 ・評価結果を援助に応用できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	吃音についての予備知識の確認
2	吃音の定義	DSM-5の診断基準やICD11の分類を紹介する。
3	吃音の原因論	吃音の研究者の紹介やその研究者が提唱してきた原因論を紹介する。
4	吃音の疾病分類	吃音の分類とその特徴。
5	臨床の流れと情報収集	吃音児・者に対応する場合の注意点などを踏まえて臨床の流れを紹介する
6	診断と評価における留意点	評価・注目すべき項目について紹介する。
7	小児の全体発達と言語発達	小児の全体発達と言語発達についての評価を紹介・実演する。
8	言語発達の評価・検査	言語についての発達を把握する。
9	吃音の評価・検査①	吃音検査法の実施演習（小児）。
10	吃音の評価・検査②	吃音検査法の実施演習（成人）。
11	間接的訓練方法	環境調整、認知行動訓練、メンタルリハーサルについて紹介する。
12	直接的訓練方法	流暢性形成訓練。吃音軽減訓練、統合的訓練について紹介する。
13	吃音児・者の心理	吃音児・者をとりまく環境・心理的負担について紹介する。
14	当事者のセルフヘルプグループ	吃音児・者の社会とのかかわりやピアカウンセリングについて紹介する。
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	復習を行ってください。
成績評価	☑ 定期試験 （ 50 %）☐ 実技試験 （ %）☑ 小テスト （ 40 %）☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %）☐ 発表 （ %）☑ その他 （ 演習参加 10% ）
教科書	・標準言語聴覚障害学シリーズ ・発声発語障害学 （医学書院） 第３章
参考書	・吃音の診断と指導（学苑社）
授業の留意点・備考	授業を受けた内容について、板書したノート、配布資料、教科書、参考図書を用いて、必ず復習を行い、分からない内容がないようにして下さい。分からないことは自分で調べ考えてみて、解決がつかない場合は遠慮なく質問して下さい。

科目名	小児聴覚障害Ⅰ	担当教員	山本　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	宮崎大学難聴支援センターにおいて、聴覚領域での小児言語聴覚療法に従事した経験を活かし、小児難聴の基礎と臨床を指導することができる。
授　業　概　要	聴覚の発達と聴覚障害の原因を理解するとともに、小児期からの聴覚障害が及ぼす影響についてきこえとことばの関係をふまえて考察する。 小児聴覚障害Ⅱで聴覚障害児の評価、訓練を学ぶ上での基礎知識となる。
到　達　目　標	・小児聴覚障害の原因について理解する。 ・聴覚障害の早期発見、早期療育において必要な検査や補聴機器に関する知識、療育に関する基礎知識を身に付ける。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	擬似難聴体験
2	耳の発生と聴覚の発達	きこえの仕組みと障害
3	聴覚障害とライフステージ	難聴体験レポートのまとめ
4	難聴の原因と発症時期①	ハイリスク要因、遺伝性難聴、症候性難聴
5	難聴の原因と発症時期②	非症候性難聴
6	乳幼児の聴力検査①	乳幼児の聴力検査の種類
7	乳幼児の聴力検査②	乳幼児の聴力検査の種類
8	聴覚障害児の早期発見・早期療育	早期発見、診断、療育の流れ
9	聴覚障害児の早期発見・早期療育	一次的障害と二次的障害
10	聴覚障害児のきこえと補聴器・人工内耳①	聴力レベル、聴力型、言語帯域
11	聴覚障害児のきこえと補聴器・人工内耳②	補聴器・人工内耳の特徴
12	成人聴覚障害へのリハビリテーション	成人聴覚障害へのアプローチ
13	小児聴覚障害へのリハビリテーション	小児聴覚障害へのアプローチ
14	人工中耳の概要と適応	人工中耳の概要
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配布資料によく目を通すこと
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	・標準言語聴覚障害シリーズ　聴覚障害学 ・言語聴覚士のための聴覚障害学（医歯薬出版） ・言語聴覚療法シリーズ6　聴覚障害Ⅱ－基礎編（建帛社）
参　考　書	
授業の留意点・備考	小児聴覚の基礎の講義になります。３年生の応用に向け、しっかり理解しましょう。

科目名	小児聴覚障害Ⅱ	担当教員	山本　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	宮崎大学難聴支援センターにおいて、聴覚領域での小児言語聴覚療法に従事した経験を活かし、小児難聴の基礎と臨床を指導することができる。
授　業　概　要	小児聴覚障害の評価、訓練の流れを理解し、評価方法や訓練内容について実践的に学ぶ。
到　達　目　標	・聴覚障害児の評価について理解を深める。 ・聴覚障害児の訓練について、聴覚、言語、発声発語それぞれのアプローチの方法を理解する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	小児聴覚障害の特徴
2	小児の指導・訓練	小児のハビリテーション
3	乳幼児の聴力検査	難聴児の早期発見の必要性
4	語彙習得の課題	聴覚障害児の語彙習得獲得の課題
5	乳幼児の補聴器適合	乳幼児の補聴器適合と種類
6	小児の人工内耳	小児への人工内耳の適合
7	選別聴力検査	聴覚検診・聴覚スクリーニング
8	症例検討①	症例別ケース検討
9	症例検討②	症例別ケース検討
10	症例検討③	症例別ケース検討
11	リハビリテーションの流れ	小児難聴リハビリテーションの流れ
12	視覚聴覚二重障害	視覚聴覚二重障害の疾患
13	視覚聴覚二重障害	視覚聴覚二重障害の指導法
14	まとめ	評価・訓練法のまとめ
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配布資料によく目を通すこと
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	・子どもの聴覚障害訓練ガイダンス（医学書院） ・標準言語聴覚障害学　聴覚障害学　（医学書院）
参　考　書	・言語聴覚療法シリーズ6　聴覚障害Ⅱ－臨床編 ・言語聴覚士のための聴覚障害学　（医歯薬出版株式会社）
授業の留意点・備考	内容が難しくなっていきます。毎回の講義を確実に理解し、分からない点はしっかり考え、解決しなけれな質問して、着実に理解してください。

科目名	成人聴覚障害Ⅰ	担当教員	黒川　一也

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	身体障害者福祉司として聴覚障害者の担当をした経験を活かし、実践的な講義、演習を行うことが出来る。
授業概要	聴覚障害者のコミュニケーション能力の向上を図り社会参加できるよう、指導、援助する技術を理解する。
到達目標	・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ訓練・指導の方法を理解する。 ・社会保障制度を理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	聴覚に関係する2年次までの内容を確認し、本講義内容を理解する
2	訓練・指導の対象者	本講義の対象者を理解する
3	情報収集（問診票の作成）	指導・評価のための情報を理解し、収集するための方法を考える
4	問診演習	自作の問診表を用い、初回面接演習を行う
5	聴力検査法	指導・評価のための検査法を理解する
6	聴力検査演習	成人に適した検査の演習を行う
7	検査結果の解析１	事例をとおして結果の分析を行う①
8	検査結果の解析２	事例をとおして結果の分析を行う②
9	聴覚補償（補聴器の適合と評価）	補聴器の適合と評価の方法を学ぶ
10	聴覚補償（人工内耳の適合と評価）	人工内耳の適合と評価の方法を学ぶ
11	聴覚補償　総括	聴覚補償についてのまとめ
12	視覚的手段によるｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ指導１	読話訓練について（ビデオ）学ぶ
13	視覚的手段によるｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ指導２	読話訓練以外の視覚的手段によるコミュニケーション指導を学ぶ
14	視覚的手段によるｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ指導３	演習をとおして指導法を理解する
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配付資料を確認の上、事前に読むこと
成績評価	☑ 定期試験（100 %）☐ 実技試験（　　%）☐ 小テスト（　　%）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☐ その他(　　)
教科書	・標準言語聴覚障害学ｼﾘｰｽﾞ　聴覚障害学 ・聴覚検査の実際　改訂４版
参考書	
授業の留意点・備考	

科目名	成人聴覚障害Ⅱ	担当教員	黒川　一也

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	身体障害者福祉司として聴覚障害者の担当をした経験を活かし、実践的な講義、演習を行うことが出来る。
授業概要	聴覚障害者のコミュニケーション能力の向上を図り社会参加できるよう、指導、援助する技術を理解する。
到達目標	・ｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝ訓練・指導の方法を理解する。 ・社会保障制度を理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	訓練・指導プログラムの作成１	中途失聴者を対象とした訓練・指導プログラムを考える
2	訓練・指導の評価１	上記を対象に評価方法、分析を行う
3	訓練・指導演習１	症例をとおして演習を行う
4	訓練・指導プログラムの作成２	老人性難聴者を対象とした訓練・指導プログラムを考える
5	訓練・指導の評価２	上記を対象に評価方法、分析を行う
6	訓練・指導演習２	症例をとおして演習を行う
7	ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ技術１	カウンセリングの理論と方法を理解する
8	ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ技術２	対象者に応じたカウンセリング技術を身につける
9	ｶｳﾝｾﾘﾝｸﾞ演習	症例をとおして演習を行う行う
10	日常生活用具の活用１	聴覚障害者に必要な日常生活用具を理解する
11	日常生活用具の活用２	日常生活用具を活用した生活指導を考える
12	身体障害者福祉法と総合支援法	関係法規の理解と活用について学ぶ
13	関係団体への理解	障害者理解を深め、そのニーズを把握する
14	総括	障害者福祉および高齢者福祉から整理し、まとめる
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配付資料を確認の上、事前に読むこと
成績評価	☑ 定期試験（100 %）☐ 実技試験（　　%）☐ 小テスト（　　%）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☐ その他（　　）
教科書	・標準言語聴覚障害学ｼﾘｰｽﾞ　聴覚障害学 ・聴覚検査の実際　改訂４版
参考書	
授業の留意点・備考	

科目名	補聴器・人工内耳	担当教員	山本　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	宮崎大学難聴支援センターにおいて、聴覚領域での言語聴覚療法に従事した経験を活かし、補聴器・人工内耳の構造から機能、装用者への指導法まで幅広く講義を行うことができる。
授　業　概　要	聴覚障害児・者への聴覚補償として、補聴器の理論と活用について学ぶ。 また、最重度聴覚障害児・者に対する人工内耳の適応について学び、リハビリテーションの方法などについて理解する。
到　達　目　標	・補聴器の基本構造と機能を理解し、フィッティングの方法について学ぶ。 ・人工内耳の基本構造と機能を理解し、マッピングや訓練の方法について学ぶ。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	オリエンテーション	音に関する基礎知識
2	補聴器に必要な音の知識	補聴器の歴史と種類
3	補聴器の構造（実技）	補聴器の構造と機能
4	補聴器の構造と特性	アナログ補聴器とデジタル補聴器
5	補聴器のフィッティング①	各調整器、イヤモールド、フックによる音響変化
6	補聴器のフィッティング②	規定選択法、挿入利得、装用利得
7	補聴器装用指導	補聴器の使用方法と指導法
8	人工内耳の構造と機能①	人工内耳の仕組み
9	人工内耳の構造と機能②	コード化法、マッピング
10	人工内耳の適応、術前検査	人工内耳の適合基準
11	人工内耳手術の流れ	人工内耳手術の流れ
12	成人聴覚障害へのリハビリテーション	成人聴覚障害者への補聴機器
13	小児聴覚障害へのリハビリテーション	小児聴覚障害者への補聴機器
14	人工中耳の概要と適応	人工中耳のしくみ
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配布資料によく目を通すこと
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☑ 小テスト　（ 10 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	・言語聴覚士のための聴覚障害学（医歯薬出版）
参　考　書	・言語聴覚療法シリーズ6　聴覚障害Ⅱ－臨床編 ・言語聴覚士のための聴覚障害学　（医歯薬出版株式会社）
授業の留意点・備考	補聴器業者、人工内耳メーカーの方の講義もあります。貴重なお話ですので、しっかりと学んでください。

科目名	聴覚障害評価・訓練法Ⅰ	担当教員	山本　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	前期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	大学病院耳鼻咽喉科での言語聴覚療法に従事した経験を活かし、聴覚障害評価法についてその種類や流れを講義できる。
授業概要	聴覚検査の種類やそれぞれの特徴を理解し、聴覚障害の評価において適切な選択と実施ができることを目標とする。
到達目標	・聴覚検査を行う際の留意点を理解する。 ・各聴覚検査の特徴と適用について理解する。 ・各聴覚検査の検査手順を理解し、実施できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	聴覚検査を行う際の留意点
2	純音聴力検査①	気導・骨導聴力検査の目的、手順
3	純音聴力検査②	マスキング
4	純音聴力検査③	気導・骨導聴力検査の実施と記録
5	純音聴力検査④	気導・骨導聴力検査の実施と記録
6	語音聴力検査①	聴取閾値検査、弁別検査
7	語音聴力検査②	検査の実施と記録
8	閾値上聴力検査①	検査方法と臨床応用
9	閾値上聴力検査②	各種検査の実施と記録（ﾊﾞﾗﾝｽﾃｽﾄ、SISIﾃｽﾄなど）
10	閾値上聴力検査③	各種検査の実施と記録（ﾊﾞﾗﾝｽﾃｽﾄ、SISIﾃｽﾄなど）
11	インピーダンス・オージオメトリー	検査方法と臨床応用
12	他覚的聴力検査	蝸電図、ＡＢＲ、ＭＬＲ、ＳＶＲ
13	耳音響放射	検査の実施と臨床応用
14	蝸電図、ＡＢＲ、ＭＬＲ、ＳＶＲ	検査方法と臨床応用
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	検査方法をしっかり覚えるために、繰り返し練習を行うこと。
成績評価	☐ 定期試験　（　　%）☑ 実技試験　（ 90 %）☑ 小テスト　（ 10 %）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	・聴覚検査の実際　（南山堂） ・病気がみえる耳鼻咽喉科（医療情報科学研究所）
参考書	
授業の留意点・備考	複数の聴覚検査の手技を覚えます。何度も練習し、体に覚えこませてください。

科目名	聴覚障害評価・訓練法Ⅱ	担当教員	山本　麻代

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	1	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	専門分野	教育内容	聴覚障害学							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	大学病院耳鼻咽喉科での言語聴覚療法に従事した経験を活かし、聴覚障害評価法についてその種類や流れを講義できる。
授　業　概　要	聴覚検査の種類やそれぞれの特徴を理解し、聴覚障害の評価において適切な選択と実施ができることを目標とする。
到　達　目　標	・各聴覚検査の特徴と適用について理解する。 ・各聴覚検査の検査手順を理解し実施できる。 ・検査結果を分析することができる。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	乳幼児の聴力検査	BOA、COR、ﾋﾞｰﾌﾞｼｮｳ･ﾃｽﾄ、遊戯聴力検査
2	乳幼児の聴力検査	BOA、COR、ﾋﾞｰﾌﾞｼｮｳ･ﾃｽﾄ、遊戯聴力検査
3	後迷路性難聴の検査	後迷路性難聴の精査
4	機能性難聴の検査	機能性難聴の精査
5	耳鳴検査	選別検査
6	補聴器・人工内耳装用のための検査	補聴器・人工内耳のための適合検査
7	問診表作成（小児・成人）	問診表作成
8	検査結果の分析	結果の分析法
9	純音聴力検査の実施	検査実施のまとめ
10	純音聴力検査の実施	検査実施のまとめ
11	語音聴力検査の実施	検査実施のまとめ
12	語音聴力検査の実施	検査実施のまとめ
13	症例レポートの作成	症例レポート作成
14	まとめ	聴覚障害評価・訓練計画
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	配布資料によく目を通すこと
成　績　評　価	☑ 定期試験　（ 90 %）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 10 %） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教　科　書	・聴覚検査の実際　（南山堂） ・病気がみえる耳鼻咽喉科（医療情報科学研究所）
参　考　書	
授業の留意点・備考	班で聴覚検査のまとめレポート作成を行います。計画的に行うこと。

科目名	地域言語聴覚療法（保育）	担当教員	臨床実習指導者

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	前期	単位数	1	時数	15	授業形態	実習
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修

担当教員の実務経験	保育士や看護師など保育施設で働く実習指導担当者が指導を行う。
授業概要	保育実習 言語聴覚士のいる保育現場で子どもと関わり、その発達を知ることで、子どもの特性やコミュニケーションのあり方について理解する。
到達目標	保育実習 個々の対象児の全体像を知り、小児の発達について理解する。 ・集団に対する幼児教育の実践を通して、その関わり方について学ぶ。 ・幼児教育を通して、将来言語聴覚士としてどのように取り組むのかについて考える。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	発達の理解１	運動面の発達の理解１
2	発達の理解２	運動面の発達の理解２
3	発達の理解３	運動面の発達の理解３
4	発達の理解４	認知面の発達の理解１
5	発達の理解５	認知面の発達の理解２
6	発達の理解６	認知面の発達の理解３
7	発達の理解７	摂食・嚥下面での発達の理解１
8	発達の理解８	摂食・嚥下面での発達の理解２
9	発達の理解９	摂食・嚥下面での発達の理解３
10	発達の理解１０	言語面の発達の理解１
11	発達の理解１１	言語面の発達の理解２
12	発達の理解１２	言語面の発達の理解３
13	発達の理解１３	言語運用の発達の理解１
14	発達の理解１４	言語運用の発達の理解２
15	発達の理解１５	言語運用の発達の理解３

準備学習（予習復習）の具体的な内容	
成績評価	☐ 定期試験　（　　%）☐ 実技試験　（　　%）☐ 小テスト　（　　%）☐ レポート　（　　%） ☐ 課題　（　　%）☐ 発表　（　　%）☐ その他（　　）
教科書	
参考書	
授業の留意点・備考	

科目名	地域言語聴覚療法（介護）	担当教員	臨床実習指導者

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	1	時数	40	授業形態	実習
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目						選択・必修	選択必修	

担当教員の実務経験	介護士や看護師、福祉施設で働く実習指導担当者が指導を行う。
授　業　概　要	介護実習 介護の現場を知り、高齢者と関わることでその特性を理解し、言語聴覚臨床の現場へ出る際の礎とする。
到　達　目　標	介護実習 対象者の全体像と問題点を知り、その対象　者と接触を持ち　、　基本的な介護方法を学ぶと共に、医療　・福祉サービスについて理解する。

授　業　計　画

回	テーマ	授　業　内　容
1	対人援助１	高齢者と直接接し、対人援助に必要な心構えや技術を学ぶ。
2	対人援助２	高齢者と直接接し、対人援助に必要な心構えや技術を学ぶ。
3	対人援助３	高齢者とのコミュニケーションについて１
4	対人援助４	高齢者とのコミュニケーションについて２
5	対人援助５	高齢者とのコミュニケーションについて３
6	対人援助６	高齢者の生活環境について１
7	対人援助７	高齢者の生活環境について２
8	対人援助８	高齢者の食事について１
9	対人援助９	高齢者の食事について２
10	対人援助１０	高齢者の食事について３
11	対人援助１１	高齢者の食事と飲み物について１
12	対人援助１２	高齢者の食事と飲み物について２
13	対人援助１３	高齢者に必要な援助とは１
14	対人援助１４	高齢者に必要な援助とは２
15	対人援助１５	まとめ

準備学習（予習復習）の具体的な内容	日々の振り返りをしっかり行ってください。
成　績　評　価	☐ 定期試験　（　　%）☑ 実技試験　（ 30 %）☐ 小テスト　（　　%）☑ レポート　（ 30 %） ☐ 課題　（　　%）☑ 発表　（ 30 %）☑ その他（実習完了　１０％　）
教　科　書	
参　考　書	
授業の留意点・備考	・１日８時間×５日＝週４０時間を基本とする。

科目名	言語聴覚療法管理学Ⅰ	担当教員	専任教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	1	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目					選択・必修	選択必修		

担当教員の実務経験	理学療法・言語聴覚療法・看護学科の各教員がそれぞれの経験を基に講義を行う。
授業概要	○１・２年次で行われる実習に先立ち、実習に際して求められる資質について講義・演習を通して学ぶ。 ○当該科目は、座学で実習にあたっての心構えや日誌の書き方、利用者の方等との接し方について学び、演習の中で各実習において必要となる事項について学ぶ。
到達目標	○実習においては、知識的側面のみならず実践的な側面が求められる。実習先におけるこれら要求に応えられるような人材を育成する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	オリエンテーション	臨床実習にあたっての心構え
2	病院や施設について	臨床実習において求められる資質について 実習指導者・職場スタッフとの関わり方について
3	日誌・レポート・レジュメについて	実習日誌・レポート・レジュメの書き方
4	プロフィール作成	プロフィールシートの作成について
5	プロフィール完成	プロフィールシートの完成・郵送
6	個人情報保護について①	医療人になるとは～その心構え～
7	個人情報保護について②	個人情報の定義とその範囲
8	実習前指導①	移乗動作・車椅子の扱い方・歩行の介助について
9	実習前指導②	移乗動作・車椅子の扱い方・歩行の介助について
10	実習前指導③	感染予防について
11	実習前指導④	バイタル測定について
12	実習での接遇について①	宿泊研修でのグループワーク
13	実習での接遇について②	宿泊研修でのグループワーク
14	実習での接遇について③	宿泊研修でのグループワーク
15	まとめ	これまでの授業内容を復習し理解を深める

準備学習（予習復習）の具体的な内容	今後の実習の基礎となる講義・演習です。復習をしっかり行ってください。
成績評価	☐ 定期試験 （ %） ☐ 実技試験 （ %） ☐ 小テスト （ %） ☐ レポート （ %） ☑ 課題 （ 20 %） ☑ 発表 （ 30 %） ☑ その他 （ 演習参加態度 50% ）
教科書	適宜資料を配布します。
参考書	
授業の留意点・備考	適宜課題を出しますので、期日までに提出してください。

科目名	臨床実習Ⅰ（言語体験記録）	担当教員	実習指導者

学科	言語聴覚療法学科	年次	2	開講期	後期	単位数	1	時数	40	授業形態	実習
区分	専門分野	教育内容	臨床実習							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	言語聴覚士免許を所持し各実習施設で言語聴覚士として実務を行っている。
授業概要	病院及び施設等での１週間の実習を通して、言語療法対象者および言語聴覚士とのコミュニケーションの重要性とその方法、障害を持つ人への対応や社会人としての態度など基本的姿勢について実践的に学ぶ。
到達目標	言語聴覚療法のさまざまな活動を通してリハ・チームのなかでの言語聴覚士の役割と他部門との関係を理解する。自分の職業（言語聴覚士）に対する適正について考える。臨床体験を通して学校での学習をより具体的イメージをもって捉え、第３学年へ向けて学習意欲を高める。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	臨床実習指導者の指導に従って実習を行う	
2		
3		
4		
5		
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

準備学習（予習復習）の具体的な内容	学習した内容の中でも専門分野を統合的に復習しておく
成績評価	☐ 定期試験 （ %）☐ 実技試験 （ 60 %）☐ 小テスト （ %）☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %）☐ 発表 （ 30 %）☑ その他 （完了10% ）
教科書	特になし
参考書	症例に応じて、各分野の専門書を参照してください。
授業の留意点・備考	特になし

科目名	臨床実習Ⅱ(評価実習)	担当教員	各施設言語聴覚士

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	3	時数	120	授業形態	実習
区分	専門分野	教育内容	臨床実習							選択・必修	

担当教員の実務経験	臨床実習指導資格を持つ病院・施設などの言語聴覚士により実践的かつ系統的な指導が可能である。
授業概要	・病院および施設等での3週間の実習を通して評価方法を実践的に学習する。 ・学校の定める実習施設における系統的学習を行う。
到達目標	・対象者に関する情報を収集できる。 ・収集した情報を分析・統合して対象者の全体像を把握できる。 ・情報を収集するために観察・面接・検査その他を実施できる。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
2	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
3	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
4	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
5	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
6	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
7	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
8	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
9	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
10	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
11	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
12	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
13	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
14	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など
15	評価実習	見学・観察・情報収集・実施・フィードバック・課題遂行など

準備学習（予習復習）の具体的な内容	各種検査について理論と方法を十分学習し、習熟しておくこと。
成績評価	☐ 定期試験 （ %）☐ 実技試験 （ %）☐ 小テスト （ %）☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %）☑ 発表 （ 30 %）☑ その他 （ 実習評価点60%実習完了点10% ）
教科書	特に指定しない。
参考書	特に指定しない。
授業の留意点・備考	・実習指導者の指示に従い、謙虚な姿勢で学びながら対象者と接してもらいたい。 ・常に探究心をもって実習に望んでもらいたい。

科目名	臨床実習Ⅲ･Ⅳ（長期実習）	担当教員	実習指導者

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	通年	単位数	12	時数	480	授業形態	実習
区分	専門分野	教育内容	臨床実習							選択・必修	必修

担当教員の実務経験	臨床実習指導資格を持つ言語聴覚士
授業概要	実習を通して、評価から訓練立案、再評価までの一連の業務内容について学ぶ。 実習全般を通して言語聴覚士の業務内容を理解する。
到達目標	対象者に関する情報収集について学ぶ。 対象者の情報を分析し全体像を把握する。 問題点の抽出を行い訓練計画を立案する。 リハビリの業務について理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	実習指導者の指導による。	実習指導者の指導による。
2	〃	〃
3	〃	〃
4	〃	〃
5	〃	〃
6	〃	〃
7	〃	〃
8	〃	〃
9	〃	〃
10	〃	〃
11	〃	〃
12	〃	〃
13	〃	〃
14	〃	〃
15	〃	〃

準備学習（予習復習）の具体的な内容	
成績評価	☐ 定期試験 （ %）☑ 実技試験 （ 60 %）☐ 小テスト （ %）☐ レポート （ %） ☐ 課題 （ %）☑ 発表 （ 30 %）☑ その他 （完了 １０％ ）
教科書	
参考書	
授業の留意点・備考	・これまで学んだ内容を応用し実習に取り組む。 ・実習を通し言語聴覚士の業務全般を把握する。

科目名	実習支援演習Ⅱ	担当教員	言語聴覚療法学科教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	3	開講期	後期	単位数	2	時数	30	授業形態	講義・演習
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目					選択・必修			

担当教員の実務経験	言語聴覚療法学科の教員が各専門分野について臨床経験に基づいて実践的に教授することができる。
授業概要	3.4年次に実施される実習に際して求められる知識・技術・心構えなどについて講義・演習を通して学ぶ。
到達目標	・実習で求められる知識や技術を身につける。 ・臨床で求められる人間性について理解する。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	臨床実習にあたっての心構え	
2	臨床実習において求められる資質	
3	インテーク・スクリーニング	
4	メモ・カルテ	
5	日報・ケースノート	
6	問題点抽出・目標設定	
7	訓練立案・患者情報のまとめ	
8	レポートの書き方	
9	個人情報保護Ⅰ	
10	個人情報保護Ⅱ	
11	移乗動作	
12	バイタル測定・臨床技術	
13	臨床実習の意義	
14	総括	
15	レポート作成	

準備学習（予習復習）の具体的な内容	
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☑ 実技試験（ 50 %）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☐ その他（　　）
教科書	特になし
参考書	特になし
授業の留意点・備考	臨床に直接関わる授業であるから真剣に取り組むこと。実習着で受講すること。

科目名	言語療法基礎Ⅰ	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修
担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。										
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。										
到達目標	模擬試験で合格点をクリアできるよう取り組む。										

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	基礎医学について①	医学総論について要点を整理し、模擬試験に備える。
2	基礎医学について②	解剖学について要点を整理し、模擬試験に備える。
3	基礎医学について③	生理学について要点を整理し、模擬試験に備える。
4	基礎医学について④	病理学について要点を整理し、模擬試験に備える。
5	臨床医学について①	内科学について要点を整理し、模擬試験に備える。
6	臨床医学について②	小児科学について要点を整理し、模擬試験に備える。
7	臨床医学について③	精神医学について要点を整理し、模擬試験に備える。
8	臨床医学について④	リハビリテーション医学について要点を整理し、模擬試験に備える。
9	臨床医学について⑤	耳鼻咽喉科学について要点を整理し、模擬試験に備える。
10	臨床医学について⑥	臨床神経学について要点を整理し、模擬試験に備える。
11	臨床医学について⑦	形成外科学について要点を整理し、模擬試験に備える。
12	臨床歯科医学について①	臨床歯科医学について要点を整理し、模擬試験に備える。
13	臨床歯科医学について②	口腔外科学について要点を整理し、模擬試験に備える。
14	音声・言語・聴覚医学について①	呼吸発声発語系の構造・機能・病態について要点を整理し、模擬試験に備える。
15	音声・言語・聴覚医学について②	聴覚系の構造・機能・病態について要点を整理し、模擬試験に備える。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	音声・言語・聴覚医学について③	神経系の構造・機能・病態について要点を整理し、模擬試験に備える。
17	心理学①	学習・認知心理学について要点を整理し、模擬試験に備える。
18	心理学②	心理測定法について要点を整理し、模擬試験に備える。
19	心理学③	臨床心理学について要点を整理し、模擬試験に備える。
20	心理学④	生涯発達心理学について要点を整理し、模擬試験に備える。
21	音声・言語学①	音声学について要点を整理し、模擬試験に備える。
22	音声・言語学②	音響学について要点を整理し、模擬試験に備える。
23	音声・言語学③	聴覚心理学について要点を整理し、模擬試験に備える。
24	音声・言語学④	言語学について要点を整理し、模擬試験に備える。
25	音声・言語学⑤	言語発達学について要点を整理し、模擬試験に備える。
26	社会福祉・教育①	社会保障制度について要点を整理し、模擬試験に備える。
27	社会福祉・教育②	リハビリテーション概論について要点を整理し、模擬試験に備える。
28	社会福祉・教育③	医療福祉教育・関係法規について要点を整理し、模擬試験に備える。
29	基礎分野まとめ	1～28回目までの内容について確認をし、模擬試験に備える。
30	基礎分野模擬試験	1～28回目までの内容についての模擬試験を実施する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（基礎分野模擬試験50%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	言語療法基礎Ⅱ	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修
担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。										
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。										
到達目標	模擬試験で合格点をクリアできるよう取り組む。										

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	言語聴覚障害学総論について①	言語聴覚障害学総論について要点を整理し、模擬試験に備える。
2	言語聴覚障害学総論について②	言語聴覚障害診断学について要点を整理し、模擬試験に備える。
3	失語症について①	失語症の定義について要点を整理し、模擬試験に備える。
4	失語症について②	言語症状と失語症候群について要点を整理し、模擬試験に備える。
5	失語症について③	失語症の評価・診断について要点を整理し、模擬試験に備える。
6	失語症について④	失語症の訓練・援助について要点を整理し、模擬試験に備える。
7	失語症について⑤	後天性小児失語症について要点を整理し、模擬試験に備える。
8	高次脳機能障害について①	神経心理学の基本概念について要点を整理し、模擬試験に備える。
9	高次脳機能障害について②	各種高次脳機能障害の病巣・症状・検査について要点を整理し、模擬試験に備える。
10	高次脳機能障害について③	高次脳機能障害の指導・訓練について要点を整理し、模擬試験に備える。
11	言語発達障害学について①	言語発達障害の総論について要点を整理し、模擬試験に備える。
12	言語発達障害学について②	言語発達障害の評価について要点を整理し、模擬試験に備える。
13	言語発達障害学について③	言語発達障害の指導、訓練について要点を整理し、模擬試験に備える。
14	発声発語・嚥下障害学について①	音声障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
15	発声発語・嚥下障害学について②	構音障害について要点を整理し、模擬試験に備える。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	発声発語・嚥下障害学について③	嚥下障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
17	発声発語・嚥下障害学について④	吃音について要点を整理し、模擬試験に備える。
18	聴覚障害学①	小児聴覚障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
19	聴覚障害学②	小児聴覚障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
20	聴覚障害学③	小児聴覚障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
21	聴覚障害学④	成人聴覚障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
22	聴覚障害学⑤	成人聴覚障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
23	聴覚障害学⑥	補聴器・人工内耳について要点を整理し、模擬試験に備える。
24	聴覚障害学⑦	補聴器・人工内耳について要点を整理し、模擬試験に備える。
25	聴覚障害学⑧	視覚聴覚二重障害について要点を整理し、模擬試験に備える。
26	まとめ①	1～25までの内容について確認をし、模擬試験に備える。
27	まとめ②	1～25までの内容について確認をし、模擬試験に備える。
28	まとめ③	1～25までの内容について確認をし、模擬試験に備える。
29	まとめ④	1～25までの内容について確認をし、模擬試験に備える。
30	専門分野模擬試験	1～25までの内容についての模擬試験を実施する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（専門分野模擬試験50%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	言語療法基礎Ⅲ	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修
担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。										
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。										
到達目標	模擬試験で合格点をクリアできるよう取り組む。										

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	基礎医学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
2	基礎医学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
3	臨床医学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
4	臨床医学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
5	臨床歯科学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
6	臨床歯科学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
7	音声・言語・聴覚医学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
8	音声・言語・聴覚医学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
9	音声・言語・聴覚医学について③	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
10	心理学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
11	心理学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
12	音声・言語学について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
13	音声・言語学について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
14	社会福祉・教育について①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
15	社会福祉・教育について②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	言語聴覚障害学総論①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
17	言語聴覚障害学総論②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
18	失語・高次脳機能障害学①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
19	失語・高次脳機能障害学②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
20	言語発達障害学①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
21	言語発達障害学②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
22	発声発語・嚥下障害学①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
23	発声発語・嚥下障害学②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
24	聴覚障害学①	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
25	聴覚障害学②	この分野の国家試験の過去問題をもとに、要点を解説する。
26	模擬試験①	解説を行った過去の国家試験問題を実施する。
27	模擬試験解説①	模擬試験①について解説する。
28	模擬試験②	解説を行った過去の国家試験問題を実施する。
29	模擬試験解説②	模擬試験②について解説する。
30	まとめ	模擬試験①・模擬試験②の要点のまとめを行う。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 40 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（模擬試験①・②各30%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	言語療法演習Ⅰ	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修

担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。
到達目標	模擬試験で合格点をクリアできるよう取り組むとともに、活用できる知識を身につける。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	基礎医学について①	医学総論について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
2	基礎医学について②	解剖学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
3	基礎医学について③	生理学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
4	基礎医学について④	病理学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
5	臨床医学について①	内科学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
6	臨床医学について②	小児科学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
7	臨床医学について③	精神医学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
8	臨床医学について④	リハビリテーション医学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
9	臨床医学について⑤	耳鼻咽喉科学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
10	臨床医学について⑥	臨床神経学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
11	臨床医学について⑦	形成外科学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
12	臨床歯科医学について①	臨床歯科医学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
13	臨床歯科医学について②	口腔外科学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
14	音声・言語・聴覚医学について①	呼吸発声発語系の構造・機能・病態について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
15	音声・言語・聴覚医学について②	聴覚系の構造・機能・病態について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	音声・言語・聴覚医学について③	神経系の構造・機能・病態について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
17	心理学①	学習・認知心理学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
18	心理学②	心理測定法について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
19	心理学③	臨床心理学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
20	心理学④	生涯発達心理学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
21	音声・言語学①	音声学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
22	音声・言語学②	音響学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
23	音声・言語学③	聴覚心理学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
24	音声・言語学④	言語学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
25	音声・言語学⑤	言語発達学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
26	社会福祉・教育①	社会保障制度について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
27	社会福祉・教育②	リハビリテーション概論について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
28	社会福祉・教育③	医療福祉教育・関係法規について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
29	基礎分野まとめ	1～28回目までの内容について確認をし、活用できるように整理する。
30	基礎分野模擬試験	1～28回目までの内容についての模擬試験を実施する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（模擬試験50%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	言語療法演習Ⅱ	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修

担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。
到達目標	模擬試験で合格点をクリアできるよう取り組むとともに、活用できる知識を身につける。

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	言語聴覚障害学総論について①	言語聴覚障害学総論について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
2	言語聴覚障害学総論について②	言語聴覚障害診断学について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
3	失語症について①	失語症の定義について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
4	失語症について②	言語症状と失語症候群について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
5	失語症について③	失語症の評価・診断について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
6	失語症について④	失語症の訓練・援助について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
7	失語症について⑤	後天性小児失語症について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
8	高次脳機能障害について①	神経心理学の基本概念について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
9	高次脳機能障害について②	各種高次脳機能障害の病巣・症状・検査について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
10	高次脳機能障害について③	高次脳機能障害の指導・訓練について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
11	言語発達障害学について①	言語発達障害の総論について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
12	言語発達障害学について②	言語発達障害の評価について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
13	言語発達障害学について③	言語発達障害の指導、訓練について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
14	発声発語・嚥下障害学について①	音声障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
15	発声発語・嚥下障害学について②	構音障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	発声発語・嚥下障害学について③	嚥下障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
17	発声発語・嚥下障害学について④	吃音について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
18	聴覚障害学①	小児聴覚障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
19	聴覚障害学②	小児聴覚障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
20	聴覚障害学③	小児聴覚障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
21	聴覚障害学④	成人聴覚障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
22	聴覚障害学⑤	成人聴覚障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
23	聴覚障害学⑥	補聴器・人工内耳について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
24	聴覚障害学⑦	補聴器・人工内耳について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
25	聴覚障害学⑧	視覚聴覚二重障害について基礎で学んだ要点を整理し、活用できる知識を養う。
26	まとめ①	1～25までの内容について確認をし、活用できるように整理する。
27	まとめ②	1～25までの内容について確認をし、活用できるように整理する。
28	まとめ③	1～25までの内容について確認をし、活用できるように整理する。
29	まとめ④	1～25までの内容について確認をし、活用できるように整理する。
30	模擬試験	1～25までの内容についての模擬試験を実施する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（模擬試験50%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	言語聴覚療法総合	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	後期	単位数	2	時数	60	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修
担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。										
授業概要	国家試験対策の講義を中心に行う。言語聴覚士の国家試験は、出題範囲が多岐にわたるため、効率の良い学習が求められる。講義から小テスト、模擬試験を含めて、国家試験合格に必要な知識を効果的に学習していく。										
到達目標	総合判定試験に合格できるよう取り組む。										

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	基礎医学について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
2	基礎医学について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
3	臨床医学について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
4	臨床医学について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
5	臨床歯科学について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
6	臨床歯科学について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
7	音声・言語・聴覚医学について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
8	音声・言語・聴覚医学について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
9	音声・言語・聴覚医学について③	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
10	心理学について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
11	心理学について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
12	音声・言語学について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
13	音声・言語学について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
14	社会福祉・教育について①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
15	社会福祉・教育について②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	言語聴覚障害学総論①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
17	言語聴覚障害学総論②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
18	失語・高次脳機能障害学①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
19	失語・高次脳機能障害学②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
20	言語発達障害学①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
21	言語発達障害学②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
22	発声発語・嚥下障害学①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
23	発声発語・嚥下障害学②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
24	聴覚障害学①	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
25	聴覚障害学②	この分野の国家試験の過去問題を実施し、要点を解説する。
26	模擬試験①	過去の国家試験問題を実施し、解説する。
27	模擬試験②	過去の国家試験問題を実施し、解説する。
28	模擬試験③	過去の国家試験問題を実施し、解説する。
29	模擬試験④	過去の国家試験問題を実施し、解説する。
30	模擬試験⑤	過去の国家試験問題を実施し、解説する。

準備学習（予習復習）の具体的な内容	指定の教科書内の各授業の該当部分を読み込んでおく。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☑ 小テスト（ 50 %）☐ レポート（　　%） ☐ 課題（　　%）☐ 発表（　　%）☑ その他（模擬試験50%　　）
教科書	言語聴覚士テキスト　第3版　医歯薬出版株式会社
参考書	各分野の授業で使用した教科書を適宜参照してください
授業の留意点・備考	国家試験勉強の主体は自己学習にあることをしっかりと意識して授業に臨んでください。

科目名	症例研究Ⅰ・Ⅱ	担当教員	各担当教員

学科	言語聴覚療法学科	年次	4	開講期	通年	単位数	4	時数	120	授業形態	講義
区分	選択必修	教育内容	選択必修科目							選択・必修	選択必修
担当教員の実務経験	各教員が臨床経験に基づき、それぞれの分野において教授可能である。										
授業概要	症例を通して、分析方法やレポートの書き方などを学ぶ。実習で実際経験した症例等をまとめ、発表することを目的とるする。発表に際しては、個人が特定できない形で暗号化を行うとともに、個人情報の扱いにも十分留意しながら、研究を進めていく。										
到達目標	自ら問題点を探求し、解決できる。										

授業計画

回	テーマ	授業内容
1	症例研究とは、症例研究テーマの立案①	ケースノートをまとめる。
2	症例研究とは、症例研究テーマの立案②	ケースノートをまとめる。
3	症例研究とは、症例研究テーマの立案③	ケースノートをまとめる。
4	症例研究とは、症例研究テーマの立案④	ケースノートをまとめる。
5	症例研究とは、症例研究テーマの立案⑤	ケースノートをまとめる。
6	症例研究とは、症例研究テーマの立案⑥	ケースノートに応じて主題や副題を設定する。
7	症例研究の倫理①	個人情報の扱い方や伊の倫理に関して学習する。
8	症例研究の倫理②	個人情報の扱い方や伊の倫理に関して学習する。
9	症例研究の倫理③	個人情報の扱い方や伊の倫理に関して学習する。
10	症例研究の倫理④	個人情報の扱い方や伊の倫理に関して学習する。
11	症例研究の倫理⑤	個人情報の扱い方や伊の倫理に関して学習する。
12	文献検索①	参考・飲用文献の検索方法を学び、正しく記載する。
13	文献検索②	参考・飲用文献の検索方法を学び、正しく記載する。
14	文献検索③	参考・飲用文献の検索方法を学び、正しく記載する。
15	文献検索④	参考・飲用文献の検索方法を学び、正しく記載する。

授業計画		
回	テーマ	授業内容
16	症例研究レポートの作成①	レジュメを作成する。
17	症例研究レポートの作成②	レジュメを作成する。
18	症例研究レポートの作成③	レジュメを作成する。
19	症例研究レポートの作成④	レジュメを作成する。
20	症例研究レポートの作成⑤	レジュメを作成する。
21	症例研究レポートの作成⑥	レジュメを作成する。
22	症例研究レポートの作成⑦	レジュメを作成する。
23	症例研究レポートの作成⑧	レジュメを作成する。
24	症例研究レポートの作成⑨	レジュメを作成する。
25	症例研究発表スライド作成①	発表スライドを作成し、発表練習を行う。
26	症例研究発表スライド作成②	発表スライドを作成し、発表練習を行う。
27	症例研究発表スライド作成③	発表スライドを作成し、発表練習を行う。
28	症例研究発表スライド作成④	発表スライドを作成し、発表練習を行う。
29	症例研究発表	
30	症例研究発表	

準備学習(予習復習)の具体的な内容	特になし。
成績評価	☐ 定期試験（　　%）☐ 実技試験（　　%）☐ 小テスト（　　%）☐ レポート（　　%） ☑ 課題（ 20 %）☑ 発表（ 80 %）☐ その他（　　）
教科書	特になし。
参考書	症例に応じて、各分野の専門書を参照してください。
授業の留意点・備考	officeが搭載されたパソコンを準備してください。